堀口大學

譯詩集

新篇

月下の一群

東京

第一書房

千九百二十八年刊

佐藤春夫におくる

新編　月下の一群の序

曩に上梓して世に問ふた、二つの譯詩集　月下の一群　と　空しき花束とが、その後、版元の都合で、絶版になつたので、今度、更めて、さきの二集の内容を、打つて一丸となして、それにその後の新譯數編をも加へて、この新集を編むことにした。

さきの二集中の一册の題名、月下の一群に、新編の二字を冠して、そのまゝこの新集に用ひたのは、專ら、江湖諸彦が、誤つて、この集の内容を、譯しおろしの新詩篇のみだと思ひ給ふこと無からんが爲めの婆心に他ならない。

この新集を編むに當つて、譯者は、前二集の内容に多少の斧鑿を加へて見た。その際、取捨增減の方針としては、この新集に、譯者の力の可能なる範圍内にあつて、成る可く多く、佛蘭西近代詩の詞華集としての性質を、備ひさせることを第一の目的とした。

前の二集にあつては、一詩人で、よく百頁近くも紙數を占領してゐる者が數家あつたが、　この新集に於いては、成るべくそんなことの無いやうにして、各々の詩人の代表的な作品を數編づつ掲げるにとどめた。

　これは、昨年以來、同じ譯者によつて、同じ版元から、出版されてゐる、既刊のヴェルレエヌ詩抄、アポリネエル詩抄、ジャム詩抄、グウルモン詩抄、及び今後漸時出版される筈になつてゐる、コクトオ詩抄、ポオル・フオル詩抄、ギイ・シャルル・クロス詩抄、サマン詩抄等の各詩人の家集の內容と、この新集の內容との間に、甚しい重複を避けんが爲めの譯者の小さな注意であることを附記して置く。

　本集にはまた、空しき花束から移して、佛蘭西に於ける近代詩發生以前の佳篇數章も加はつてゐる。クレマン・マロ、トリスタン・レルミットの作品及び十七八世紀の民謠等がそれである。

東京にて

千九百二十八年七月二十四日

譯者

新編　月下の一群

眠る女　ポオル・ヴァレリイ

魂はやさしき假面により
花のにほひをかぎながら
若い私の戀人は
その心のうちに
如何なる祕密を煮ずるか？
僞りなきかの女の戀情
如何なる空しき糧によりて
眠る女のかがやきをなすか？

呼吸　思ひ　沈黙　おかしがたき静さ
おお　涙より力強き安息よ　お前は勝つ
この深き眠りのうちに
おごそかなる波と心やすさと
かかる敵の胸の上にて
陰謀を運らす時に。

眠る女よ　影とものうさの
金いろの堆かき一塊よ
葡萄の房のかたはらに
ものうげに長長と横たはりたる牝鹿よ
汝が安息は心許しがたし。

汝が魂は地獄に行きて不在なるも
しなやかなる汝が片腕にのみ被はるる
美しき形よき腹もてる汝が肉體は
目ざめたり
汝が肉體は目ざめたり
わが眼ひらきたり。

風神

ボオル・ヴァレリイ

人は見ね　人こそ知らね
ありなしの
われは匂ひぞ
風やもて來し！

人は見ね　人こそ知らね
偶然かはたは鬼神か
來しと見しそのたまゆらに
業は果てつる！

わが詩は人讀ます
人知らず
博士も解かず。

人は見ね　人こそ知らね
シユミイズを替ふるつかのま
あらはなる乳房さながら！

失はれた美酒　　ポオル・ヴアレリイ

一と日われ海を旅して
（いづこの空の下なりけん　今は覺えず）
美酒少し海へ流しぬ
「虛無」にする供物の爲めに。

おお酒よ　誰か汝が消失を欲したる？
あるはわれ易占に從ひたるか？
あるはまた酒流しつつ血を思ふ
わが胸の祕密の爲めにせしなるか？

つかのまは薔薇いろの煙たちしが
たちまちに常の如すきとほり
清げにも海はのこりぬ……。

この酒を空しと云ふや？……波は酔ひたり
われは見き潮風のうちにさかまく
いと深きものの姿を！

慇懃

ポオル・ヴアレイリ

迂路（うろ）なり　曲線なり
僞るものの祕法なり
この遲緩（ゆるやか）さにまさる
やさしき術（すべ）　他にありや？

われは我が行くかたを知り
そこへ君を導かんと欲（ほつ）するなり
されどわが惡計（わるだくみ）
君を害（そこな）はんとにはあらず。

（ほこりかに
微笑してあれど
君はややに　わが無遠慮に
おどろきてあり）

迂路なり　曲線なり
僞るものの祕法なり
やさしき我が一語
君はなほ待ち給ふべし。

蜂　ポオル・ヴァレリイ

褐色の蜂よ　汝が針
かくも鋭く　かくも毒あるも
わが胸の美しき花籠を
われは思ひのダンテルをもて被ひたるのみ。

その上に「戀」の來て死にまた眠る
美しき瓢に似たる乳房をば刺せよ　蜂
かくて紅のわれをして　いささかは
圓みある反きがちなる肉の面に滲ましめよ！

われは速(すみや)かなる苦痛を希ふ
あらはに激しき痛み
故しらぬ惱みよりは堪へやすし！

わが感覺よ　痛ましきこの金色(こんじき)の針により
汝(なれ)目ざめてあれ　これなくば
戀は死に　戀は眠らんに！

假死女

ポオル・ヴアレリイ

貧しげに　優しげに　この美しき墓の上に
影とものうさと色ごとの過剰よりなる
汝が疲れたる艶の
この無感なる墓の上に
今　われは死に　われは汝が上に死に
われは倒れ　われはくづるる。

されどこの低き墓の上に
われ横たはると見るまに
すき間なく閉ざされし墓石は
われを灰に招きて
死せるが如かりしこの女のうちに
生はまた歸り來り
わななき　眼をひらき
われに點火し　われを嚙む
かくて此處もまたしても
生よりもなほ甘味なる新しき死をば
われよりむしりとり去るなり。

足音

ポオル・ヴアレリイ

私の沈默の子供たち　お前の足音は
靜かにつつましやかに
つめたくも聲をひそめて
待ち侘びる私の床の方へ來る。

清い女よ　神神しい影よ
つつしみ深いお前の足音が
ああ　何とやさしいことだ！
ありとある尊い寶が

今　お前のはだしの足にのつて
私の方へ來る！

若しもお前が
差しのべたその肾の上に
わたしの思ひをなぐさめる
接吻を持つて來たとしても。

やさしいその身振を急いではくれるな
ありなしのこのつかの間の心地よさ
お前を待つてゐた間
お前の足音が私の心であつたのだ。

紡ぐ少女

ポオル・ヴアレリイ

小鳥なきしきる庭見ゆる
小窓の青きに坐して　紡ぐ少女
古き絲車のうなりに心ねむりぬ。

青空を呼吸し　力なき指の間をのがれ行く
忍從なる毛絲を紡ぐにも飽きて
かの女今夢む　首だれて。

一本の樹木と淸らかなる風と
陽のうちに浮びては泉の如くさわやかに
落花もて灑ぐ靜かなる庭の面。

漂泊の風來り　いこひては枝をため
美しき薔薇の一輪を
年經て黑き絲車に捧ぐる風情。

かかる時　眠る少女は夢路をたどり
氣疎くもほのかなる影のごと
ほそ長き指もて髮をあむ。

天使めくものうさに　休みなくしづしづと
幻の苧環に夢はいま卷かれ行く
撫づる手の下に髮は波うちて……。

おびたたしき花の後に青空はひそみ
紡ぐ少女は涵る　木の葉と光の中に
緑の空は死に　最後の木立は燃ゆ。

少女よ　汝が妹　聖らなる薔薇の花けがれなき
呼吸をもて汝が額を匂はしむ
斯くてこそ汝あこがれを知りそむれ……。
汝が紡ぎゐし小窓の青きに汝が姿は消えぬ。

フオオヌの午後　マラルメ

フオオヌ（斷章）

かのネンフの群　何時までもわが爲めにあれかし。

かの女等の肉體のうす桃いろ
かくも明るくて　深き眠りにおち入りつつも
日の前にひるがへるやうなるけはひ。

思ふ　おのれこの年月　空しき夢をのみ愛でゐしなるか？

すぎける夜の惱みの塚山　わが日頃の疑ひも
ここ森のはて　まばらなる葉かげに來て見れば解けぬ
ああ！　今し知る　森の奧深く住みける日　おのれ一人ゐて
ただに空しき薔薇の形なき罪を愛でゐしなりと。

思へ……

フォオヌよ　日ごろ汝が非難するかの女人たち
怪異なる汝が官能のねがひの一つにひそみゐしなるか！

涙する泉の如くつつましき中の一人の
青く冷たき瞳より　この妄念は來るなるか
されども吐息する他の一人は汝が毛衣の中を吹く
日中の熱き軟風と對比せん爲めよとばかり汝解說んとするか
否とよ！　なやましく身じろがぬ眩暈のうちにありて

涼しき午前暑さに惱みつつ戰ふも
わが笛のそそぐにあらざれば笛の音にうるほへるわが森に
水のささやき聞ゆることあらじ　風ただありて
笛より流れ　大雨のうちにその音きこえざるひまに
亂すひだとてもなき地平線の上より
感興の日に見ゆる精緻なる呼吸はみ空へかへる。

扇子　マラルメ

とざされて
私は
あなたの
指のあひだで
王の笏。

美しい女あるじよ
この王位に安んじて
どうか
私を開かずに
おいてください。

もしも
私が
そのたびごとに
あなたの微笑を
かくさねばならぬなら。

幽靈　マラルメ

月空に悲しめり。熾天使夢みつつ　弓を手に
立ちのぼる花の香のしづけき中に
青ざめし花冠の上をすべるなる
白き啜り泣きの胡弓をば
消なば消ぬがに彈きいづる
——思ふ　そは汝が最初の接吻のよき日なり
夢わが身をさいなむを愛でて
悔恨もなげきもなくてその夢の收穫を

とりいるる心のままに
おのれかしこくも悲みの香料に醉ひ痴れゐたり
街上の夕暮にかみの毛日をあびて
笑ひつつ汝わが前にあらはれし時
古びたる甃石に眼うばはれて　われさまよひゐたり
さてわれ疑ひぬ　かつてめぐし見なりし日の
わがねむりにあらはれて
香はしき星くづの花束を雪のごと
そが指のすき間より降らせつつ消え行きし
光明の冠せるかの天女をばいま目のあたり見るにやはあらずかと。

ためいき　マラルメ

わぎもこよ　わがこころ　いま立ちのぼる立ちのぼる
日やけに黄みたる秋のそこに夢見る汝が前額の方へ
はたは天使めく汝がまなざしの果しなく廣がれる空の方へ
といきする白き噴水の水に似て
わぎもこよ　わがこころ　いま立ちのぼる立ちのぼる
――黄みたる太陽の永き光の立ち去り迷ひ
吹く風の冷たくみだす落葉の群の
褐いろの惱み漂へるをどみたる池水に
そが果しなきもの憂さと疲れとを映したる
青ざめ淸き十月のやさしき碧空の方へ
わぎもこよ　わがこころ　いま立ちのぼる　立ちのぼる。

眞晝の聖母　ポオル・クロオデル

時はいま眞晝なり
われは見る寺院の扉ひらかれてあるを
いざ入るべかり
基督の母よ！
わが來るは祈らんが爲めならず。

われ捧ぐべき何物も
求むべき何物をも有せず
われは此處に來る　聖母よ
たたに汝を見んが爲めに。

汝を見　幸福に泣き
またわれは汝が子にして
汝そこに在ますことを知らんが爲めに。

眞晝！
もの皆の止まるこの瞬間を
汝います此處に
汝と共にあらんが爲めに。

言葉なく汝が面に眺め入り
心をしてそが思ふがままを歌はしめんが爲めに。

言葉なく
ただかくも滿ちたる心をして歌はしめんが爲めに
斷れ斷れなる節にそが思ひを寄する
かのつぐみの如く。

汝は美しく
汝は無垢なれば
汝はめぐみによりてつくられし女なれば。

また汝は
そが本然の光榮の曉に
神より生れしままなる
人類の最初のほまれにして
また最後の花盛りなれば。

また云ひやうもなく清浄に
汝はその腕の中に抱ける
眞實にしてまた唯一の希望
唯一の果實なる基督の母にておはせば。

汝は女にておはせば
（今は忘られし昔の戀のエデンの園生）
汝が瞳は忽ちにして人の心を見出し
また堪へ得ずして涙を涌かさしむれば。

汝はわれを救ひ給ひければ
汝はまたフランスを救ひ給ひければ
フランスも亦わが如く
汝が案じ憂ふるものなりければ。

もの皆の揺ぎ出せし時に
汝は手を下し給ひければ
汝またしても
フランスを救ひ給ひければ。

今時は眞晝なれば
今我れ今日のこの日にあれば
汝は常にそこにおはせば
汝はマリヤにておはせば
汝はまことにおはし給へば
基督の母よ　わが感謝を享けよ！

斷章　クロオデル

またしても多くの暗い日のあとで
やさしい太陽が青い空に輝き出す
やがて冬が終り　やがてまた春が來る
さうして朝は麻の衣を着て進み出る
不吉な鴉の鳴き聲と
啜り泣く北風の口笛のあとで
今私は鶫(つぐみ)の鳴くのをきく！

鈴掛の幹の上で先きほど私は見た
穴から匍ひ出して來る悠悠たる裸蟲を
すべては輝き　溫まり　ひらきのびて
生一本のよろこびが　神神しさが
やがて來る夏の信念が
少しづつ生長し行き渡る！
かすかに私の頰をなでて吹く
まだ力よわいこの微風は
私は知つてゐる　これが佛蘭西だ！

ミラボオ橋　アポリネエル

ミラボオ橋の下をセエヌ河が流れ
われ等の戀が流れる
わたしは思ひ出す
惱みのあとには樂しみが來ると

日が暮れて鐘が鳴る
月日は流れわたしは殘る

手と手をつなぎ顔と顔を向け合はう
かうしてゐると
われ等の腕の橋の下を
疲れた無窮の時が流れる

日が暮れて鐘が鳴る
月日は流れわたしは残る

流れる水のやうに戀もまた死んで逝く
戀もまた死んで逝く
生命ばかりが長く
希望ばかりが大きい

日が暮れて鐘が鳴る
月日は流れわたしは残る

日が去り月が行き
過ぎた時も
昔の戀も　ふたたびは歸らない
ミラボオ橋の下をセエヌ河が流れる

日が暮れて鐘が鳴る
月日は流れわたしは残る

サロメ

アポリネエル

もう一度ジヤン・バプチストを微笑させる爲めになら
王よ　わたしは熾天使より巧みに踊りませう
母よ　あなたは何故におさびしいのです
ドオフアンの側に伯爵夫人の着物をきて

茴香の花の中に彼の聲をききながらわたしが踊つた時
彼の杖を飾る爲めの彩旗に
わたしが百合の縫ひとりをしてゐた時
わたしの心臓は強く強く鳴りました

それなのに今誰の爲めにわたしは縫ひ取りを致しませうか
彼の杖はジヨルダン河の岸に歸つて花を咲かせてゐます
エロオド王よ　あなたの兵士たちが彼を引立てて來た時に
わたしの庭の百合の花は皆一度に凋れました

皆のものよ　わたしと一緒に五列樹の陰においで
美しい王の道化役よ　お泣きでない
お前の鈴のついた笏を置いてこの首をとれ　さうして踊れ
母よ　ふれ給ふな　彼の前額はもう冷たいのです

王よ　薙刀兵の前に進め　うしろに進め
穴を掘つてその中へ彼を埋めませう
花を植ゑて輪になつて踊りませう

わたしが靴下どめを失ふまで
王が煙草入を失ふまで
王子が數珠を失ふまで
僧正が祈禱書を失ふまで

獄中歌

アポリネエル

I

監房へはひる前に
わたしは裸體にむかれた
すると悲しい聲が吠え出した
ギイヨオム　貴様は何のざまだ　と

墓穴から匐出して來たラザアルのやうな姿で
わたしはあべこべにはひるのだ
あばよ　しばよ　陽氣な友よ
昔よ　女よ　さよならよ

II

ここでわたしはもう
自分で自分のやうな氣がしない
わたしは今では
十一班の十五番といふ物だ

窓の硝子ごしに
太陽が流れこむ
光線はわたしが書いた詩稿の上で
道化役者に化けて

紙の上で踊り出す
わたしは耳を傾ける
誰かが足で
天井をたたく

III

熊のやうに溝の中を
毎朝わたしは散歩する
いつも同じ場所を廻りながら
空は青い　鎖のやうにつながれて
熊のやうに溝の中を
毎朝わたしは散歩する

隣の監房では
噴水をぶつぱなす
鍵をがちやがちや鳴らせながら
看守が行つたり來たり
隣の監房では
噴水をぶつぱなす

IV

青白い赤裸(はだか)の四壁(しへき)の中で
わたしはなんと退屈だ
一匹の蠅が紙の上の不揃の
わたしの手蹟をつたつて小股(こまた)に歩む

わたしの苦悶を御承知の神さまよ
わたしは一體どうなるのでございませう
實はこの難儀もあなたが下さつたのだ
涙も流れぬわたしの目と蒼ざめたわたしの顔と
鎖でしばられたわたしの椅子の響と

この監獄の中で動いてゐる澤山な可愛(かあい)さうな心臓と
わたしにまだつきまとつてゐるいろ戀とを
御憐れみ下さい　殊にわたしの此の弱い理性と

忽にそれを負してしまふこの自棄とを
神さま　特別に御憐れみ下さい

V

時は靜かに過ぎる
葬列のやうだ

それなのにやがてお前は泣くだらう
泣いて過す今の時も

ほかの時と同じやうに
あまりに早く去つてしまつたと

VI

市の響にわたしは耳を傾ける
見晴をもたぬ罪人のわたしには
意地のわるげな青空と
監獄の壁が見えるばっかりだ

日が暮れて行く　そうら見ろ
監獄の中にもランプが一つ點いた
美しい光よ　なつかしい理性よ
監房の中でおれたちは皆一人ぼっちだ

狩の角笛　アポリネエル

わたしたちの戀物語は上品で痛ましい
まるで暴君の顔のやうだ
別にこれといふ悲劇もないが
と云つてどの部分もまた忘れ難い

さうしてトオマス・ド・クキンシイは
甘いつつましい毒のオピオムをのみながら
彼の哀れなアンヌの身の上を思ひつづけました
さあ過ぎ去らう　過ぎ去らう　すべて過ぎ去るが運命だ

思ひ出は狩の角笛
風の中で音は消えて

蛇

アポリネエル

お前は美人に夢中になる
さうしてまたすばらしい女たちが　よくも
お前の薄情の犠牲になつたものだ！
エェヴ　ユウリデイス　クレオパトラ
そのほか私が知つてゐるだけでも
なほ四五人はある。

野兎　アポリネエル

お前は野兎の牡のやうに　戀人のやうに
好色であり　臆病であつてはならぬ
然しそれにしてもお前の腦味噌は
孕んでゐてもまた孕む
野兎の牝のやうであれ。

二十日鼠　アポリネエル

「時」の二十日鼠　君等美しい日日よ
君等は少しづつ私の生命を齧ちる
やがて私も二十八歳
不滿な暮しをしてゐる程に。

毛　蟲

アポリネエル

働く事は金持をつくる
貧乏な詩人よ　働かう！
毛蟲は休みなく苦勞して
豐麗な蝶となる。

蚤

アポリネエル

蚤も　友人も　戀人も
どれも　我等を愛するものは殘酷だ！
我等の血は悉く彼等の爲めに吸はれる。
ああ　愛せられるのは禍ひだ。

アンニイ

アポリネエル

モビルとガルヴエストンの間（かん）
テキサス州の海岸に
薔薇が一面さきにほふ
大きな大きな庭がある
そこには別荘（ヴイラ）が一つある
それも大きな薔薇ですね
たつた一人でその庭を
一人の女が散歩する
菩提樹並木の往きかへり
私はかの女を見かけます

かの女はメンノニットです
だからかの女の薔薇の木には
蕾が一つもありません
だからかの女の着物には
釦が一つもありません
私の着てゐる背廣にも
釦が二つ足りません
だから私は云ふのです
あの貴婦人と私とは
同じ教義の信者だと

シヤボン玉　ジヤン・コクトオ

断章

シヤボン玉の中へは
庭は這入ません
まはりをくるくる廻つてゐます。

手風琴　ジャン・コクトオ

馬車馬のやうな手風琴よ
断末魔の呼吸を引きとつて
お前は今死んでゆく
御者の膝の上で
歯をむき出して笑ひながら

犬は近くで吠え　ジャン・コクトオ

犬は近くで吠え　鷄は遠くで鳴く
これがお前のくせだ　憎らしい田園よ
けれども四月は翌朝をまるで變へてしまふ
四月は果樹の梢に繻子の帆をかかげ

葡萄畑と蝶の上に同じ硫黄を塗りつけ
地を困らせぬ程度に太陽を増し
薔薇の酒の中で雄蜂を酔はせ
切れた戀の緣の絲を結びなほす

殘忍な神神に愛される詩人がかう云つて歌ふ・
彼には　ジャニュスのやうに　澤山な口がある

偶作　ジャン・コクトオ

お前の名前を彫るがよい
やがて天までとどくほど
大きくなる木の幹に
立木の方が大理石よりも得(とく)なのだ
そこに彫りつけた名前も大きくなる

パットリイ　ジャン・コクトオ

斷章

太陽よ　僕は君を愛する
野蠻人のやうに　砂濱に腹ばつて

太陽よ　君は風景に
果物籠に　動物に金を塗る

僕の身體を鞣して鹽漬にしてくれ
僕の悲しみを散らしてくれ

齒の光る黒奴(くろんぼ)は
外面(そと)は黒いが内面(うち)は桃いろだ
僕は内面(うち)が黒くつて　外面(そと)が桃いろだ
轉身をしてくれ

僕の匂ひと色とを變へてくれ
君がヒヤシンスを花に變へたやうに
松の木の上に蟬を鳴かせ
僕が麪包燒き釜の匂ひがするやうにしてくれ

正午　夜で一ぱいな木は
夕方には夜を彼の四圍にひろげる
太陽よ　アダムとエブの蟒蛇よ
僕の惡の夢をひろめてくれ

僕の哀れな友のジャンが死んだことに
もつと僕をならしてくれ

……………………………
……………………………

三十歳になつた詩人

ジヤン・コクトオ

私は今人生の中途に來た
私は私の美しい家の上に馬乘りにまたがつてゐる
兩側に私は同じ景色を見る
然し右と左と季節は同じでない。

此處では赤地が若い羚羊の角のやうな
葡萄のつるに被はれてゐる
ぶら下つた洗濯もの　笑ひや　合圖が今日をむかへる
彼處には見える　冬と私に酬いられる名譽とが。

美神よ　お前に謝す　お前はまだ私を愛してゐると云ふのだが
若しも私がお前を歌はなかつたとしたら
若しも私の家が私の詩で出來てゐなかつたとしたら
私は空を踏んで屋根から落ちるだらう。

耳

ジャン・コクトオ

私の耳は貝のから
海の響をなつかしむ。

踊り子　ジャン・コクトオ

爪先で歩きながら蟹が這ひ出る
兩腕を花籠のやうに捧げて
耳元まで微笑して。

オペラの踊り子も
蟹に似て
きらびやかな樂屋廊下へ
腕を輪にして出てまゐる。

山鳩　ジャン・コクトオ

二羽の山鳩が
やさしい心で
愛し合ひました
その餘は
申し上げかねまする

うろこ雲　ジャン・コクトオ

空のうろこ雲
脂粉の女の美しさ
どれもながくは
もちません

五月の朝　ジャン・コクトオ

よく晴れた五月の朝
どのねえさんも
みなさんが
戸口に椅子を持ち出して
またがつて
ステイプル・チェズたのしいこと
おかみさんのおゆるしです

人魚

ジャン・コクトオ

眞水（まみづ）の中に住む人魚たちよ
君等は水夫を
見習水夫をひきつける

ユウリスの一黨　ジャン・コクトオ

哀れな人魚たちよ
またしてもユウリスの一黨が君等の處へ來るが
用心するがよい
あの男たちは遠い海から
シフイリスのものの哀れを持つて來る

少年水夫

ジャン・コクトオ

死人のやうに蒼ざめた少年水夫
彼にはこれが初めての航海です
彼は感じる
不思議な貝があつて
下の方で
彼を呑み　彼を噛むと

黑奴美人　ジャン・コクトオ

黑奴美人は半開の戸棚ですね
中には濡れた珊瑚がしまつてある

昆蟲あみ　レエモン・ラジゲ

「蝶よ　君は不人情だ！
昨日から僕は君を追ひかけてゐる」
道で行き逢つた小學生が
かうつぶやいてゐました

ドミノ

レエモン・ラジゲ

ドミノは家庭遊戯です
田舎の宵の樂しみです
祖父さんの諺を聞きませう
「三つ兒の根性百までも」

屛風

レエモン・ラジゲ

白百合のやうに清淨な少女よ
屛風のかげであなたは裸になる
このお行儀が私を悲しませるので
あなたはひなげしのやうに赤くなる

頭文字

レエモン・ラジゲ

砂の上に我等のやうに
抱き合つてる頭文字
このはかない紋章より先きに
われ等の戀が消えませう

石榴水

レエモン・ラジゲ

戀は一番に輕症(かる)い熱病だ！
私のなやみの凡(すべ)てを去つてく
舒の色をした石榴水
見てゐるだけで私は醉ふ

貯金箱

レエモン・ラジゲ

子供よ　やがてお前は讀み書きを覺えませう
さうしたら澤山に御褒美を上げませう
一つの重い貯金箱が
何より輕い重荷でせう

結婚式

レエモン・ラジゲ

羊よりもやさしく　羊よりも白く
雲の一群が進み出る
羊牧の女はハイカラでした
ことにかの女は暴風雨(あらし)を愛した

やがて暫くしたら一番に大切なことは
黙りこまずにゐることです
虹が空に出たら
村長さんの佩帯に似るでせう

ヴエニュスの墓　　レエモン・ラジゲ

あなた達の桃色の耳は波の玩具です
波より身輕な私の從姉妹たちよ
何故に海の男聲合唱があなた達を戰慄させますか？
あそこにヴエニュスが來てゐます
（然しそれにしても私の從姉妹たちよ

大きくなりたいとお思ひなら
油斷をしては駄目ですよ）
今日は駝鳥の羽のとり入れです
穗先のちぢれた波の花束はヴェニュスの扇です
若しもかの女が溺れて死んだなら
皆してかの女の爲めに
貝がらで墓をつくつてやりませう

巴里の河岸

レエモン・ラジゲ

貝がらのかはりに
人たちは古本屋の見世箱を竝べました
賞典に戴いた御本の中で私は學びました
もつとこれより美しい岸邊がよそにあると

友よ　いさ　待たずに錨をあげよう
インキ壺は海のやうにさびしい
お願ひだから
もうインキで書くことはやめてくれ給へ
インキ壺の中から釣りあげる言葉は苦（にが）いのだ
海の水のやうに

醉つた小鳥

ヂオルヂ・ガボリイ

お酒のせゐもあつたのです
私の接吻が一寸(ちよつと)さはつたばかりで
あなたのほの白い顔は
やさしく來て私の肩にもたれたのです。

默つていらつしやいよ　空には耳がありますよ
少女よ　二人は愛し合ひました
とざされた帳のかげで
意地悪るな蜜蜂が澤山ゐたにもかかはらず。

あなたが私の胸の中に抱かれて
彼等がおしやべりをするかとおそれて
わななきながら蜜蜂だと思つて
ながめてゐるのは空の星ですよ。

海景

ヂオルヂ・ガボリイ

わたしのすすり泣の聲をきくがよい……
草の中に交(まじ)り咲いたけしの花のやうに
波間にゆれる美しい
一艘の帆船でそれがあつたのだ……。

「TOUR DU MONDE」の船長よ
夜はむし暑い　あなたは思つてゐる
あなたに接吻されながら笑ひ出す
金髪美人の匂ひを……。

私の畫筆が生んだ海洋が
岸から遠くあなたをうばひ去る
船を焼きすててしまつたら
泳いでかへるより仕方がない。

海洋

チオルヂ・ガボリイ

夜明の光がお前の頬を若く見せ
さびしいあかつきの星の光が
我等の運命のオペラの行はれる
舞臺を照す。

我等はこのお手輕な筏に乘つて
あてもなくさまよふ旅人だ
我等が若しも泳ぎを知らなかつたなら
漆の海に溺れて死ぬであらう。

さびしい星よ　私はもう一度お前を見るだらうか？
もの憂げに幕はおり
さうして背景の繪の海は
また一人新しい女神を生む。

帆を張る私の思ひ出の中に
輕業師の人魚が一人泳いでゐる
ああ　かの女は光ることだ
私のネクタイピンの眞珠のやうに。

ハムレットの影

ヂオルヂ・ガボリイ

一枚の少女(をとめ)のきもの
それは雨の中の虹でせう——
彼は葉卷をくゆらせる　葉卷が光る
さうしてオフエリヤの死を考へる。

女の心のやうに桃いろで
きゆうくつな舞臺を歩きながら
樂屋へひつこむ前に
メロドラマの黒奴(くろんぼ)のピエロどの。

王子は指環をもてあそびながら
目には見えないやさしい海の波が
ささやく彼の名には氣がつかずに
笑ひながら行つてしまひなさる。

窓かけの間に立つて
こめかみを指でおさへて
夢想する主人の足許にためいきをしながら
晩に私がランプを消す時分。

—

落葉の上に書く　チオルチ・カボリイ

われ等二人は一緒にねむりませう
夕暮　他の戀人たちが來るでせう
この鏡の上に影を映す爲めに
わななく水の中のやうにわななきながら。

貝がらの中に閉ぢこめられて
海は唄ふ　近くまた遠く……
波のなげきの音にまじつて
戀人よ　お前の聲が聞えて來る。

私は落葉に書いてお前に送る
それなのに笑ふ女よ　お前は知らぬのだ
風が吹き送る時に
それ等の落葉がお前の足に踏みくだかれるのだと。

同じ落葉の上に書く　チオルヂ・ガボリイ

私の生命（いのち）は　とあるさびしげな枯木から
私がそこに犬と薔薇と鳩とを
殘して來た道の上に
散つて來る落葉です。

私は殘して來たのです
そんじよそこらの戀人の膝の上に
私の肉體と心臟と魂とを
私が若さでつくつた花環は凋れ出しました。

さうして夜毎に私はきくのです
灰の色をした庭の中で
終りに近づいたわれ等の戀を
泣いて悲しむ思ひ出の風を。

造花

チオルヂ・ガボリイ

くもつた硝子棚の中で
昔　ひとつの薔薇の花が光りました
花のなやみのかんばしく匂うた
濕りがちな庭の木陰で。

時は今空しくその砂を失ふのです
雪の中に冬の夜中に……
咲いた心のやうな薔薇の花が
静かにねむつて卓子の上に……。

やさしいメランコリヤが
お前と一緒に家の中へはひつてくる
さうして私は感ずるのです　私の理性が
雨の下の薔薇の花のやうに死んで行くのを。

オペラ・コミック

チオルヂ・ガボリイ

大氣よ私の渇をいやせ
星辰よ私の飢ゑをしづめよ!
匂ひのない菩提樹のかげで
心やさしいウエルテルが泣いてゐます。

ゆるやかな歩みに日が暮れて
同じ舞臺に別な戀
角笛の響きと共に公爵どのは死んでゆく
才能多い人であつたが！

二階の露臺では
ロメオとジュリエット
昔ながらの二部合唱（デュエット）を歌ひ出す
伴奏は鶯がうけたまはる……。

戀のなやみ　チオルヂ・ガボリイ

私の心臟はチョコレイトです！
鶯の嘴を持つた鳩よ
お前は私の胸をひき裂いたのだが
一體私の戀はどうしてくれたのか。

繻子のマントに包まれた
素肌の白い肩一つ
それを私は抱へてみたのです
モンマルトルのある朝に……。

頬べにをつけた雫だまよ！
平野水の中に住む水精（ニンフ）
來て元氣をつけておくれ
どうやら萎みがちなこの心臓に。

戀歌

チオルチ・ガボリイ

冬の一夜
狹いうす暗い路地奥で
一人の詩人が死んで行く
彼を愛する親しいやさしい手が
今では他界にひらかれた彼の眼を
とざしに來るのを待ちもせず。

自の影を追ふ旅人のやうに
彼はながいこと歩いたのです
この眠つてゐる市の中を。
あなたが踊り場からお出になる頃には
巴里の市はまだ眠つてゐるのです
あなたが淫なダンスをしておいでになつたひまに
苦惱と貧窮と鬱幽とが
詩人ヂエラアル・ド・ネルヴアルの首に
首つり綱を結んだのです
雪が降る
左様なら
氣の毒なオオレリイの戀人よ！

いま私の机の上で
薔薇の花が一輪やさしく眠つてゐます

日月は過ぎる　時は流れる　後へ後へと……
私の心よ　哀れな心よ　さうではないか！
詩を賣る家業に比べたら
媚を賣る家業の方がまだ増しではないか
この頁はあぶり出しインキで書いてございます
お讀み下さる美しい眼よ
この詩を通じてその作者を愛していただきたい
あなたのお氣に召すことだけが
唯一の彼の詩法です！
私の詩は悉く落葉の上に書かれました
詩の女神が私の膝にもたれかかつて
なまめかしい吐息をもらしたとしても
お氣の毒ですがそれは無駄でせう
美しい女たちよ
私たち詩人の冠を編んでくれるのは

どの道あなた方のやさしい指なのです
戀人よ　もしも私がそれを
あなたの白い手から受けることが出來たなら
私はいきなり　まつたなしに
私の堅拳の絃（いと）で
首を縊つて死にませう。

夜曲

チオルヂ・ガボリイ

疾の昔に地球はぐれてしまつたのだ
この退屈な世界からそろそろもう引き上げる潮時だ
詩の女神よ　夜は更けた　巴里は雨の中で眠つてゐる……
今宵私は凋れた心を抱いてお前の處へ歸つて來た。

そこに私が心を置き忘れて來た
あのきらびやかな廣間の中で
昨夜の假装舞踏會で
花の姿のあの少女は
私の腕の中にほほゑみながら

なんと美しかつたことだ……
詩の女神（ミユウズ）よ　幽鬱の花を摘まうよ！。

消えたランプとこはれた鏡と
假面と扇と凋れた薔薇と……
昔あまりに多くの接吻を與へたので
頬の隅が擦りむけてゐる奥さんの肖像と。

消えてゆく星と　散つた薔薇……
今宵私はあなたを思ふ
ふたたびは逢ふ時もあるまい
鐘よ　悲しげに時を報せよ！
眠る森の美女は目ざめなかつたのです……。

消えた燈籠

ヂオルヂ・ガボリ

夕日が地平線のあたりで
私の夢のお城を燒いてゐる
けがれのない理性の女神が
三鞭酒の波の間に沈みます。

二つづつ組んで心臓がとんで行く
さうして旗亭シテエルの奥庭で
あざ笑ふヴイオロンの音につれて
食卓が地の中に消えて行く。

おお　踊り場タバランの悲しみよ
お前は今私の室へ歸つて來た……
お前が平手で打つてゐる間
私の心臓は西班牙太鼓だつた。

張見世　ボオル・ヒイレンス

鳥籠のやうな格子戸の中で
高い牀机の上にとまつて
美しい小鳥よ　君等はかくすか
少女心のやさしい祕密を？

鳩ならば手紙を銜へて飛ぶが
君等は嘴に薔薇をふくむ
骸骨のやうに君等は住む
枯木の生える市の中に。

君等の古巣がゆれてゐる
山の泉と葉かげから遠いこの家に住んで
鐵の格子戸にすりあてて何故に傷つけようとするのか
君等の羽と桃いろの爪を?

寒けにかくれ家をたづねてゐる
燕尾服を着た燕の群を
秋の夕が電線の上に並べるやうに
美しい小鳥よ　君等も並んで。

自轉車散策

ポオル・ヒイレンス

左様なら　若い自轉車のり！
影は
青麥の上を走る。

村では早寢の鷄が
鳥屋(とや)のとまり木に背揃ひ
とさかは赤い屋根のやうに
石灰の枠のついた目の上に垂れる。

君はよく知つてゐる
君の手の中の筋よりも
これ等田舍のつち道を。

日曜日　倒柱戯のごろごろが
遠雷のまねすれば
射的の花矢は稻光り。

五時の寺には人氣なし
寒氣が君におぶさつた
君は暫くお祈りして
君はあたりを見まはした。

梁の垂木の中に住む
一羽の鳩が拍手した。

ゆつくり君は麥酒を飲んで
空のコップを下に置く
「かみさん　美事なお日和だ。」

左様なら！
若い自轉車のり！
ほんに美事なお日和だ。

このあたり道は靑ざめて。

土耳古うた　アンドレ・サルモン

一

お前の魂は私がそこで祈る爲めに建てられた寺院だ
然しそれにしても寺からの歸途に
私がこのやうに自分の不淨さを感じるのはどうした理由か
お前の心は寺院へ行く薔薇咲く小徑だ
然しそれにしても途中で幾度か私が迷ふのはどうした理由か。

二

戀人よ　若しもお前が月のやうにやさしかつたなら
私の夜頃は平和でせう
それなのにお前は　荒海の夕日のやうだ

若しもお前が默しがちな湖であつたなら
湖はやさしいお前の姿を浮べませう
それなのにお前は夕日を荒す海のやうだ。

三

人は云ふ　一人の基督教徒が
彼の前額を打つた石を集めて數珠を作つたと
彼は奴隷でありながら
サルタンよりも矜に滿ちてゐたと云ふことだ
戀人よ　お前の石の言葉をあつめて
私は私の冠を作つた
誰も私の冠には氣がつかぬが
私はあの基督教徒よりももつと矜に滿ちてゐる。

四

お前は知つてゐるか
何故にアラの神は似顔繪を禁じるかを？
戀人よ　若しも私が
愛す可きお前の顔を描いたら
私はお前の繪姿にばかり祈願禮拜するだらう
アラの神はすでに多くを私に許しなされたのだ。

五

お前の乳房は蜜のお菓子だ
お前の口は私を焦す唐辛子だ
お前の目は饗宴の燈火だ
それなのに　ああ　それなのに
お前が沈默すると
私は渇して死にさうだ。

六

私は名家に生れて人に使はれたことがない
熱病を治す隠者も私には用がない
それなのに　ああ　それなのに
戀人よ　私はお前を愛し
私は私の戀を歌ふ
これだけでもすでに立派な難行だ。

七

よく人に慣れた一羽の青い鳥が
山中に迷ひ子になつて
狂ほしいさまに主人を呼んでゐた
私はこの夕べをおそれる青い鳥なのだが
然し私は私の失つた主人に就いて何も知らぬのだ。

八

私はよろこんで死んだであらう
かちどきのわめきのうちに
又は　私の胸に抱かれて
お前が快樂に失神する時のお前の胸の上に
露の多い果物のやうに
それなのに私はいま死にさうだ
そこに死ぬことが出來ぬので
然しかう云つたとて何のことか
お前には果してわかるだらうか？

九

お前の頭髮の中に
私の愛するこの香料をたきこめておくれ
お前の裸形を私が彫んだ黃金の寶玉でかざつておくれ

さうして私がお前の爲めに書いた
これらの歌を歌つておくれ
さうしたら　私が死んだ後にも
ともすれば　愛人よ
私はお前を見知り得るかも知れぬ。

ダンス　アンドレ・サルモン

然しそれにしてもそれは
終りのないダンスだつた。

然しそれにしてもそれは
休みのないダンスだつた。

ゆるやかな死と酔心地と
ことばとにほひと
むすぼれ合ひ　もつれ合ひ
ダンスの中へとけこんだ。

二人は抱き合つて
ダンスを終らずに死んだ。

川

アンドレ・サルモン

冬は狩によし　夏は酒宴によし
宇宙が生れるにつけ死ぬにつけ
沈默！　輝き！　美しさ！　陽氣さ！
三途の川よ　私はお前の泊を思ふ。

女よ　心の悲しみからのがれ得て
夜の泡立つお前の水の中に
なつかしいセエヌ川を見出さうと
熱心に私は希望する！

短かい軸にお前の泥を押し分けながら
ガンヂス川の蓮華を切りつくし
さうして黒いお前の鏡の上にうなだれて
炎の詩句を書きしるしたい
ああ　私も私のペン軸を
メツチヤセベ川の蘆を切つて作りたい。

夏の死

アンドレ・サルモン

鶉よ　生垣の上で
狩人の鐵砲がぴかりと光つた
柳川原の向うで
秋はせつなく血を流す。

おお 季節よ！
おのれ酒の上に
汝が罪の匂ひをかげば
神 激しき山羊の匂ひもてわが理性を試す
アマチスの眠の上に
鳥の羽が一つ風に吹かれて舞ふ
死の證人 さうして饗宴の保證。

彼方で村は休んでゐる
昔の繪のやうに
薔薇の花環の中に。

歌

アンドレ・サルモン

詩人には光榮がある
小鳥は夕の空に住む
賣女は鏡の前にゐる
鼠は戸棚の中にゐる。

後家さんはすすり泣き
狂女は鈴をふり
白樺が歎く時
水が笑ひます。

お后様には身のかざり
侍童はお庭にたたずんで
癩病やみは塔の中
私は戀とただひとり。

ガンベッタ廣場

アンドレ・サルモン

炭と薪
酒さかな
人の生活（くらし）も
樂しかろ
心の重荷さへなくば。

火事

マックス・ジャコブ

火事は
ひろげた孔雀の尾の上に咲いた
一輪の薔薇ですね。

石を前に歌へる　マックス・ジャコブ

むす苔(こけ)にこの石が包まれてゐるやうに
私の魂は悲しみに包まれて
石なれば青苔の下にも生きるが
魂は悲しみに死にさうだ。

石には處處に　巖乘なしかもにこやかな
花崗岩の白さがすいて見えるのだが
魂よ　お前の上では
不運は一面だ　すきまもない。

お前を悲しませる言葉を高らかに笑へ
へつらふ者の前で微笑せよ
はや何物も動かし得ないのだ
お前が心の底に持つてゐるその屍を。

ふる雨から身をまもる爲めに
石には苔がある
吹く風は石を拭つてやる
夜明の光は石に化粧さへするのだが。

ああ　また何かしよう
富と勝利の両極に
人あつてわたしを宣するも
私の魂をなぐさめ得るは
ああ　ただに神の愛のみだ。

牧歌　マックス・ジャコブ

「私の何が欲しいの？」とメルキュウルがたづねます
「あなたの微笑と歯が欲しい」とヴェニュスが答へます
「みんな義歯(いれば)ですよ　私の何が欲しいの？」
「あなたの蛇杖(カデュツセエ)が欲しいの」
「この杖をはなすことが出來るものですか」
「杖を持つてここへおいでなさい　神さまの郵便配達よ」
これは希臘の原文で讀まねばうそです
これは「牧歌(イツヂイル)」と云ふのです

中學生であつた頃
よく落第する友人が私に云つたことがあるのです。
「二人でドオデェの小説を
希臘語に譯したら
後では實力がついて
試驗に及第するだらう！
然し殘念なことには
僕は夜學が出來ぬのだ。
それは母を泣かせるのだ！」
諸君　これも實は希臘の原文で讀むべきものなのです
これも亦「牧歌」ですよ
EIDULLOS即ち小景です。

地平線

マックス・ジャコブ

かの女の白い腕が
私の地平線のすべてでした。

ナポリの女乞食　マックス・ジャコブ

私がナポリに住んでゐた時　私の住居の戸口に一人の女乞食がゐた　毎日私は外出の馬車に乘る前に　かの女に小錢を投げてやつた。

或る日　かつて一度も感謝の言葉を耳にせぬのを不思議に思つて　私は女乞食を眺めた。

さて眺める私は其處に見た　私が女乞食と見まちがつてゐたものは　半分くされかけたバナナと赤土との入つてゐる綠色に塗つた木箱であつた。

强者の祕傳及他人の弱點

マックス・ジャコブ

マドレエヌは殆ど裸體になつてゐた　さうして皆がかの女の肩胛骨の下に薄毛の生えてゐるのを見るのであつた。一人の客人がたづねた

「二人して何をする處だつたのか？」と。

最初に私がかの女の股と脚と足の裏とを濡します　さうして私が一本の針をかの女の脊骨の上に動かせます　これと同時にかの女がやさしく私の左の手に嚙みつきます。

友人等が歸つて行つたあとで「あの男たちには云つて聞かせねば分らぬのだよ……ねえお前……然し私たちは　樂しむばつかりさ……さうだらう?」
然るに友人等は各自に自家へかへつて行つた　さうして針を探し出して
さて脊骨の何處へさしたらよいのかしらんと考へ込んだものだ。友人の一人はその情人と仲たがひをしてしまつたものだ。かの女はこの友人を瘋癲院へ送らねばならぬと云つてゐる。

戀慕流し

ポオル・モオラン

かの女が支拂停止をしたので
われ等かの女の戀人　われ等かの女の株主
われ等とざされた戸口の前で、かうして待つてゐるのです
眞夜中だ　かの女は眠つてゐるのでせうか？
この總會なぞは氣にもかけずに？
私の持病の狹心症は今夜も輕くはならぬらしい。

青い葉卷の煙のやうに
渦卷いて立ちのぼる
われ等の歌を
つれない女よ　聞いておくれ。

やさしい手箱よ　なつかしいどん底よ
そこな頭の上で　レアと一緒に
リュットも眠つてゐませうか
捲毛を冠のやうに額に竝べて
樂しい二人乘の自轉車散歩のやうに
または上品なけもののやうに。

われ等幕を張つて
やはらかな蒲團をつくりませう
レアよ　リュットよ　目をとぢてとびおりておいで
われ等の歌の節の上に。

すでに一人の戀人が
あなたのかたはらに眠つてゐるのなら
私は第三者として抗議します

萬一あなたはたつた一人で
夢に私を待ちながら眠つてゐるのだとしたら
レアも一人でシュミイズを着てねむつてゐるのだとしたら……

鎧戸からは何ももれて來ぬ
われ等が心をこめた歌も
どうやら無駄であるらしい……。

夜明の光とよごれたシイツの中で
嗄聲の雄鳥が呼び交す
桃色の伴よ　はきだめの花よ
君等が眠つてゐるひまに
私の戀はさめて行く　私の戀はさめて行く。

公衆浴場

ポオル・モオラン

メエントノンでは菜つ葉の浮んだユウル川の中
ホスゴオルでは燐のクリイムの中
スタアベルグでは毎週の金曜に
波をつくる機械を見物に行くのです
ウウルウッチでは煤の頸輪をして
人はそこから出て来ます
死海ではどうしても沈めません
リドでは侯爵夫人が
素裸で泳いでおいでになりました
キイ・ウエストでは鯛の稲妻の中で
ロワイヤンではお母さん達が

タオルと葡萄酒を持つて
娘たちの出るのを待つてゐます
バアスでは日傘をさして帽子を着て
カンでは蘆の中　副官どのの通る頃
ハバナでは月夜のポンチの中
チエツプでは英國通ひの郵船が
殘して行つた泡の中
ブタペストでは猶太人の死骸の中
アンダイエではビダソア川の
冷たい水の川口まで
シユワアビンではジロオドオが
水をくぐつて泳ぎます
タマリスでは艦隊の射撃の音で
海がゆらゆら搖れまする
ドオヴアでは潛水夫たちが失つた

肩衣が浮んでゐます
香港では重油の上に坐つた
綱鐵艦の周圍をまはりました
ボスフオラスでは水瓜の皮のあひだ
何と流れの強いことでせう！
フランゼスバッドではラヂウムの泥の中
ウインダアマアルでは退屈です
何時まで行つても背(せ)が立ちます
マジヨルカのパルマでは水の中で身體(からだ)が靑い
テラピアでは　人目を瞞着する爲めに
森の繪がその上に描いてある
スタンダァド・オイルのタンクの前
チイムシイでは冷たいインキの中
アルヂエシイラスでは
海がフェニシャの岬をころがしてゐます

バルセロナではヴエルカン工場の影の中
ファレエロでは金びかの衣を着て
綱渡りする女の下
(アヴロオの金閣の帆柱の間から
アクロポオルが見えまする)
タンヂエでは潛水夫の足のうらが眞白です
トレメッゾでは鳴る水の下
レイトでは餘つぽどお好きでなくつては
セゴヴイヤでは洗濯ものの乾してある急流で
巴里ではそれを水療治と申します

敬禮

ポオル・モオラン

私はいま晩餐をすました處です
土耳古風呂のあとのやうに
何と世界が私に輕いことです
今夜は珍しく頭の中で
墺塞間の紛爭の結果が響かない
夜は平手のやうに私の頬つぺたを打ちました
然し打たれても私は決鬪を申込みません
軌道の奥には鼠のゐさうな水溜があります
その根が瓦斯を吸つてゐるので
マロニエの影はこんなに青いのです

夜に對峙するホテル

ポオル・モオラン

キネマで見るやうな
悲痛なみどり色の空に
ホテルがその
鐵筋コンクリイトの
重い額(ひたひ)をよせかける
はりつめたその血管のなかを
熱湯が循環する　事もなげに
防火性のある蔦かづらが
その詩情で電氣を包む
夕暮にかこまれて
室室(ヘヤベヤ)の窓は注ぐ

桃いろのリキュウルを
ルヰ十六世式だ
すべてが實に氣もちよく
ルヰ十六世式だ

金襴の衣裳を着かざつた奥さんたちが
晩餐に行く身支度に忙がしい
みんながやきもきしてござる
押留めボタンがはまらぬので
雪白のカフスをよろこんで
うるし塗の紳士たちが
女たちの支度の出來るのを待つてゐる
夜にお灸をすゑながら
この時下階の方では
油を塗つた二つの昇降機が

それは磁石のたぐひなのだが
高いところの廊下は捨てておいて
（そこには室室の戸口の前に
茶椀の底に皺のよつたチヨコレエトが
ねむつてゐるのだが）
夜間勤務の玄關番の足許へ
寢る爲めにおりて來る
彼はいま晩めしを濟まして
これからつとめを始めるのだ
彼は退屈ですべすべしてゐる
彼は指で齒ぐきを掃除する
地下で蟋蟀が一つちらりと光る。

食堂からはフオクの笑聲がきこえて來る。

さてまた今夜も晩めしを食べるとしようか？

然し今　見るがよい
暗い窓の前に立つて
身うごきもせずに
室ボオイたちが
夜の綱鐵に頬をおしあてて
彼等のつかれと厭氣とを
脱ぎすてられた女の下着と
ちらばつてゐる空の寶石函との間に
ふり落してゐるのを。

西の公園で　ポオル・モオラン

自動車がとほる
うるし塗の扉の上に
通行人と
凸面的(とつめんてき)なユウカリプスと
でこぼこの芝生との
よればまがつた寫眞をうつしながら。
運轉手のとなりには喪服を着て
遊び道具の輪(セルソオ)を捧げ持つた
下男が坐つてゐる

車の中に私は見る
高貴な西班牙の一家族を
前列の椅子の上には
紫衣の少女が三人
重體量
うぶ毛があつて　その下に目が多すぎて
まゆ毛があつて　その下に
青い水のなかに浴みしてゐる
眼が多すぎて
車の奥には一家の嫡子
頤のない息子が坐つてゐる
鼻のある可き場所に
小さい黒い四角な羅紗の切を張つけて。

一番奥にはクッションの中に埋まつて
神父さんがのけぞりかへつておいでになる
窓はすつかりしめさせて
帯のある葉巻をくゆらせて。

寺の鐘
自動車の警笛
よごれた下着につつまれて
太陽が落ちて行く
冷たい風はグアダラマから吹いて來る
自動車の排氣管が空氣を振動させる
薔薇畑がそのために死ぬ。

懶惰

ロオザエ・アラアル

おお詩よ　美しい女蜘蛛よ
長い味のよい絲を吐いて
私の夏の日の爲めに
ひるねのハンモックを織つておくれ。

クラリス　ロオヂエ・アラアル

このあたり一面に暮れかかる
黄昏を扇ぐのにも疲れて
白いスカアトがしぼみます……
私の憂ひはなぐさまぬ。

カジノの花壇と
幾何學風なテニスと
紺とみどりの
暈にとけ合つて。

われ等の籐椅子に沿うて流れる
この秋のにほひは
クラリスの頭髪の中に生れる
暗いよろこびではないでせうか？

私の幻のお嬢さん
あなたは耳を傾ける
西の方から鳴つて来る船の汽笛に
英吉利便がつきました……。

吝嗇

ロオヂエ・アラアル

萬人とわかち持つ財寶は
よろこびの泉である
吝(おし)み貯へる金錢は
肝を嚙む荒鷲だ
われ等一人のものとては
死後のねむりよりほか何もない。

淫佚

ロオデエ・アラアル

戀人のなやましき肉
詩人のたらはぬ心
ものうくもつかれたれども
然もなほ飽くこと知らぬ
この女　メサリイヌ
君たちのなやみの繪すがた。

慢心

ロオヂエ・アラアル

尾羽根をひろげた七面鳥は
その側にゐて笑ふ
孔雀の氣品をまねるのだが
それは馬鹿らしい骨折りだが
さうして頰につける紅白粉も
美しい人ばつかりを美しくするのだが。

ロ　オ　ラ

ロオヴエ・アラアル

ヴエロナの傳説が
かの女の思ひ出に圓光をきせる
九時が鳴り出す……
ロオラは寢る前に髮を梳す。

夜の力を防ぎ止めてゐる
かよわい窓硝子の背後で
ランプが消えた
波の中に沈んだ花ざかりの小鳥のやうに。

月光が房のやうにしたたる
ベッドのふちに腰かけてかの女は思ひます
若者たちを　瓦と芝生を
終らうとする暑中休暇を。

やがてかの女は床板のかたいつやのある
砂濱に跪づく
かの女は歎きと音樂で一ぱいな
大きな一つの貝がらのやうだ。

自ら知らぬつつましい戀が
早くもその裏切をなげいて
夜の祈りのオルガンの音に合せて
泣いてゐるやうだ。

心のふり香爐の匂ひが生む
多くの欲念がかの女の祈の心をにごらせる
奥ゆかしい薔薇が一輪燃え上る
長いまつげをとほして眺めやる天に。

生きてる友の墓誌銘

フイリツプ・スウポオル

ARTHUR CRAVAN

八百屋等はメキシコへ移民した
老拳闘家　君はあの國で死んだのだ
何故死んだのかさへ君は知らぬのだ
アメリカの大ホテルでも　巴里のカツフエでも
君は僕より大きな聲で叫んだ
君は一度も鏡を見た事がなかつた
君は病院へ避暑した

友よ　君は天國で何をしようと云ふのか
僕はもう君にかくす可き何物もたぬ
セエヌ川は相變らず僕の窓の前を流れ
君の友人は皆金持になつた。

僕は一服やりたいのだ

GEORGES RIBEMONT-DESSAIGNES

君の墓の周圍に
殆どすき間もなく人人は穴を掘る
そこに錢葵と胡瓜とを植ゑる爲めだ
やがて一日(ひとひ)それ等の植木に花が咲くだらう
然し誰もそれを知るまい
さうして君は地下で安閑と日を暮すだらう

FRANCIS PICABIA

何故
君は欲したのか
君の四匹の犬と
一枚の新聞と
君の帽子と一緒に
君を埋葬するやうにと
君はまた遺言した
君の墓の上に
BON VOYAGE（ボン ヴオワイヤアジ）
と書いてくれと
天國でもまた人人は
君を氣狂だと思ふだらう

THEODORE FRAENKEL

君が死んだ時はいいお天氣だつた
墓地が非常に美しかつたので
誰も悲しむことは出來なかつた

此の頃やうやく君が居らぬのに氣がつき初めた
僕はもう君の冷笑をきかぬ
君はだまつてゐる
又は單に肩をゆするだけだ

君は何時までも極樂へ行くことを欲せぬだらう
君は何處へ行く可きかを知らぬのだが
然しまた君は平氣なのだ

MARIE LAURENCIN

籠の中のこの小鳥
これが墓の中でのあなたの微笑です

木の葉が踊つてゐる
長雨がふるだらう
この夕　立ち去る前に
私は木木に花の咲くのを見るだらう
牝鹿が一匹しづかに近よつて來るだらう

雲の色は　桃色と青だ

LOUIS ARAGON

君の戀人たちは手をつないで輪踊りする
かの女たちは君の出鱈目を集めて花環をあんだ
僕は君の爲めに紙と
上等なペンを一本持つて來たよ
君は永久に詩を作つてゐ給へ
君を守る天使は君を慰める
天使は君のネクタイを結んでやり
君に微笑することを教へてやる
君はもう僕を忘れてしまつた
神さまは僕よりずつと好男子だ

PAUL ELUARD

君のステッキと手袋を持つて天國へ行き給へ
身體(からだ)をまつすぐにして　眼をとぢ給へ
わた雲は遠くにある
君は僕に左様ならも云はずに行つてしまつた
雨がふる
雨がふる
雨がふる

TRISTAN TZARA

其處にゐるのは誰か
君は僕に握手をしなかつた
君の死の報知(しらせ)をきいた時

僕等は大いに笑つたものだ
皆が君が不死ではないかと怖れてゐたものだから

君の最後の吐息
君の最後の微笑

放鳥も花環もなく
單に數臺の豆自動車と
長さ五米突の蝶と許り

ANDRE BRETON

君の目を閉した時に
僕は君の秋波を感じた
君は僕がさびしがることを禁じた
然し僕は大いに泣いたものだ

君はもう僕に云はぬだらう
然しそれにしても　然しそれにしても　と

天使は君の床の側へ來たけれど
然し何も云はなかつた

ああ　死は美しい

さぞ君は一人で笑つてゐることだらう
今では誰も君を見ることが出來ぬのだ
君のステッキは室の一隅に立てかけてある

多勢の人が花を持つて來た
演説した男もあつたが
僕は何も云はなかつた
僕は君を思つてゐた

ほのほ

フイリップ・スウポオル

破れた一つの封筒が私の室をおしひろげる
私は私の思ひ出をはりとばす
出かける
私は鞄を忘れて來た

黒奴

フランシス・ピカビア

アフリカに生れたので
勿論　彼は黒奴だつた
人が名を問ふと
難有うと答へた。

魚は空氣を含んだ水を呼吸する
鯨は空氣を含んだ水を呼吸しない
彼は水を含んだ空氣を呼吸する。

或る種の元素は知られてゐる

如何なる元素も知られてゐない
凡ての元素は知られてゐる
凡ての元素は知られてゐない
或る種の元素は知られてゐない
雨がふる

AAA AAE AAI AAO AEA AEE AEI AEO
AIA AIE AII AIO AOA AOE AOI AOO
EAA EAE EAI EAO EEA EEE EEI EEO
EIA EIE EII EIO EOA EOE EOI EOO
IAA IAE IAI IAO IEA IEE IEI IEO
IIA IIE III IIO IOA IOE IOI IOO
OAA OAE OAI OAO OEA OEE OEI OEO
OIA OIE OII OIO OOA OOE OOI OOO

理性には母音が四つしかない。

アフリカに生れたので
勿論 彼は黒奴(くろんぼ)だつた
人が名を問ふと
難有うと答へた。

太陽

イヴアン・ゴオル

麪包屋が夜明を匂はせる
ごらん　彼等の見世窓に
刈つた麥畑のうしろから
今　のぼるのだ
一箇三斤の大きな麪包
やき立てのほやほやの
黄金いろの
太陽。

時計塔

イヴアン・ゴオル

どの塔からも時がおちて來る
街上にくだける硝子の翼
絶望した天使等の自殺

日ごと　イヴァン・ゴォル

乗合自動車が帯のやうにセエヌ川を渡る
ブリュッセル行きの急行列車は正七時半發車
明朝斷頭機は夜明の首を切るでせう
さうして取引所は正午に開場する
神の自動車の第五輪地球はまはる
天使等がいくら自殺しても
馬鹿げた事は死にはしない

出發

イヴァン・ゴオル

太陽は自轉車にのつた
彼は歐洲路をかけめぐる
人人は彼を見る爲めに目をひらく
美しい小鳥は田園に警報する
牛乳配達は市の半鐘をうちならす
草の葉は菫の戀が
頭へのぼせるのを感じる
然し海へ行く前に
桃いろの小川は
木苺のやぶのうしろで
小便をたれる

ヴエルレエヌぶり　フランシス・カルコ

風に吹かれて一本の木がゆれる
鎧戸が壁を打つ
雨がふつたので水たまりが出來た。

風に吹かれて木の葉が
とびちる　まひ上る
するとたちまちにまたしても一村雨。

＊＊＊

日がくれて行く
うすれ行く地平線に
私は見る　細い鐘樓と
その上の十字架を。

あたりの沈默の中に
私はきく　尼寺の鐘を
鐘は高高とひびき　鐘は鳴り渡る
さうして風と一緒に消えて行く。

⁂

風に吹きなぶられる一本の木が
やさしく歎息する
時時にふつて來てまたとんで行く
とりとめぬ村雨のやうに。

お前に對する私のこの年へた戀の
殘る形見は
あの聲のものうい音樂ばつかりであらうか？……

ああ！ 私は

フランシス・カルコ

ああ！ 私は今でもお前を愛してゐる！
私の詩以外のどこにお前がゐよう？
冬はまたしても連れて來る
しつつこいどす黑い私のかなしみを。

風が吹きおろす時
アカシヤは身顫ひする
その頃お前はシユミイズもない裸で
煖爐の前で身體を温めた。

その頃雨は雨戸を打つた
薪は燃えながら口笛を吹いた……
……私は今まつてゐる
白い夜明が來て窓の硝子に上るのを。

歎き

フランシス・カルコ

風の音が雨がふるかと思はせる
風の一と吹きに捕へられる度に
木の葉はゆれる
ああ　わななきやがて消えて行く感動

灰色の午後が退屈する
わたしのなやみは泣きたいのだ
ああ　神さま忘れねばならぬのです！
忘れる爲めに私はねむりませう。

それなのに橅とポプラの葉の中で
ささめきさわぐあの風が
私が何と思つても　何をしても
忘れることをさまたげる……。

ロマンチック

フランシス・カルコ

樹木と空と煙と
美しい背景
やがて林の奥で
鳴り出すさびしい角笛。

長い時がたつ
風はすすり泣きながら
破れた鎧戸に
雨を打ちつける。

風が默す
轍のあとの泥を
かいてゐた驢馬が
急に嘶き出した。

死んだ女たち

フランシス・カルコ

ああ　君等はもう歸つて來ないだらうか
惡夢の中のやうに
死んだ女たちよ　かなしい幻よ……
わたしの歌の後悔よ　ためいきよ！

明けかかる日をそのままにして
私の兩手を君等の裸の兩手の中に置かせてくれ
過ぎた日の死んだ女たちよ！
ああ　酷(むご)い日の光が市(まち)にひろがる。

あわただしくはかない
あかつきの夢の中に
君等はやがて姿をかくすのだ
私は君等をたづね……私は君等を忘れる……。

何故なればどの一人の女も
このわななく私の心を慰め得ぬのだから……
然しそれにしても君等は髪をといて
さうして一様に私を呼んでゐる……。

女たち

フランシス・カルコ

殺されて死んだ女
レアは絹の薄衫(ペヌニコアル)を脱がうとする
ジルベルトはシュミネの上に
黄色と黒の天鵞絨の假面(ルウ)を置く。

さびしいカルナヴアルが動き出す
立ちのぼるさぎりの中で
ぼんやりと顏を竝べた二人
私の夢の中の二人の死んだ女たち……。

然しかの女たちには聲もまなざしもなければ
定つた形さへもないのです
殺されて死んだレア
黄色と黒の天鵞絨の假面のジルベルト……。

二人は私の心の中にゐる
お互に見知らぬ女たちです
二人は互にたづね合ひ　互に裸であり
香料も情熱もなくてあることに今驚いてゐる……。

二人は愛撫を交し合ひ
誓ひと告白を交し合ひ
そして二人とももものうげに
こみ上げる笑ひを笑つてゐる。

身振狂言

フランシス・カルコ

月に向つてアルルケン
木刀(バット)と不運をさらけ出す。

月に向つてピエロオは
邪氣たつぷりな目で口說(くどく)。

コロンビイヌは月かげに
繻子の衣(べべ)きて泣いてゐる。

ピエロオばかりが夜明けまで
月の光に唄つてた。

男ごころ

ヤイ・シャルル・クロス

忘れよとや？
赦せとや？
誰か忘れ　誰か赦さん！
女なら忘れもしよう
神ならば赦しも出來よう
さるをわれは男　われは男。

リユクサンブウル公園で

ギイ・シャルル・クロス

私は一人の小さな女の子を思ひ出す
それはリユクサンブウル公園の五月の或る日の事だつた
私は一人で坐つてた　私はパイプを吹かしてた
すると女の子はぢつと私を見つめてた。
大きなマロニヱの木陰には桃色の花がふつてゐた
女の子はおとなしく遊びながらぢつと私を見つめてた
女の子は私が言葉をかけてくれればいいがと思つてゐたのだ
かの女は私が幸福でない事を感じたのだ。

然し小さなかの女は私に言葉をかけることは出來なかつたのだ
榛の實のやうに圓い目を持つた女の兒よ　やさしい心よ
お前ばかりが私の苦惱を察してくれたのだ
彼方をお向き　どうして今のお前に了解することが出來ませう？
彼方へ行つてお遊びなさい　姉さんが待つてゐます
ああ誰も治すことも慰める事も出來ぬのだ
小さな女の子よ　何時かお前にそれが分る日が來るでせう
その日　遠いやうで近いその日　お前も今日の私のやうに
リユクサンブウル公園へお前の悲しみを考へる爲めに來るでせう。

黄昏

ギイ・シャルル・クロス

この夕べ私はお前の不在をかなしむ
あらぬお前の聲を惜しみ　目をなつかしむ
何ものも私の沈默を破ることは出來ぬ
この公園も　空(そら)も　あの人人も……

私は私の孤寂の上に
いつはりの微笑を浮べながら
私の内に歌ふ
死ぬ程さびしいアダヂオにきき入る。
唯(たつた)ひとつの戀を失つた悲しみを

何ものも慰め得ぬことは私も知つてゐる
然し仕方もないことだ！
お前は若かつた　陽氣だつた
さうして私たちは毎日二人で暮したのだ。

私たちは世界に對して二人だつた
呪はれた神神に對して二人だつた
それなのに今おりて來る夜の中に
私はたつた一人で　星もなく　迷うてゐる。

この夕べ私はお前を惜しむ　然しそれにしても
明日になつたらまた忘れてしまふだらう。
多くの死んだ女たちの灰が
私の手のうちに何と輕いことだ！

河岸で

ギイ・シャルル・クロス

灰色の街路
さうして家竝
セエヌ川は流れる
泥の波を運んで……。

私は此處で何をしてゐるのか？

然しそれにしても
何故河岸を變へようと云ふのか
何處へ行つた處で
同じことらしい！

家へかへつた方が氣がきいてゐるらしい。

往き來の人たちは
わたしより陽氣であらうか？
彼等とてたいして
樂しい樣子もない。

——ねえ　君　君はどうなんだ？

昨夜は飲み過ぎたらしい

ギイ・シャルル・クロス

昨夜私は少少飲み過ぎたらしいのです　私は豪氣に陽氣です
朝の空氣は一杯の清水のやうにさわやかです
胸一ぱいに巴里を吸ひ込みながらセエヌの河岸を
私は今歩いてゐます
力のこもつた快活な私の千鳥足の律で。

私は思ひ出します　昨夜私の戀人が私を去つた事を
何とかつまらぬ馬鹿らしい理由でしたよ
然しあの種の女たちは寛大に批判してやる可きです
どのみちかの女たちにはそのSEXEが何時になつても殘つてゐるんですからね。

私たちはもう森へ行かぬでせう　少くともかの女と連立つては行かぬでせう
月桂樹は切られてしまつたのです　然しその爲めに私たちは死にはしません
二月三月私はかの女を親切な女だと思つてゐたのでした
然しどつちにした處で　つまりは何でもないことなんです。

よし又私が今後しばらく書く詩のうちに
かの女の接吻のブロンド色のさわやかさを止めるとした處で
それがどうなるものですか？
私は自由に一人で進み　私は私を愛する女を愛するでせう
私の腕にはまだ力があり　私の心はまだ鈍つては居りません。

もしかすると今朝が　私の一生のうちで一番に美しい一日を用意してゐるかも
　知れないのです？
街の角角にはアヴァンチュウルが私たちを待つてゐるのです。
兄弟　死ぬ日を待ちながら一緒に一杯やらうぢやないか。

雨がふつてゐる　ギイ・シャルル・クロス

雨がふつてゐる　愛撫のやうだ　音樂のやうだ
默することを欲せぬかすかな聲のやうだ
お前は夢想と仕事とを續けるがよい
お前は夜ふかしするがよい　孤獨な心よ。

雨がふつてゐる　時にはいそがしく　時にはゆつくりと
雨はもう明日の朝までお前を見すてはしないだらう
お前はランプの灯かげで煙草をのんだり思ひにふけつたり
またはも一度お前の親しい憾みを一人ごとに云つてみたりするがよい。

雨がふつてゐる —— お前は眠たいのか？　雨はお前をゆすぶつてくれる
雨はささやきながら昔噺をきかせてくれる
雨はお前の爲にやさしい　哀れに疲れた魂よ
お前はもうねむるがよい　雨はそこに暗闇の中に何時までもゐるのだから。

五月の夕　ギイ・シャルル・クロス

女たちの或る者は亭主をつれてゐる
他の或る者は子供をつれてゐる
他の或る者は戀人をつれてゐる
他の或る者には時間の持合せがない。

退屈げな目をしてかの女たちは
街を行く
すきとほつて見えるブラウスに胸を包んで
かがとの光る靴をはいて。

さうしてこれは古い習慣なのだが
ミステリアスな様子をして
男たちを驚かせる爲めに
蒼ざめた顏に化粧をする。

私はこれらの肉體を抱きしめたことがあるが
――骨の過剩で無ければ肉の過剩――
私はこれ等の心の裸(はだか)を見たことがあるが
とのみち大した價値(かち)のあるものではないのです。

それなのにやはり　夕ぐれ時
家家が薔薇いろに見える頃になると
兎角昔の經驗は忘れてしまつて
とうかするとまたやりなほしたい心になる。

わけはわからずに
自分の最愛の女が
極められた一人の女が
自家に待つてゐるのでなかつたら。

こんな次第で自家へ歸るのだ
さびしい心持ですね
どうやら自分だけが
他の男たちより不運に出來てゐるやうな氣がして……

然しそれにもかかはらず　綠の夕空が微笑する
さうして家家が薔薇いろに光る。

十一月　　ギイ・シャルル・クロス

十一月　さびしい十一月　黒い十一月……
朝がすこし許り雨戸のすきまから流れ込む
私はお前の肩に倚りそつて私の心臟の音をきく
お前は私の頰を愛撫しながら
子供らしい言葉で私に話す
つかれて　とぎれとぎれに
冷たい雨が窓を打つ
風が戸をがたつかせる
――お前の幼時を思ひ出すな
お前はまた泣きたくなるだらう

私はただに思ふのだ
死の冷たい戰慄が來て捕へる前に
このよろこびをわたしたち二人の肉體に
與へようと欲したことによつて
この廣い大きな寢床の中に
裸體のまま埋れてゐるわたしたちの事を。

私はただに思ふのだ
かくも倚りそつて　かくもなほもつれてゐるが
やがて暫く後では
巴里がその川と家と往來の人でもつて
離してしまふであらう
私たち二人の肉體のことを……。

私はここに横たはる
古い微な苦痛にみちた
私たち二人のことを思ふのだ
それ等の苦痛については
わたしたちは何も云はぬのだ
わたしたちの中にかくれてゐる
痛ましいその上の日のやうに
苦痛がまたわめき出すのが怖いので
お前は私の頬を愛撫し
さうしてとぎれとぎれに私に話す……
ああ！　お前が私を愛してゐることは
私は知り過ぎてゐる
私はありたいのた　ここから遠い處に
お前の心から　私自身から　遠い處に。

遺言の代りに

ギイ・シャルル・クロス

私が死んだとて　墓の上で
お經や無駄な弔辭はよして貰ひたい
ただ　かつて私の肉であり皮であつた殼を
潔いさうして矜りにみちた火の中へ入れてくれ
さうして私の灰を風に投げてやつてくれ
流れる雲の王であるあの風に
さうして各自（てんで）に喇叭を吹き鳴らしてくれ
私の喪の爲めには赤い着物をきてくれ。

出來るだけ大勢で陽氣にさわいでくれ！
私は死んでから人に泣かれるやうな人間ではありません
冷たくなつた私の指が灰に變つても
美しい詩の幾つかは殘るだらう
私が死んだ方が却つて君たちが
私の居所を探ねるに都合がいいくらゐだらう
―― 祈禱は老人たちが死んだ時にする事です ――
私の喪の爲めには赤い着物をきてくれ。

かつて私たちが一緒にすごした
一番に狂燥な酒宴の夜のやうに
寺院の壁や戸口を毀ける位に
少少なぐりあひもしてくれ

ああ！　君等の戀人たちも一緒に來て
かの女たちの痛ましい身振によく似合ふ
牝の山犬の齒をむき出して笑つてくれ
私の喪の爲めには赤い着物をきてくれ。

今日　私は私の掟を叫ぶ
友よ　到る處の酒場に集つて
昨日の友よ　昔の友よ
私がゐなくとも新しい酒をのんでくれ
私の喪の爲めには赤い着物をきてくれ。

さびしさ　ギイ・シャルル・クロス

私は知つてゐる　私がお前を何時までも愛せぬであらうことを
それを思ふ事はお前を愛する事よりより多く私を痛ませる
私のよろこびと悲しみのやうにお前は今私の中にある
私の喜びも悲しみもさうしてお前も何時かは私を去るであらう。

今このやうに　鞘のやうにしつかりとお前を抱いてゐる私
この私に對してお前が一日　今日の路傍の人よりも
無關心になる日がやがて來るであらう。

お前は何故私がさびしいのか知りたいと云つたね。
――これで分つたか？

光が空に消える

ギイ・シャルル・クロス

光が空に消える
よろこびが心に消える
かうして目には見えずに
夜が下りて來る。
かうして人が死んで行く
死ぬとさへ知らずに。

一人の老婆が
粗末な寢臺の待つ家へ
腰をまげながら歸つて行く

うなりを立てて自動車が
ホテへ向つて急ぐ。

千年も古びた寺院と
その塔とその黒い戸口と
うづくまつた家竝みとが
夜に身を委ねる……
今宵は私も一人で自家へ歸らう。

何故なら私には今
女たちの笑聲も音樂もききたくない
私はわき見もせずに
私自身を見つめてゐたい。

沈黙が

ギイ・シャルル・クロス

沈黙が室（へや）の中にゐた
まことの實在のやうに
さうしてかの女の言葉の一つ一つは
ただに沈黙を深める計りだつた。

私たち二人の二重の夢はさめて
今まで多くの時間をリトムづけて來てゐるので
明日を怖れぬ平和な心臓のやうに動いてゐた
…………………………

それにもかかはらず私たち二人は
わたしたちのもの憂くやさしい今の幸福が
人生の天秤の上にのせては
あの空を流れる白い雲ほどの

または晩秋の日の
なめらかに黒ずんだ幹の上に置く
日の斑ほどの重みもないことを
よく知つてゐるのであつた。

小唄

ギイ・シャルル・クロス

醫者たちはかの女を助け得ると思つてゐた
然し娘は今年になつて死んで行つた。

娘は森の花ざかりに死んで行つた
餘所の木の葉がもつと青いかは誰が知らう？

それだのに娘に殘された人たちが泣いて惜んだ
然し私は生き殘つた娘たちの爲めに泣きたい

やがて人妻となりやがて子供を生み
やがて小鳥も花も唄も忘れる娘たちの爲めに泣きたい

醫者たちはかの女を助け得ると思つてゐた
ともすると娘は自分の眞の運命を解したのかも知れない

かの女は森の花ざかりに死んで行つた
かの女は餘所にもつと青い森がある事を知つてゐた。

かの女が言ふ　ギイ・シャルル・クロス

私の胸の上にねむつたこれ等の花をお前にやる
すてる前に暫く持つてゐるがよい
私の胸の中に動いてゐるこの心をお前にやる
あるべかりしを　あらざりしを
憂ひ且つ夢み　希ひ且つは察するこの心
私の心の上にかくも重たく　さうして私の胸の火の爲めに
やけ凋れたこれ等の花をお前にやる
それ等の中に私の肉の匂ひのよろこびも
子供らしい私の首のかたちをもたづねるな……
それ等は私の心の上にねむつただけの花である
憂ひ且つ夢み　希ひ且つは察するこの心の上に。

リイド　ギイ・シャルル・クロス

この不思議なそしてやさしい名を私はかの女に與へた
「過ぎし日の音樂」と云ふ名
かの女は何も云はずに微笑つてゐた。

程經て　かの女が他の男の爲めに私をすてた時
唇を最後に私に差出しながら
何となくさびしげなかの女の聲が私にささやいた。

――この不思議なさうしてやさしい名をあなたが私にくれた時
「過ぎし日の音樂」と云ふこの名
其の時あなたはすでに私が去ることを知つてゐたのだ。と

五月の朝　ギイ・シャルル・クロス

金錢の苦勞よ　戀の歎きよ
私から去つておくれ　私も君たちから去らうから
何故と云つて　今日　春がリュクサンブウルの公園を
接吻しに歸つて來てゐるのだ。

築山の上の野いばらが
みどり色の蕾で星座を造つてゐる
鐵の椅子の上に一人の女の子が
これ見よがしに足を組み合せる。

一人の軍人がとほり過ぎる。

子供たちは石けりをして遊んでゐる
嚴めしい上院の建物は
父らしい古びた樣子をして
彼等の小さな飛戲の見張をしてゐる。

――遠くの方で赤い帽子が
みどりの芝生に對比して光る。――

メデシスの噴水池には
小鳥の啼く聲がきこえ
風はさわやかに　空は灰色だ。
午後から雨がふるだらう。

後にまで　ギイ・シャルル・クロス

愛人よ　私はお前の爲めに私の一番やさしい唄とはげしい歌とを作つたのだ
さうして今では、もう聞く術(すべ)のないお前の聲がそれでも時とすると
「わたしは昨日(きのふ)　お前の歌を讀みながら泣いてしまつた」と云ふ事があつたのだ

今となつては　今となつては　お前は私の生活から去つてしまつた
それにもかかはらず私はなほも歌を作る
私は長い歌を書いて　戀と死と女とを私の爲めにもの語る。

寒い夜である　私の窓は閉されてゐる
ああ　今宵私は知つた　お前が私にとつて何であつたかを
お前は私の夢が一人で生氣づけてゐた影にさへ過ぎなかつたのだ。

さうして今宵　私は二度目にお前を失ふ。

流れ

ギイ・シャルル・クロス

流れの眞中にあつて
右にも左にも動かずに
百年そこにとどまる石のやうに
萬物の眞中に
たつた一人でおのれは在る。

水の中に石一つ
わななきふるへる水の中に。
おのれの有である何物をも

おのれは持たぬ　さうして
おのれは誰の有でもない。

一人であること
永久に一人であること
それを納得し　それを識ること
此の求むる處のない安心に
較ぶ可き夢があらうか?

激せずに流れ行く水は
靜かでさうして深い——
おのれつかのまも
世の現實を信じたことがあつたか?

さわやかな春夜

ギイ・シャルル・クロス

さわやかな春の夜が
私の指のあひだを流れる
私の身のまはりを流れる
わたしをひきずりながら
すねつつもならされてしまつた私を。
彼を待伏せしてゐる大きな夏の河口の方へ
私をおし流して行く
さうして私は吸ひこむ　溺れた人のやうに
私の周圍に流れるこの氣體の水を
その水は　春に打ち勝たうとし

今の位置に止まらうとし
踏みとどまらうとする私の意力よりも
もつと微妙に出來てゐる。

私は小兒のやうに無力である
私は私の血の歡樂がおそろしい
私はまたそれに自ら慣ひせぬことがおそろしい
あまたの過ぎた夏が
あまたの失はれた春が
前額に烙印を殘して行つたこの私。

私の舊知のこの新春が
このやうに反抗すべくもなくやさしく
かつてなかつた程にさけがたく

も一度私の上に歸るであらうとは知つてゐたのだけれど
それにしても私はそれを今宵に待つてはゐなかつた
私の肉體はすでに
放心境にある漂流物と身をなして
人生の河流をより穏（おだや）かなより暗い水の方へ
流れ下る記憶を忘れはててゐた……

春の激流よ
私はお前の流れに身をまかせる
私よりもよくお前が知つてゐる安全な港へ私をおし流して行け
お前の心のままなものに私をなすがよい
私を奪ひ去れ　私をひきずり去れ
新しい歡樂に身は輕く　古い苦惱に心は重く
かうしてお前と一緒に私が流れ行く事の出來るやうに。

鎮靜劑

マリイ・ロオランサン

退屈な女より
もつと哀れなのは
かなしい女です。

かなしい女より
もつと哀れなのは
不幸な女です。

不幸な女より
もつと哀れなのは
病氣の女です。

病氣の女より
もつと哀れなのは
捨てられた女です。

捨てられた女より
もつと哀れなのは
よるべない女です。

よるべない女より
もつと哀れなのは
追はれた女です。

追はれた女より
もつと哀れなのは
死んだ女です。

死んだ女より
もつと哀れなのは
忘れられた女です。

小鳥

マリイ・ロオランサン

美しい小鳥たち
あなた達は私のお友達でもないのに
而もあなた達の歌は
私の心やさしくする。

日本の鶯　マリイ・ロオランサン

彼は御飯を食べる
彼は歌を歌ふ
彼は鳥です
彼は勝手な氣まぐれから
わざとさびしい歌を歌ふ。

詩

モオリス・ヴラマンク

腸詰と天ぷらのにほひ
私はそれを好きだ
さうしてまた私は
ふだん着をきた女を好きだ
私は自動車をきらひだ
地下鐵道もきらひだ

火の上にこぼれた牛乳のにほひは
私に母のことを思はせる
高價(たか)い香水は
理髪舗(とこや)の匂ひがする
自動裝置の賣箱
ウオタア・クロセット
剪花(きりばな)　おとむらひ
菜場……皆きらひ。

冬

モオリス・ヴラマンク

老人は心を痛める
彼の爲め　わづかに殘る道の爲め……
然し老いてはいよいよに
死ぬるとは信じがたい！
かみの毛は白く
ああ雪のふる事だ。

金と石炭が
たりなくなること計りが
氣にかかる！
あかぎれはもう切れぬ
戀の苦勞もない
何時になつても
心の中に
こみ上げて來るかなしみはある。

踊り場

モオリス・ヴラマンク

チガアヌのヴアイオリン
カッフエには
テイ・タンゴ
海の上には船がゆれ
水の上
森の中では
鳥が鳴く
鶯は蓄音機の中では歌ひません。

戀は巴里の色　ジユウル・ロオメエン

一

戀は巴里の色。

そこはかとうれしきほのほ
道のかみ手に生る

そこ深き青空に
さゝげられたる街燈の灯

灰いろのきりにかこまれし
黄金いろの火とや云はまし

いささかはうれしきほのほ。
戀は巴里の色

二

さかんなりける青空の
のこれるは唯に灰と壁のみか？
おお　とらへがたき夕ぐれよ
されども窓の硝子
汝が爲めに　わななく空の泉となり
涸れしにはあらぬ泉となり。

空の色しばらくは
心にせまる青

戀は巴里の色。

三

影はおりて來てもよい
街も魂も用意が出來てゐる。

さはれ君の目
近く來て見入らねば
われ見知るを得まい。

今はもう夜であれば
君はややにうつ向き給ふべし
わが肩にうなだれ給ふべし
戀は巴里の色。

白鳥

ヴァンサン・ミュズリ

ふくれろ　羽をひろげろ　とんだお上品さ
お前になぞおれはもうまどはされないぞ
お前の美しさなんぞ　今ぢや何處のどぶ池にだつてころがつてゐら
強慾な莫迦鳥めが！　おれはちやんと見屆けたぞ
やい　こないだの晩　やくざな嘴を振立てて
手前は金貨の月を追つかけてゐやがつたらうが。

河流　ヴァンサン・ミュズリ

森を流れる時も　牧場を流れる時も
冬　氷の下を流れる時も　夏　炎熱の間を流れる時も
お前は同じ姿に流れながら　季節と岸との爲めに
古ながらの新しさを敎へる。

美しい河流よ　市の苦惱からのがれ得る人は
時時に來てお前の岸邊に坐り
お前の靜かな波と一緒に
時と日と月との流れるのを感ずる事を愛する。

去り行く夏

ヴァンサン・ミュズリ

數月以來彼の花車に艶美をしばりつけて
自然の命ずる處に忠實に
われ等の日日を歡喜と光明とに滿たしてくれた
夏が今去らうとしてゐる。

誰もそれを引止めることは出來ぬのだ
君等美しい花も　君等短命にして無垢な蜜蜂も
庭よ　お前の喪も　噴水よ　お前の涙も
ああ！　君等むなしくすすり泣く林も。

蛇

ヴァンサン・ミユズリ

人間はお前に對して嫌忌とさけすみとより外は何も持たぬ
お前の不誠實の上に彼等は澤山な諺をつくつた
然し私は愛する　花のやうに輝かしく　草葉のやうにしなやかに
私の庭を這ひまはるお前の姿を見ることを。

公園へ

アンドレ・スピイル

馬がかけ足でとほる
一　二　三
一　二　三
馬がかけ足でとほる
奥さんがのびたりちぢんだり。
竝木道の砂は褐いろ
馬がかけ足でとほる

塗靴の上にスカアトが
まだらな日光を浴びてひるがへる。

並木道の砂はやはらかい
四つの小さな蹄が
かけ足でとほる馬の膝(ひざ)へ
のぼりつかうとする。

さうして小砂利がとびちつて
圓形廣場のベンチの上にお姥さんと
縫ひものをしてゐるお嬢さんの
護謨塗の帽子の上に落ちる。

私の犬

アンドレ・スピイル

私の犬よ
どうして私にお前を愛することが出來ませう?
私は今日よく働かなかつた
私は今日正しくはなかつた
それなのにお前は私を嘗める爲めにかけて來るのだ!

一人の淫賣婦が通りがかりにお前を愛撫する時
お前もかの女を愛撫する　私の犬よ
肉屋の小僧がお前に肉片を投げ與へると
お前はうれしげに吠える　とび上る
小さな魂をしか持つてゐない女中をさへ
お前は大きなやさしい目でぢつと見つめるのだ。

私の犬よ
どうして私にお前を愛することが出來ませう？

聯想

アンドレ・スピイル

娘よ　お前の水瓶はもう一ぱいだ
水が溢れてゐる
何を考へてゐるのか？

——母よ
私は雨のことを考へる
私は朝のことを
朝ぎりのことを
朝露のことを考へる。

——お前はそんなことを考へるのか
わたしはそんなことを考へはしなかつた。

——あなたは井戸へ水をくみに行つたのです
わたしは泉へ來てくむのです
あなたは鎖を引かねばなりませんでした
わたしには夢みる閑暇(いとま)があるのです。

——娘よ　お前は何を夢みるのか

娘よ

——母よ　泉の流れを受けるセメントを
水を導く鐵管を
鐵を　鑛石を
港を　運河を

舁子を
土方を
噴水器製造人を
さうして彼等の唄を
さうして彼等の接吻を……

——さうして彼等の接吻を？

——母よ　私は娘です
私は娘です
母よ。

人間　あまりに人間

アンドレ・スピイル

おれの父はラテン語を知つてゐた
おれの母はピアノを弾いた
さうして社交家だつた
女よ　わかるか
わかるか　わかるか　わかるか？

おれは家庭教師と
馬乗と
獵銃と
馬丁と

下僕とを持つてゐた
わかるか？

然るにおれは書物と
さびしい魂と目とを愛し過ぎたのだ
女よ　わかるか？
おれたちは涙を
戀人を　敗者を
行人を街路を愛しすぎたのだ
竈(かまど)の火をたきつけよう
本のちりを拂はう
わかるか？
おれたちの本のちりを拂はう
おれたちの着物にブラシをかけよう

おれたちの靴をみがかう
わかるか？

おれたちの靴をみがかう
おれたちの皿を洗はう
女よ　お前に分るか
お前に分るか？

朝

アンドレ・スピイル

男の子がポンプを押してゐる
女の子が戸口を掃いてゐる
風が薔薇の木をゆすつてゐる。

犬が吠える　門が開く
榲桲の枝にとまつて
四十雀がとぎれとぎれな聲を出す。

牛乳賣り娘の鑾が鳴る
ばん屋はばんを配る
裸の腕が鎧戸をおしあける。

樹木のすき間から見える空に
紫の雲がちぎれてとぶ……
露の玉が庭（には）に零れる。

催眠歌

アンドレ・スピイル

海よ　きかせておくれ　お前が轉がしてゐる礩のことを……
お前は何時までも飽きぬのか？
お前が砕いて砂にする岩のことを
お前の波のことを　お前の沫のことを
お前の泡のことを　お前の匂ひのことを
お前の露が島の上に生えさせる
さうしてお前の風がいぢめる松の木のことを。

お前の牛乳のやうな夜明のことを
お前の中に生れ　殖え　搖れてゐる

魚のことを　貝のことを　藻のことを　海月のことを
さうしてお前の中に死んでゆく諸のことを……
お前は何時までも飽きぬのか？
きかせておくれ　お前をひきつける青空のことを
お前の水の上に水鏡したがる星のことを
（お前の波は休みなくその影をこはしてゐる）
夜明にお前をのがれ　お前を呼吸し　お前をひきする太陽のことを
夕暮　お前は太陽をお前の臥床に引止めたいのだか
太陽はいつもにげてしまふ。

きかせておくれ　磯のことを。
お前は何時までも飽きぬのか？

太陽

アンドレ・スピイル

木の葉の背後（うしろ）に太陽
私のこころは透明だ
木の葉の背後（うしろ）に太陽……
風が吹く　風が……。

生温い木の葉の中で冷たい風が温（ぬく）み
私の花を愛撫する

汗ばんだ私の前額を愛撫する
汗ばんだ私の手を愛撫する
私の瞳と私の目とを愛撫する。

噴水のしぶきの中に
噴水の光の中に
太陽は入日する……
私の頰には涙が流れる
太陽で一ぱいな涙が。

春

アンドレ・スピイル

牡猫と蝶蝶と牝猫と
さうして花の咲いた樹木と
さうして草の葉の中の日と光と
さうしてすきとほつた身體の翅蟲と

おお　やさしい風よ　木の葉をゆすれ
さうして枯葉を走らせろ！

ベゴニヤは太陽の光の中で沐浴してゐる
さうして紅いろの薔薇の花か咲きかけた。

おお　やさしい風よ　木の枝を唄はせろ
さうして花の咲いた樹木を唄はせろ
さうして草の葉の中の日の光を唄はせろ
牡猫と蝶蝶と牝猫とを唄はせろ
さうしてすきとほつた身體の蛔蟲を唄はせろ。

雨

アンドレ・スピイル

ポプラの木の中にやさしい空氣
地の上には雨のしづく
肱ついた詩人が
地の上の雨のしづくと
ポプラの木の中の生溫い空氣とを夢みてゐる。

木の葉　つぶやくものかげ
きらめく光　きらめくもの影

眩ついた詩人が
木の葉とつぶやくもの影と
踊つてゐる怠惰ともの憂さとを夢みてゐる。

やはらかい木の葉　ゆつたりしたしづく
そよ風　しめり氣　かげ　光……
眩ついた詩人が
流動する木の葉と生温い風と
地の上のやはらかい雨のしづくとを夢みてゐる。

夕暮だ

アンドレ・スピイル

金の釦
マアガレット
影多い丘の上
夕暮だ。

お前は花冠をとざす
金の釦
マアガレット
動かぬ廣い野の上で。

金の釦
マアカレット
私の足は重くなり
私の手　お前を愛した私の手は
もうお前を摘む事を好まない。

金の釦
マアカレット
私の思念は重くなり
皺が私の前額をこはばらす
私の心　私の心は閉される……
夕暮だ。

頰白鳥

アンドレ・スピイル

鳥よ　お前は高い枝の上にゐる
おとなしく
玩具のやうに　お前は尻尾と頭とを
お前の兩足の上で動かしてゐる
お前の尻尾　お前の頭
褐色のお前の尻尾　黑いお前の頭。

空は青　空は白
溫い空氣はわななき　わた雲はをどる
雲はお前の歌の上を流れる
靜かに　おとなしく。

鴉

アンドレ・スピイル

鴉は木の中で鳴いてゐる。

鴉よ　私は眠る
鴉よ　私は夢みる
私は歌を書く
私は木を書く
お前の鳴聲はみにくい
鴉よ　鴉よ！

鴉が木の中で鳴いて云ふ
――私の細君は子供を溫める　私は羽ばたきする
私は巢の側に見張をしてゐる
私は嘴を開く　子供たちが毛のない首と
まだやはらかい嘴をのばす
私は羽ばたきする　私の細君は子供を溫める
私は巢の側で歌を歌ふ。

鴉よ　私は眠る
鴉よ　私は夢を見る
私は歌を書く
私は本を書く
鴉よ　私は鐵砲に丸(たま)をこめる！

鴉が木の中で呻聲で返事する
——私はこはくない　私はこはくない
私の目玉は夜明の空のやうに青い
私の目玉は青い　お前の初戀人の青い目玉のやうに。

黑つぐみ

ジャック・バロン

イビスの鳥は
太陽の小便をすると云ふが
そこな蜜蜂や蜂雀は
何をするのか。

小便をしない
これ等の動物は
何をするのか。

雲雀なら
琴尾鳥と
戀をするのだが

鳥よ
鳥よ
僕は一羽のつぐみだよ。

人生萬歳

ジャック・バロン

たつた一人の
やさしい女よ
二日の間
戀をしようよ

シラキユスかヰインナへ
飛行機で
行かうよ

これ等の市では
人人は戀をするのだ
狂人のやうに

私は死ぬだらう
戀をしながら
若しもお前が私を愛するなら
私は死ぬだらう
毎日でも。

野ばら

トリスタン・クリングソオル

生垣の中には野ばらの花が咲きました
草原には蓼(たで)の花が咲きました
きゆうくつなあなたの御亭主より
ひげもまだない若造(わかざう)がお氣に召す
生垣の中には野ばらの花が咲きました。

奥さん　この花束を上げませうか?
奥さん　この接吻は如何です?
窓からもつと身體(からだ)をお出しなさい

あなたがそつこん惚れてゐる
あのやくざものの好男子が
彼方の角からまゐります。

老いたるあなたの御亭主は
庭で小便してござる
頭巾かぶつて下駄はいて
あなたのコオセットの下で
下着の前があいてます
そして人皆知るごとく
今は戀にはいい時刻
生垣の中には野ばらの花が咲きました。

ボペミヤ歌

トリスタン・クリングソオル

要は自分の苦しみを笑つて暮すことだ
愛する女よ
さうして自分の悲しみで歌をつくるのだ
人生と云ふ奴は
誰にも理由（いはれ）のわからぬこのやうな苦みでみちてゐる
その爲めに泣くことが怖ろしいなら
要は自分の苦みを笑つて暮すことだ

喜劇役者の假面をかむつて
顔は微笑しながら心は泣きながら
おれは一生を送るつもりだ
ああ！　このやうに愛することは
氣狂沙汰だとおれはよく知つてゐる
然し仕方もないことだ？

人生は短かく手輕だと人は云ふ
ままよ！　その爲めに泣く事が怖ろしいなら
要は自分の苦みを笑つて暮すことだ！
愛する女よ！

鴉　トリスタン・クリングソオル

枯れた林檎の木の中に鴉が一羽
草の中に坐禪菊が三つ
日は灰色　北風が身にしみる。

またしても私は歸つて來たのだ
暗い林と沈んだ愁しい紺色の
小山の續きを背景にした
この陰鬱な國へ。

それにしても私の心よ　どんな大きな祕密がお前をさいなむのか？
愛する女よ　お前は何故ここに居らぬのか？
北風がより強く私の身にしみて
小山がより灰色であるやうに私には感ぜられる。
私のまつげの間にわななくのは涙ではないか？
枯れた林檎の木の中で老人の鴉が身動ぐ。

鵲

トリスタン・クリングソオル

鵲は牧場の杭の上に
首だれてゐる
露はみどりの草の間に光つてゐる
わたしの心よ　わたしの心よ　何故に吐息するのか？

私は牧場の中へ歩み入る
すると鵲は身輕にとび去る
それなのに私はなほこの傷いた心の上に
私の惱みの重みを感じる。

嬉戯する四月の太陽のもとに
露は一滴も殘つてはゐない
それなのに私の頬の上には
いつまでも涙のあとがのこる。

死んだ薔薇

トリスタン・クリングソオル

人がお前を愛してゐるとお前は知らぬのに
またしても凋れた薔薇の花が一つ
あはれやお前の指の先
またしても美しい薔薇の花が
お前の爲めに死んだ。

またしても時が老いる
またしても薔薇が死ぬ
だれもそれを摘まぬまに
時がうばひ去る薔薇の花。

かうして過去を紡ぐお前よ
お前は知つてゐるか？
一時間ごとに薔薇は散り
お前の紡ぐ麻絲の苧環の一つ一つは
お前の爲めに老嫗の白髮の一本づつであることを
さうして多勢の貴公子はお前の戸口の閉されたのを見出した事を。

さうして夕ぐれが來る度びに
（お前は知つてゐるのか？）
お前の心が少しづつ死んで行くことを
息をした事もなくて……。

窓かけ

トリスタン・クリングソオル

すばらしくいいお天氣だ
鷄が時をつくつた
朝が露の中で微笑してゐる
鵲（かささぎ）は草むらの中にゐる
蝸牛（かたつむり）は野ばらの枝にゐる
太陽が野山の上の重い霞の帳（とばり）をおしあける
若い一人の女が薄い窓かけを曳いて顏を見せる
この時に私の心がばつと明るくなる。

思ひ出

アンリイ・ド・レニエ

お前は思ひ出すか
おお　ロメオよ
お前は思ひ出すか
ヴェロナを包む血の色の
美しい夕ゆふべを
みどりと黄色のアデチの流れを？
お前は思ひ出すか
すずしい庭園を
噴上を
緋衫を
さうして互に仇敵であり

恨みによつて閉された
二つの館の
鐵の格子を
鐵のくさりを?

お前は思ひ出すか
おお　モンタギユウ家の嫡流よ
廣間で踊つてゐた祝祭を
假裝舞蹈の人人を?
さては廣場と大道で行はれた
血なまぐさい戰鬪を
短劍をかざし　長劍をふりながら
または爭ひの中を行く松明を
敷石の上に打ちたふれ
死んで行きながら

鎧下着を脱がうとあせる
蒼ざめた負傷者たちを？
お前は忘れたのか
頭をゆするくせのある
年寄のお前の乳母を
おしやべりで　腹黒い　あの薬種屋を？
庇のかげのあの店を
あのねむりぐすりを
とび色の法衣を着て
長長と光澤のある
橄欖の實の念珠をぶらさげた
あの肥滿つた和尚さまを
あれらの人たちを
あれらのことがらを

あの露臺を
あの鶯を　あのばらの花を？

お前は沈默（だま）つてゐる　お前は答へない
黄色とみどりのアヂヂの流れは
今もなほ昔のやうに
曲りくねつたヴェロナの河岸（かし）を映してゐる
ものうげに渦巻いて流れ行く水の上に
風車はまはつてゐる……
敷石は光る　宮閣に沿うて
庭は眠つてゐる　高い色壁にかこまれて
三人の英吉利人のツウリストが
闘技場（アレエ）の階段をのぼつて行く……
草の廣場（ブラスオナゼルブ）には市（いち）が立つて
赤い大日傘が青い南瓜の上にひろがつてゐる

鳩は噴水に來て水をのみ
カヒユサン僧の古びた僧院の中庭の
石の古井戸には苔がむしてゐる
人は云ふ　おお　ロメオよ
これが「かの女」の墓であると！

お前は沈默つてゐる
然し若しも私が
かの女の戀の名を
靜かな水の中へ
重い小石を投げるやうにして
叫んだなら
若しも私がかの女の戀の名を
小聲に呼んだなら
お前は思ひ出さぬだらうか？

唄　　アンリイ・ド・レニエ

野山の上に夕（ゆふべ）がひろがる……
あなたの思ひ出は私と一緒に來る
思ひ出は面紗をかむつて私の前を行く
われ等は細い小徑を行く
此處は芝草の花さく廣野（ひろの）です
かつてあなたがそこの泉で水をのんだ

此處は丘であり林です
おお　心よ　お前の祕密をかくせ！
それは本當であるか――おお　もう夜が來た
かつて此處で　あなたが私の腕の中で裸であつたとは？
おお　面紗をぬいだなつかしい面さしよ
何と空に星が多いことだ！

唄　アンリイ・ド・レニエ

暗い林の徑をとれ
さうして生垣に沿うて
いかめしい尖つた影が
日と共にのび　日と共にまはる
古い絲杉のそばを通れ。
ためらはずその小徑をとれ
さうしてもう一度見るがよい
古い絲杉の影を……

金と毛で織つた
お前のマントオの下に
お前は持つて來たか
かつてお前の呼吸が
冬も夏も
やすみなく歌つた
あの黒檀の笛を？
ごらん
其處が　昔お前が來て坐つた處だ
幹に笛をはさんで
こだまは今でもなほ　夕の奥に眠つてゐる
月は松の葉かげにのぼり
林は黒い

何故にこのやうに言葉もなくお前は泣くのか？
多くのお前の生命が死んだが爲か？
何も歎かずともよいではないか
夜明を　朝を
重いまひるを
なやましい夜を
戀のすべてを
お前はもう一度生かすことが出來
昔の思ひをそのままに
お前の歌の中に
昔の戀のすべてを
生き得るのであれば！

唄　アンリイ・ド・レニエ

お前は思ひ出すか
伊太利で見たあの廣庭は
薔薇によつて美しかつた……。

お前は思ひ出すか
トオレエンのあの高殿は
川と平野を見晴した。

お前は思ひ出すか
あの田舍の菜園は
海とソルタアニュの匂ひがした。

お前は思ひ出すか
イル・ド・フランスのあの花園は
ロオマンスのやうに明るかつた。

お前は思ひ出すか
ノルマンヂイのあの小さな庭の
茂つて花の咲いたあの草を……。

お前は思ひ出すか
あの露臺を　あの菜園を
あの小庭を　あの廣庭を

さうしてダマスの市の
チユルベエ・ド・サラダンの近くで見た
ああ　あのばらの花を……。

唄

アンリイ・ド・レニエ

明日はやがて秋であらう
すぎた昨日は春であつた
生命は單調な足どりで
時のたまきをかけめぐる、

冬は夏に對し
一月がすぎ四月が去るやうに
リイの花しぼむ頃
ばらの花は咲く。

久遠の愛はよろこびと
かなしさで出來てゐる故に
凡ては終りまた再び始まつて
死んでまたよみがへる。

かがやかしい朝夕に
空は銀いろとなり銅(あかがね)いろとなる
要はただに生きるにある
愛人よ　御身の側近く！。

唄　アンリイ・ド・レニエ

それは只の一と時にすぎぬたらう
ともすればその時も　草の上には日が當り
古木の樹の枝に風があるかも知れぬのだ
窓は開かれてゐるたらう
そして靜かに窓かけは
生きた小鳥の羽のやうに動くたらう
それは只の一と時にすぎぬたらう

古い時計が刻んでゐる
多くの時と同じやうな
われ等がそれを泣き　それを笑ふ間しか
とどまらない　今來てはやがて行つてしまふ
それは一と時にすぎぬだらう
それは一と時にすぎぬだらう
それは言葉なくつつましく
ものうげに　そして裸で
お前が私の處へ來る
それは一と時に過ぎぬだらう。

唄

アンリイ・ド・レニエ

かしこ聲高きヴイオロンと
煩はしきかの笛を默せしめよ
月やがて今ただ一人裸なるかの空へ
沈默のうちに登る可き時なれば。

戀と歡樂とをかくは語り合ふをやめよ
戀はたちまちになやみと變じ
よろこび消えしあとは思ひ出のみぞ心に重し
男はみな空(あだ)にして　なべて女は心變り易(やす)し！。

われは今日より後わがかたはらに
墓石に滴る涙の如く
青銅の水口よりせまき水盤に流れおつる
水の響をのみききてありなん。

唄

アンリィ・ド・レニエ

若しも私が私の戀を
物語つたとすれば
それはその上に私が首だれる時に
私の言葉に耳を傾ける
あの靜かな流れの爲めだ
若しも私が私の戀を
物語つたとすれば
それは木の間に笑ひさうしてささやく
あの風の爲めだ
若しも私が私の戀を
物語つたとすれば
それは風とつれ立つて

歌ひさうしてとびまはる
あの小鳥の爲めだ
若しも私が私の戀を
物語つたとすれば
それは木だまの爲めだ。

さびしいまたよろこばしい心で
若しも私が心から愛したとすれば
それはお前の目だ
若しも私が心から愛したとすれば
それはお前のやさしくさうしてまじめな口だ
それはお前の口だ
若しも私が心から愛したとすれば
それは溫いお前の肉と冷たいお前ゝ手とだ
それなのに今私はお前の影をたづねる。

唄

アンリイ・ド・レニエ

歌ひながら流れる小川と
やさしいしだれ柳と
草野の全體と
高く茂つた草とを戰かせる爲めに
私には小さな蘆の葉の草笛一つで
十分であつた
私には小さな蘆の葉の草笛一つが
森を歌はせるに十分だつた。

通りかかりの人たちがその音を聞いて行つた
夕ぐれの底　こころのおく
沈默のうち　風の中
朗らかにまたはかすかに
近くまたとほく……
彼等自らのおくそこに
彼等自らの心のうちに
きき入りながら通る人たちには
歌ふ私の草笛の音が
今もなほきこえて居り
また何時までも聞えるであらう。

ひと日

戀が涙に濡れたかなしい顔を
水鏡しに來た泉のほとりで
摘みとつたこの小さな蘆の葉の草笛が
通りかかりの人人を涙に誘ひ
草の葉をそよがせ　水をわななかせるのに
私には十分であつた
さうして私は蘆の葉の一と吹きで
森全體を歌はせた。

唄　アンリイ・ド・レニエ

私は何も持たない
金(きん)いろの木の葉を三枚
樵の枝を一本　そのほかに
私は何ももたない。
私は何ももたない
私の踵(かかと)の少しばかりの土と
私のかみの毛の中の夕暮の匂ひと
私の目の中の海の反影と
何故なら私は森の小徑から
砂濱の小徑から歩いて來たからだ
さうして私は通りすがりに樵の枝を切り

さうして私は行きずりに　眠つてゐる秋から
三枚の金の花束を摘んで來た。

これ等の木の葉を受け取つておくれ
それはやさしく黄色であり
それには紫の絲の血管がある
それには光榮と死との匂ひがある
それは運命の黑風に散つたのだ。
お前のやさしい手の中に暫くそれを握つてごらん
それは輕いから　さうして思ひつづけるがよい
或る日の夕
お前の戶口に來てたたき
さうして默つて坐り
さうして歸るときに
黑い杖をまた取上げて

さうしてこれ等の金いろの木の葉を
太陽と死との色の金の木の葉を
お前に殘していつた私のことを思ひつづけるがよい
お前の手をお開け　お前の戶口をお閉め
さうしてそれ等の木の葉を
風に吹きちらせるがよい！。

黄色い月

アンリイ・ド・レニエ

なよやかにポプラの葉かげにのぼつて行く
黄色い月に照らされて永い一日が暮れて行く
月の光のほの匂ふ夕暮の空氣のうちに
濡れた葉の間に眠る水の匂ひがひろがる頃を。

焦きつけるやうな太陽のもとに二人して
赤い土と強い木の根を掘り起しながら
われ等思つたであらうか？

熱い砂の上にわれ等の歩が血の足跡を印した時に
われ等思つたであらうか？

望のない苦痛に傷いたわれ等が心のうちに
戀がはげしい焔をもやした時に
われ等思つたであらうか？
われ等を焦きこがす火の死んだ後で
灰がわれ等の夕にかくまでやさしく親み多く、

濡れた葦の間にもの思ふ水の
匂に滿ちて暮れ行く苦い今日の日が
ポプラの葉かげに圓くのぼる
黄色い月に照らされてしとやかに暮れようと
われ等思つたであらうか？。

雨の庭　アンリイ・ド・レニエ

窓はひらかれてゐる
雨がふつてゐる　ほそほそと
眠つてゐる爽(さわやか)な庭に
ひそひそと次次(つぎつぎ)に。

雨が樹木を呼びさまし
ひと葉ひと葉に緑(みどり)を塗る
壁垣の前で葡萄棚が
もの憂げに伸(のび)をする。

草の葉がわななく
向うの方で砂利が音て立てる
草と砂の上に微な足音のやうに
それが聞えて來る。

こつそりと人目を忍んで
庭はささやき身ぶるひする
雨はその機絲の一筋づつで
天と地とを織りつづける。

雨がふつてゐる　目をとぢて
私は聞入る　庭一面にふる雨の音を
私の心のものかげにしたたり落つる
ぬれた庭の滴であるかと。

風車　エミル・ヴエルアアレン

あはれ廻るよ風車
夕の奥にしづしづと
かなしみと憂ひに滿てる空の上
まはるよ　まはるよ風車
紫いろの翼さへ
限なくさびしげに　はかなげに
ものうげにおもたげに。

夜あけと共にめさめ出で
翼はのぼりまた落ちぬ
歎きの腕のそれに似て

今し見よかし　あな哀れ
翼はまたも落ち來る
あなた小暗き夕ぐれの
死せるが如きしづけさを。

病めるが如き冬の日は
村村の上にねむれり
空流れ行く雲いまや
さびしき旅路にあきはてつ
陰を集めし並木に沿うて
轍のあとは果しなく
遠くさびしく
死せるが如き地平へつづく。
とある丘のふもとにて

木造の農家四五
貧しげに倚り竝び
銅のランプ
天井よりさがり
窓と壁とを照す。

果知れぬ廣き野の
眠れる如きかなしさの中にて
病みほうけたる陋屋は
哀れふかくも破れたる
窓の硝子の眼もて
かの年老いてなほまはる
つかれたる　まはりて死ぬる
風車をはみつむ。

今日の人に　エミル・ヴエルアアレン

世界を思念し　矜を感ぜよ　汝今の時に生る者
世界は汝の心臓の波動に連れて顫動し喜悦し鼓動する
世界は汝の律(リトム)を享け入れる　そして汝の思念は未だかつて
今日のやうに人間らしく神化したことはない。

今日神は汝自身以外の何物でもない
神の永劫は汝の計畫の風の前にぐらつき出した
汝は聖い地に汝の命令を印す
自今汝計りが地を創造する如き程度に。

怖れらるる人たらずに奮闘の人たらんとする正しき希望と
戰ひと衝突との怖るべき災害を
心から憎むことを
卑陋な戰爭も刈りつくしはしなかつた。

明快にして敏感な汝の感覺は
汝自らのうちに全宇宙を入らしめ
汝の腦の明るさの中に永劫の生命と
新らしき情景とを悉く彫みつける爲めに不斷に開かれてゐる。

神秘は永久の生命のうちに　天才は明確な汝のうちにある
自今汝は冒險をすてて
汝を未來の大に持ち行くべき法則を
正確に發明して行くであらう。

小唄　モオリス・メエテルリンク

第一

少女（をとめ）は「それ」を岩屋の中につないで
扉の上に目標（めじるし）をした
少女（をとめ）は光を忘れ
鍵は海に沈んだ。

少女は夏の日を待つた
少女は七年も待つた
年毎に一人づつ旅人が過ぎた。

少女は冬の日を待つた
待つほどに黒かみは
何時か白髪になつた。

人等かの女をたづね　人等かの女を見出で
人等岩屋に忍び入り
さては岩屋に灯をともす。

或る夕なほ一人の旅人は過ぐれども
その灯の故を知らねば
怖れて近づかうとはしない。

旅人はその灯を怪しいしるしと思ひ
旅人はその灯を金の泉と思ひ
旅人はその灯を天使のたはむれと思ひ
迂り路してなほもその道を續ける……。

小唄　モオリス・メエテルリンク

第二

若しも一と日かの君かへり來まさば
　何と申し上げたらよいでせう？
――わたしがかの君を待ち侘びて
　焦れ死したと告げておくれ。

かの君なほもわたしを見知らずに
　なほ問ひまさば？
――尼君のやうに語るがよい
　ともすればかの君惱み給はんに…

若しもかの君　御身いづこにと問ひまさば
　何とお答へしたらよいでせう？
——彼の君に參らせ　わたしのこの金の指環を
　何の答へもなしに……。

若しもかの君　かくも荒みゐる室の理由を
　知らんとて問ひまさば？
——かの君の爲め　指ざし示してお上げ
　消えたランプと開かれた戸口と……。

いや果に若しもかの君
　最期のさまを問ひ給はば？
——かの君の泣くをおそれて
——わたしが微笑んだと告げておくれ……。

小唄　モオリス・メエテルリンク

第三

人等三人の少女を殺した
かの女等の心の中に何があるかを見る爲めに。

第一の心は幸福で一ぱいだつた
さうしてその血が流れた場所に
三つの蛇が口笛を鳴らしてゐた　三年の間

第二の心はやさしさで一ぱいだつた
さうしてその血が流れた場所に
三つの仔羊が草を食べてゐた　三年の間。

第三の心は不運で一ぱいだつた
さうしてその血が流れた場所に
三人の天使が見張をしてゐた　三年の間。

小唄　モオリス・メエテルリンク

第四

目隠しをした少女たち
（金の目隠しをおはづしなさい）
目隠しをした少女たち
かの女等の宿世を尋ねて……。

真昼どき戸をあけた
（金の目隠しをしておいて）

眞晝どき戸をあけた
　牧場の中の宮殿の……。

さうして生命に禮拜した
（金の目隠しをしめなほせ）
さうして生命に禮拜した
　さうして其處からもう出て來なかつた……。

小唄　モオリス・メエテルリンク

第五

三人の盲目の姉妹
（なほも望みはすてず
三人の盲目の姉妹
金のランプを捧ぐ。

塔にのぼり行き
（かの女たち　君たちさてはおのれたち）
塔にのぼり行き
七日まちたれど……。

第一の一人叫び云ふ

（なほも望みはすてず）

第一の一人叫び云ふ

ああ！　ああ！　われは聞くわれ等が光明を……。

第二の一人叫び云ふ

（かの女たち　君たちさてはおのれたち）

第二の一人叫び云ふ

ああ！　ああ！　上り來るは王さま……。

第一に聖い一人は叫ぶ

（なほも望みはすてず）

第一に聖い一人は叫ぶ

否とよ　否とよ　われ等が光は消えた……。

小唄　モオリス・メエテルリンク

第六

誰か云ひに來た
（娘や私はおそろしい）
誰か云ひに來た
あれが去り行くのだと……。

私のランプに灯をともして
（娘や私はおそろしい）
私のランプに灯をともして
私はあれの方へすすんだ……。

第一の扉の前で
（娘や私はおそろしい）
第一の扉の前で
ランプの灯がわなないた……。

第二の扉の前で
（娘や私はおそろしい）
第二の扉の前で
ランプの灯がつぶやいた……。

第三の扉の前で
（娘や私はおそろしい）
第三の扉の前で
ランプの灯が消えた……。

小唄　モオリス・メエテルリンク

第七

オルラモンドの七人の娘たち
　仙女（フエアリイ）が死んだ時に
オルラモンドの七人の娘たち
　戸口をたづねてまはつた。

かの女等の七つのランプに灯をともし
　數數の塔をひらき
四百の廣室（ひろま）をひらいたけれど
　遂に日を見ることなくて……。

木だまする岩屋にいたり
　おりて行くに
閉された扉の上に
　金の鍵を見出でた。

戸のすき間から海洋をのぞき見て
　死ぬことが怖ろしいので
開けようとはせずに
　閉された扉の上をたたく……。

小唄　モオリス・メエテルリンク

第八

かの女は三つの金貨を持つてゐました
誰にそれ等をやつたでせう?

かの女は金貨の一つを自分の兩親にやりました
兩親は金の鞭を買つて
春の來るまでかの女を育てました。

かの女は金貨の一つを戀人たちにやりました
戀人たちは三つの銀の絹を買つて
秋の來るまでかの女を愛しました。

かの女は金貨の一つを自分の子供たちにやりました
子供たちは三つの鐵の鎖を買つて
冬中かの女をつないで置きました。

小唄　モオリス・メエテルリンク

第九

見知らぬ女が王宮の前へ來た
——夜が明けようとしてゐる——
見知らぬ女が王宮の前へ來た
騎馬の番兵は互に顔を見合せ
女たちは皆語るをやめた。

見知らぬ女が宮門の前に立ちとまつた
——夜が明けようとしてゐる——
見知らぬ女が宮門の前へ立ちとまつた

お妃さまのお歩きになる音がきこえた
王様がお妃さまにおたづねなされた。

何処(どこ)へ行くのです　何処へ行くのです？
——用心なさい　よくものが見えませぬ——
何処へ行くのです　何処へ行くのです？
誰か彼方(むかう)にあなたを待つてゐるのですか？
然しお妃さまは返事をなさらなかつた。

お妃さまは見知らぬ女の方へ下りて行きなされた
——用心なさい　よくものが見えませぬ——
お妃さまは見知らぬ女の方へ下りて行きなされた
見知らぬ女がお妃さまに接吻した
二人は一と言も語らずに
やがて遠くへ行つてしまつた。

戸口に立つて王様が泣いて居られた
――用心なさい　よくものが見えませぬ――
戸口に立つて王様が泣いて居られた
お妃さまのお歩きになる音がきこえた
木の葉の落ちる音がきこえた。

小唄　モリオス・メエテルリンク

第一〇

戀人が出て行つた時
（私は戸の音をきいた）
戀人が出て行つた時
かの女は微笑んだ……

戀人がかへつて來た時
（私はランプの音をきいた）
戀人がかへつて來た時
別の女がそこにゐた……。

さうして私は死を見た
（私は彼の魂の音をきいた）
さうして私は死を見た
死は今でもかの女を待つてゐる……

小唄　モリオス・メエテルリンク

第一

お母さま　あなたには何も聞えませぬか？
お母さま　人が知らせに參りました……
娘や　お前の兩手を握らしておくれ
娘や　それは大きなお船なのだよ……

お母さま　用心せねばなりませぬ
娘や　それは旅立つ人人なのだよ……
お母さま　これは恐ろしいことではないでせうか？
娘や　船は遠ざかつて行くのだよ……

お母さま　あれがまたも近よります……
娘や　船は港の中にゐるのだよ
お母さま　あれが戸を開けてゐます……
娘や　それは出かける人人なのだよ

お母さま　それは誰かが入つて来るのです
娘や　船は碇を上げたのだよ
お母さま　それは小聲に何か云つてゐます……
娘や　それは戸外（おもて）を通る人たちなのだよ

お母さま　それは星をかくします……
娘や　それは帆のかげなのだよ
お母さま　それは窓をたたいてゐます……
娘や　窓は開くかも知れぬのだよ……

お母さま　暗くなつて來てものが見えませぬ……
娘や　船は海の方へ行くのだよ
お母さま　私には其處ら中にその音が聞えるのです……
娘や　お前は何の事を云つておいでなのか？

小唄　モオリス・メエテルリンク

第一二

お前はランプを灯けた
――おお！　庭の中の太陽！
お前はランプを灯けた
私には太陽が戸の隙間から見える
庭の戸を開けるがよい！

――戸の鍵は失はれた
待たねばならぬ　待たねばならぬ
鍵が塔から落ちた

待たねばならぬ　待たねばならぬ
他の日を待たねばならぬ……

——他の日が戸を開くだらう
森は門の見張をしてゐる
森はわれ等の周に燃えてゐる
戸の敷居の上に燃えてゐるのは
落葉のかがやきだ……

——他の日はもう疲れてゐる
他の日はまた怖れてゐる
他の日はもう來ないだらう
他の日もまた死ぬだらう
われ等もここで死ぬだらう……

小唄　モオリス・メエテルリンク

第一三

妹たちよ　三十年の間　私はたづねたのだ
　あの人は何處にかくれたのか！
妹たちよ　三十年の間　私は歩いたのだ
　遂に近づくことなしに……
妹たちよ　三十年の間　私は歩いたのだ
　さうして今私の兩足は疲れてゐる
妹たちよ　あの人は到る處にゐたのだ
　あの人は存在しないのだ……

妹たちよ　さうして悲しい今の時が来た
　私の草鞋をぬがせておくれ
妹たちよ　夕ぐれも死んで行く
　さうして私の心は痛む……

妹たちよ　君等は二八の少女だ
　さあ遠くへ行くがよい
妹たちよ　私の巡禮杖を持つて
　さうして尋ねに行くがよい…

小唄　モオリス・メエテルリンク

第一四

三人の姉妹(きやうだい)が死を希ひ
てんでに金の冠(かんむり)をつけて
かの女たちの死を尋ねて行つた

森の方へ行つた
「森よ　われ等の死をおくれ
これ等三つの金の冠をお前にやらう」

森は微笑んで
かの女等に十二の接吻を與へた
接吻はかの女等に未來を教へた

三人の姉妹が死を希ひ
海をたづねて出て行つた
三年の後に海に出た

「おお海よ　われ等の死をおくれ
これ等三つの金の冠をその代りにお前にやらう。」

すると海は泣き出した
さうしてかの女等に三百の接吻を與へた
接吻はかの女等に過去を教へた

三人の姉妹が死を希ひ
市をたづねて出て行つた
島のまん中に市を見つけた

「おお市よ　われ等の死をおくれ
これ等三つの金の冠をその代りにお前にやらう」

市はすぐに門を開いて
激しい接吻で姉妹を被うた
接吻はかの女たちに現在を教へた。

小唄　モオリス・メエテルリンク

第一五

すべての涙する魂の爲めに
すべての過ぎゆく罪障の爲めに
わたしは星のふところの中に
惠みにみちたわたしの雙手をひらく

みめぐみ語るとき
すべての罪障は消え
みめぐみ涙するとき
亡び行く魂もない……

みめぐみ下界の小徑に
道を失ひ迷ひ入ることあるも
その涙は常にわたしを見出し
道に逢ふことはない……

夕暮の時が來ると　シャルル・ヴアン・レルベルグ

夕ぐれの時が來ると
黑い白鳥たちが
暗いお化(ばけ)たちが
花から　物から　われ等から生れ出る
われ等の影がそれだ。

・

影たちは進む　日は沈む
影たちは黃昏の中を行く
靜かにすべるやうにして。

影たちは集まり　影たちは誘ひ合ひ
影たちは音なくたづね合ひ
さうして皆一つしよになつて
彼等の小さな翅で
大きな夜をつくる。

けれども夜明が水の中で目をさまし
さうして彼の大きな松明を取上げる
さうして夜明はのぼる
夢のやうに少しづつのぼる
さうして水の面にブロンドの頭と
青い目をひらく。

さうすると忽ちに　逃げるやうにして
影たちはかくれる
どこへとも知れず
水の中へ消えたのかしら？
地の下へかくれたのかしら？
花の中へ入つたのか？
石の中へかくれたのか？
それともわれ等の中へかくれたのか？
誰もそれを知らぬのだ
さうして閉された影たちの羽がやうやく休む
これが朝である。

輪踊　シャルル・ヴァン・レルベルグ

お前の圓い手を私の手の中に
私の手の中にお前の桃色の手を
かうして輪踊ををどりませう

私の口は圓い　私の乳房は圓い
酒杯のやうに　脩樹のやうに

細くつてしなやかなさうして丈の長い私の金いろの髮の毛に
私は圓い薔薇の冠をかざりました

お前の桃色の手を私の手の中に
静かな夜更けのお月さま
さうして夜明のおてんとさま
私の裸の腕　私のブロンドの巻髪
私の接吻　それに私の心
世界中で一番美しいものは
どれもみんな圓いもの
さあ　輪踊ををどりませう。

私は君たちであり

シャルル・ヴァン・レルベルグ

おお　指先で私がふれるものよ
おお　まばゆき私の瞳にうつる光よ
私は君たちであり
君たちは私でないのかしら？

私が匂ひをかぐ花　私を照す太陽
もの思ふ私の魂

何處で私は終り　何處で私は始まるかを
誰が私に云ひ得よう？。

ああ！　限りなく私の心が
到る處に見出されること！
おお樹木よ　お前の樹液は私の血であるよ！
美しい河流のやうに
ものみなのうちに同じ生命は流れ
われ等みな同じ夢を見る。

アリエツト

フエリツプ・ヴアンデルピル

お前がすぐ其處に來てゐるやうに思はれて私は戸口をあける。
戸口をたたいたのはお前ではなかつたのか？
お前は落葉のかげにかくれてゐる
さうして風の中で私のリトムはゆれる。
お前が遠い處にゐるやうに思はれて　私にはお前が死んでしまつたやうな
　氣がする。
私の思ひがきこえるか？
私はもう感じるのだ　私の門口に冬が來てゐると
さうして風の中で私のリトムがみだれると。

死人の彌撒　フエリツプ・ヴアンデルビル

私は知つてゐる　やがて　冬のとある日の
五時頃のはや灰色の夕暮に　私は死んで行くのだと
哀れな同僚たちの意地わるさにもあきはてて
然しまた恨もなく怖もなく　あきらめて安んじて。

私の側にはただ一人　妻のみがゐるだらう
かの女は私に云ふだらう　私の最期の時はまだ遠いと
かの女は和らげてくれるだらう　私の斷末魔の苦みを
かの女は私に接吻するだらう　すべてを赦した上で。

私は今　これらのすべてを豫感する
私自身にも氣に入らぬ　晦澁な氣位高い　多くの本を私は書いた事だらう
さうして私の唯一の云ひ譯は　それらの本を私は生きて來たのだと云ふにあるのだが
その日この云ひ譯はもう云ひ譯にはならぬだらう。

その時私は六十近い年であらう
わたしの友は皆さびしい光榮の中に生きてゐるだらう
さうして私が死んだことなぞはあんまり氣にもとめぬだらう
翌日墓場へ一人の老女が百合を抱いて來るだらう。

プロロオグ

フエリツプ・ヴアンデルビル

私をこの世に生んだ神樣を私は赦して上げる
何故なれば　神さまは　出來るだけのものを私に下さつたのだ
あらゆる季節とあらゆる困窮と
私の激しい戀と力ある私のリトムと。

神さまが私を人間にお造りになつたことを私は赦して上げる
何故なれば　神さまは　私を導いて下さつたのだ
アネモネと百合のあひだに其庭の道の奥に
私が言葉を見つけた廣い庭の中へ。

秋の一日に　とあるふるい國から　遠く
人たちが呼んで佛蘭西だと云ふ
さうして私が呼んで極樂だと云ふ國へ
私を連れて來て　目ざめさせて下さつた神さまを私は赦して上げる。

途上の歌

フエリツプ・ヴアンデルピル

麥は地から生え
光は太陽から生れる
冬が死ぬ時に
歌は心臟から流れ出る

これ等のもの音は
その上で小鳥が會話してゐる樹木から來るのだ
しだれ柳の下で
岩は水音をたくはへる

このやうに萬物は
自分にそのよろこびを持つてゐる
私は生きるのだ
私の中にある詩によつて。

微笑　ルミ・ド・グウルモン

微笑は模糊として捕へ難き神なり　いのち短き光なり
碧潭風なく波静けき處　矢の如走する蜻蛉が
水面を輕く掠め去るその瞬間にも似たるかな

「戀の神」の兄弟微笑には小さき羽あり
その箙には白銀の矢みてり
その矢　鏃は欲念　その矢　矢羽は節制

微笑の眼は戀の仄かなる悦びの心地よき青玉
されど忘却が目くばせする時は
その目は碧玉の如く見え　時に又土耳古玉の如く見ゆ

色紅きその脣にはばすてる蕊の輕韻ありて
その紅さ和かに　唐撫子の花瓣に似たり
その口ひらく時　火花の如き紲見ゆる

微笑は變化かぎりなき有耶無耶の象なり
枝上の小鳥の囀きより微笑の體はなほ輕し
彼方に飛び交ひ此方に移り狙ひすませど捕へ得す

人　微笑を捕れりと思ふ時早くも微笑は夢と消ゆ
網に燕を捕るよりも微笑を捕るはなほ難し
さて捕はれとなる時は籠の中にて命たゆ

微笑は電花の列に似て彼方に現はれ此處に消ゆ
今し饒舌すると思ふ間にはや羽搏して馳せて去る
微笑は嬉戯し嘲弄す　微笑ははしこき蝶兒

微笑は光　微笑は匂　微笑は葉末の露の玉
微笑は姿を變ふるなり　或は松明（たいまつ）また燐火（りんくわ）
黄昏の星　牧（まき）の野火

あはれ微笑は光なり　微笑の髪の周圍（しうゐ）には
菫　ぢんづりん　あめちすと
青　紅　紫　淺黄ちりばふ

微笑の色の樣樣は特に何れも紛（まぎら）はし　何れも特に愁（さび）しかり
そは瞥ふれば太陽にあこがれ過ぎし白き花
茶褐（ちやかつ）の色は疼痛を樂しむ心と似たるかな

肉色と藁色とを僅かに交へたる白さ
海の色　空の色　麗かなる碧潭の色
これ等の色は神神の嘲（あざけ）りの目を色づくる

ああ！　遊女(あそびめ)の目の下を染めて身にしむ鉛色！
ああ！　たをやめの頬に照る朱(しゆ)
眞白き膝の「月の女神(ヂヤアヌ)」よ　宿命の乳房あらはなる汝ヴエニユス
微笑は匂ひなり　愛撫なり
天來の淸香はそが接吻に生氣づけ
目に見えぬそが氤氳(いんうん)を　そが轉化する痙攣(けいれん)を激せしむ
微笑は光り　微笑は匂ひ　微笑は葉末の露の玉
微笑は變幻極みなく人の魂魅する神

反歌

ああ！　わが愛人よ！　微笑は卿を愛す
微笑は王者の如く卿に來る
微笑は卿の心の中に嬌姿と艶美とを宿し
微笑は卿の脣を　目を　齒を　聲を熱愛す

ブロンドの林　ルミ・ド・グウルモン

われは戀の女の戀に滿ちたる身體なり
わが草は明るき涙に濡れたる睫にて
わが晝顏は瞳の如く開きたり
見よかし　日の如き瑠璃萵苣のやさしき花は
星に　希望に　微笑に似て咲き出でたり
われは戀の女の戀に滿ちたる身體なり。

われは戀の女の戀に滿ちたる身體なり
わが長春藤はたわわなる髮にして
わが忍冬は耳の形に葉末を卷きたり
鈴蘭は白き齒にして野ばらは鼻なり

赤き籠膽は脣よりも紅きなり！
われは戀の女の戀に滿ちたる身體なり

われは戀の女の戀に滿ちたる身體なり
わが柳には横より見たる撫肩の優しさあり
わが筐柳はわななける慾念の腕にして
わがぢぎたりすは花車なる指なり
女の爪の圓さにも增してわが葵の花はやさし
われは戀の女の戀に滿ちたる身體なり

われは戀の女の戀に滿ちたる身體なり
わが纖細きぽぷらにしなやかなる姿あり
わが色白くして固き撫は引締りたる乳房なり
わが大いなる篠懸は氣高き鹿子色の幹の楯を
女人の腹の如くに彎曲せたり

われは戀の女の戀に滿ちたる身體なり

われは戀の女の戀に滿ちたる身體なり
赤き蕾よ　血に滲みたる雛菊の蕾よ
汝こそは清き花瓣にしてまた處女の乳房なれ
あねもねは臍！　山林檎は乳房の尖！
木苺は愛嬌頰黒！　風信子は青き血筋！
われは戀の女の戀に滿ちたる身體なり。

われは戀の女の戀に滿ちたる身體なり
わが腋に凹みたる腰と臀の艶美あり
わが若き脛に脚の形と美しさあり
わが膝の素足は泉のうちにうねり
またわれに褐色の苔と神祕と陰影とあり
われは戀の女の戀に滿ちたる身體なり

毛

ルミ・ド・グウルモン

シモオン　お前の毛の林のうちに
大きな不思議がある。

お前は乾草の匂ひがする
お前は獸が寢たあとの石の匂ひがする
お前は鞣皮の匂ひがする
お前は篩ひ立ての小麥の匂ひがする
お前は薪の匂ひがする
お前は朝毎に來る麪包の匂ひがする
お前はくづれた土塀に沿うて

咲いた花の匂ひがする
お前は木苺の匂ひがする
お前は雨に洗はれた常春藤の匂ひがする
お前は夕暮時に刈り入れる
燈心草と齒朶の匂ひがする
お前は柊の匂ひがする　お前は蘚の匂ひがする
お前は生籬の陰にある
實りをはつて枯れた黄いろい草の匂ひがする
お前は野芝麻とえにしだの匂ひがする
お前は苜蓿の匂ひがする　お前は牛乳の匂ひがする
お前は茴香の匂ひがする
お前は胡桃の匂ひがする
お前はよく熟れて摘みとられた果物の匂ひがする
お前は花を一ぱいつけた時の
槲と菩提樹の匂ひがする

お前は蜂蜜の匂ひがする
お前は牧場の中をさまよふ時の
人生の匂ひがする
お前は土と河の匂ひがする
お前はいろごとの匂ひがする
お前は火の匂ひがする。

シモオン　お前の毛の林の中に
大きな不思議がある。

水　車

ルミ・ド・グウルモン

シモオン　水車はひどく古い
輪はむす苔に青い　輪は廻る大きな穴の奥
氣味惡く輪は過ぎる　輪は廻る
果しない苦役のためと云ふやうに。

あたりの壁は揺る
夜中の海の上を汽船で渡るやうな氣がする
氣味惡く輪は過ぎる　輪は廻る
果しない苦役のためと云ふやうに。

あたりは暗い　重い挽臼たちの泣く音が聞えて來る
挽臼たちはお祖母さまよりも優しくお祖母さまよりも老てゐる
氣味惡く輪は過ぎる　輪は廻る
果しない苦役のためと云ふやうに。

挽臼たちは優しい年よりのお祖母さま
子供の力もそれを止め　僅な水もそれを動かす
氣味惡く輪は過ぎる　輪は廻る
果しない苦役のためと云ふやうに。

挽臼たちは僧正さまのやうに優しい
挽臼たちは私たちを惠み助ける麪包をつくる
氣味惡く輪は過ぎる　輪は廻る
果しない苦役のためと云ふやうに。

挽臼たちは人を養ふ
人の手を慕ひ人の爲めに死ぬ從順な獸を養ふ
氣味惡く輪は過ぎる　輪は廻る
果しない苦役のためと云ふやうに。

挽臼たちは働いてる　泣いてる　廻つてる　つぶやいてる
昔の昔の昔から　世界の始めから
氣味惡く輪は過ぎる　輪は廻る
果しない苦役のためと云ふやうに。

雪

ルミ・ド・グウルモン

シモオン　雪はお前の襟足のやうに白い
シモオン　雪はお前の兩膝のやうに白い

シモオン　お前の手は雪のやうに冷たい
シモオン　お前の心は雪のやうに冷たい

雪を溶すには火の接吻
お前の心を解くには別れの接吻

雪はさびしげに松の木の枝の上
お前の前額はさびしげに黒かみのかげ

シモオン　お前の妹雪は庭に眠つてゐる
シモオン　お前は私の雪　さうして私の戀人

落葉

ルミ・ド・グウルモン

シモオン　木の葉の散つた森へ行かう
落葉は苔（こけ）と石と小徑とを被うてゐる。

シモオン　お前は好きか　落葉ふむ足音を？

落葉の色はやさしく　姿はさびしい
落葉は果敢（はか）なく捨てられて土の上にゐる！

シモオン　お前は好きか　落葉ふむ足音を？
夕べ　落葉のすがたはさびしい
風に吹き散らされる時落葉はやさしく叫ぶ！
シモオン　お前は好きか　落葉ふむ足音を？
倚りそへ　われ等も何時かは哀れな落葉であらう
倚りそへ　もう夜が來た　さうして風が身にしみる。
シモオン　お前は好きか　落葉ふむ足音を？

夢の面影

ルミ・ド・グウルモン

月の光の輝るもとに目なざし清き君は立つ
やさしき夢の泉なる果敢なき月の輝る下に
月の光の其處となきありとしもなき薄靄に
星かげ匂ふ美しき君が前額は蒼ざめぬ
丈なす君が黑髮は君が後にただよひぬ

君が瞳の奥深く君が思ひは眠りゐぬ
あらはに雅し首には眞珠の玉の首かざり
七重に八重にほの青き星のほほ笑み見せてゐぬ
同じき戀の腕かざり兩の手首を卷きてゐぬ
君が頭は頂きぬ　劍の如くその戀人の心に刺り入る
神秘の玉の數七つ竝めちりばめし王冠を
やさしき夢の泉なる果敢なき月の輝る下に。

あらしの薔薇

ルミ・ド・グウルモン

白き薔薇は傷つきぬ
荒ぶ暴風雨の手あらさに
されども花の香はましぬ
多くも享けし苦の爲めに
帶には挾め　この薔薇
胸には祕めよ　この傷手

暴風雨の花に汝も似よ
手箱に祕めよ　この薔薇
さては暴風雨に傷つきし
花の由來を思ひ出よ
暴風雨は守りぬ　その祕密
胸には祕めよ　この傷手。

地上禮讃

ポオル・フォル

觸覺よ　視覺よ　聽覺よ
すべてのわが官能よ
婚姻せよ！
われ山に登り　身はいま中空(ちゆうくう)にあり
地はわが足下にあり
おお！　地はわれを歡喜せしむるかな！
わが足下に地は美しくかすめるかな
もやの彼方(あなた)に明(あき)らかにうれしげに！
谷の曲折にわが胸は雀躍(こをどり)す
さてわれは感ず

今日ぞわが一生の最もよき日なりと。
觸覺よ　視覺よ　聽覺よ
すべてのわが官能よ
婚姻せよ！

打ち振れたる金鈴の内側を
馳せ廻る響の如くわななける
遠き平野をわれは見る
太陽の手にたたかれて刈麥は
ほがらかに鳴りひびく
ひなげし咲ける畑はより高き響の如し
天と地と相逢ふ境まで音階は馳せめぐる
果しなきわななける麥の穗の食卓布の上を
われは愛づ　置れる麥の
靜かな抑揚を！

平野の果はまた響の如く
消え入らん風情なり。

われは地を見る　われは地を聞く
地はわが眼下にあり　地はわが耳中に生く
瀏喨となりひびき　いや更に地は美し！
地の青き層は下りまた上りさては止まる
ゆるき傾斜の芝生の丘平野に下り
その先は黄金の刈草の平地なり
地はわが眼下に瀏喨となりひびく
われに聞えては地はなほも瀏喨となりひびく。

わが夢に答する樂器をばかなづる如く
わが指もて自然をばかなでんかな
（大氣のうちにこだまする壯なる響を

樫の幹よりひびかせよ！）
熟せる麥よ　微風に唄ふかの海のごと
われ君等を唄はせん
われ若し幸福なるかの風のごとおほろかに
君等の上に横はるを得んには
ああ　われ横はるを得んには！　……
われ地の到處のささやきを試みん
わが指もて自然をばかなでんかな。

さはれ凡ての自然はわが心臓の戸口にあり
わが生の鼓動に韻律を合せたれば
地も太陽も同じき曲節になりひびく
おお　わが生よ　日の光汝がうちにしみ入る！
われわが官能を日輪と花の間にさまよはしむる時
報償の如く日の光はわが生に加はる。

地と太陽とわがうちに律動し
すべての自然はわがうちに入りたり
わが心臓は歡喜に醉ひたり——
吹き起る狂ほしきよろこびの風にゆれつつ
地上にもひろがりぬわが心の感激
麥は抱擁し　幸福なる牧場のうちに
ポプラの首はうごき　前額(ひたひ)は泳ぐ
情慾にみちて夏の日の風のまにまに
わが心臓は全自然の上に君臨す
自然はわが心臓のうちにとけ
わが心臓は自然のうちにとけたり
おお　常にかくてわれ生きんかな
樹木のうごきにうちゆられつつ。

彼等わが言にききて
彼等の官能を彼等より遠く
風の間に　地の上に　空中に
生くるに任ぜんには
人間もまた神たらん
ああ　何故に彼等はそれを欲せぬのか？
その時　全宇宙は彼等の大きな魂であり
汲みきれぬ心臓であらうものを
かくて各人は幸福になり得るのだ
わたしは云ふ
「人間よ　君等の官能の思考するに任せよ
されば君等は神たらん」と。

おお　地よ　瀏喨と鳴りひびくわが心臓のうちに
汝の雪とともに下れ

汝の葡萄とともにのぼれ
急流よわが心のうちにくづれよ
大河よわが心のうちに流れよ
われをしてわが心のうちに
壯大なる線の唱歌をきくに任せよ！
われは兩手を差しのぶ
刈麥の食卓布(ナップ)の傾くあたりへ
青白き波となりて空(そら)の下に横はる
やさしくしなやかなる地平線を
わが手は愛撫す
同じやうなる愛撫
今わがうちにも瀏喨たり矣。

われは山上にあり
わが眼は空より下る

地も太陽も同じき國なり
されど地はわれを狂喜せしむるかな
わが官能のむさぼるがままに
ああ地は美しきかな！
澄み渡る空氣のうちに村はあり
赤き屋根　木影なる谷のあかるき調子！
鐘樓の瓦屋根は日の前に輝きて
雉鳩の胸毛の如く色變る。

この娘

ポオル・フォル

この娘　娘もたうとう死にました
戀のなやみに死にました。

村人は娘をば　地の中へと埋めました
明け方に地の中へと。

村人は娘をば　たつた一人でねせました
着かざつて　たつた一人で。

村人は娘をば　たつた一人でねせました
棺のなかに　たつた一人で。

村人は歸つて來ました　たのしげに
にぎやかに　日とともに

村人は歌ひました　たのしげに　にぎやかに
「どうせ一度は誰も死ぬ
この娘　娘もたうとう死にました
戀のなやみに死にました」

村人は畑へと出て行きました
畑へと　日毎のやうに．

やさしい歌

ポオル・フォル

わたしはもうわたしの草笛よりも
聲高く歌はうとは思はない
わたしはまた昔わたしが搖籃の中で聞いた歌よりも
聲高く歌はうとは思はない
わたしはまたあの雲雀よりも
明け方の鐘樓の屋根に鳴る草の實よりも
聲高く歌はうとは思はない
わたしはまた木の葉の上に降る雨の歌よりも
聲高く歌はうとは思はない……

わたしに一番似合ふのは
木の葉の囁きよりもなほやさしい歌
川柳をそそる小川の流れよりも纖細な
青空を渡る鴎や雲雀よりもなほほのかな
又はかのあるやなきやの
響を立てる朝の吊鐘草
又は忍び音に吹くわたしの草笛よりも
輕い調子をもつた歌。

ああ　わたしの好きな歌は……
哀しくしかも氣隨なやさしさの籠つた節で
聖母マリアが基督に歌つてきかせて慰み
工匠ヨセフが口すさんで
神の子を眠に誘つた歌よりも
もつと一際やさしい歌

おお　響きかすかなその歌聲よ
世に類ひもないその歌は
そのかみの日に基督が
ベトレエムの空でたびたび歌つた歌
さうして今でもなほ
シリヤの少女等が泉のかたはらで
夜更の空を仰ぎながら
徐かにかき鳴らす竪琴に合せて
小聲に歌ふその歌だ！

幸福　ポオル・フオル

幸福は牧場にゐる
早く駈け出せ　早く駈け出せ
幸福は牧場にゐる
早く駈け出せ　早く駈け出せ
幸福は逃げてしまふぞ。

幸福を捕へようと思ふなら
早く駈け出せ　早く駈け出せ
幸福を捕へようと思ふなら
早く駈け出せ　早く駈け出せ
幸福は逃げてしまふぞ。

杉菜とたんぽぽの間を
早く駈け出せ　早く駈け出せ
杉菜とたんぽぽの間を
早く駈け出せ　早く駈け出せ
幸福は逃げてしまふぞ。

羊の角の上を
早く駈け出せ　早く駈け出せ
羊の角の上を
早く駈け出せ　早く駈け出せ
幸福は逃げてしまふぞ。

小川のせせらぎの上を
早く駈け出せ　早く駈け出せ
小川のせせらぎの上を

早く駈け出せ　早く駈け出せ
幸福は逃げてしまふぞ。

林檎の木から櫻の木へ
早く駈け出せ　早く駈け出せ
林檎の木から櫻の木へ
早く駈け出せ　早く駈け出せ
幸福は逃げてしまふぞ。

生垣をとびこえて
早く駈け出せ　早く駈け出せ
生垣をとびこえて
早く駈け出せ　早く駈け出せ
幸福は逃げてしまつた。

輪踊り

ポオル・フオル

世の中の女の子たちが悉く
手をつなぎ合ふその時は
海をめぐつて輪踊りを
踊る事さへ出來ませう。

世の中の男の子たちが悉く
船乘となるその時は
海に綺麗な船橋を
かけ渡すことが出來ませう。

世の人たちが悉く
手を握り合ふその時は
地球をめぐつて輪踊りを
踊る事さへ出來ませう。

夜明の歌

ポオル・フオル

――わたしのなやみは何處へ行つたか？
わたしにはもうなやみがない
わたしの戀人は何處へ行つたか？
わたしはもうかまはない。

清冷（せいれい）なあかつきの
爽快な夜明の時に
砂濱に立つて見る
おお　遠く果（はて）なき海！

――わたしのなやみは何處へ行つたか?
わたしにはもうなやみがない
わたしの戀人は何處へ行つたか?
わたしはもうかまはない。

海風よ
お前の波はリボンのやうだ
リボンのやうなお前の波が
白い私の指の間を流れる。

――わたしの戀人は何處へ行つたか?
わたしにはもうなやみがない
わたしのなやみは何處へ行つたか?
わたしはもうかまはない。

眞珠の色の大空に
露に光つてとぶ
灰色のかもめを
わたしの目は追ひかける。

——わたしの戀人は何處へ行つたか？
わたしにはもうなやみがない
わたしのなやみは何處へ行つたか？
わたしはもうかまはない。

清冷なあかつきの
遠く果なき海！
太陽の岸邊を打つ
波のささやき計り。

——わたしのなやみは何處へ行つたか？
わたしにはもうなやみがない
太陽の岸邊を打つ
波のささやき計り。

人の一生

ポオル・フォル

鐘が鳴る
「生まれ出たのは秣槽の中の
基督のやうなお子さま……」

激しく鐘が鳴る
「あはれうれしや
今日(けふ)よりのわが夫(つま)……」

ややありて
また鐘が鳴る
あはれ今度(こたび)は死の鐘。

巴里橋づくし　ポオル・フオル

巴里のきれいな橋の上
河岸や橋　手摺や欄干
きれいな巴里の橋の上
河岸の上　橋の上
身投げなんぞは止し給へ。

百合の花のやうに眞白な小蒸氣が
人魚のやうな聲を出して笑ふ
はかない幽靈よ　昔わが
フランソワが歌つた女王さまはこのことか？

巴里のきれいな橋の上
河岸や橋　般若の面やおかめの面
きれいな巴里の橋の上
河岸の上　橋の上
狂ほしい心に面をきせ給へ。

新橋の上のアンリイ四世よ
君は欠伸をしてゐるのか？
友よ　わたしと一緒に來い
笑老人河岸の古本屋で
春宮册子をひやかさう。

巴里のきれいな橋の上
河岸や橋　水の流れ　空氣の流れ
きれいな巴里の橋の上

橋の上　河岸の上
狂ほしい心は流し給へ。

小僧や手代
坊主（ぼうず）や腰辨
われもわれもと集まり眺める
釣する人の竿の先
浮子（うき）や針やの浮き沈み。

巴里のきれいな橋の上
河岸や橋　鮨や鯖……
きれいな巴里の橋の上
河岸の上　橋の上
狂ほしい心を釣りませう。

水の上に唾(つばき)を吐く事は面白いことか？
いいや　あんまり面白いことでもないよ
われ等の貧苦を忘れるには
せめて往き來の船の上に
唾をする位の手數はかかる。

巴里のきれいな橋の上
河岸や橋　兵隊さんが水鏡(みづかがみ)
きれいな巴里の橋の上
河岸の上　橋の上
狂ほしい心に水鏡をさせ給へ。

巴里は多數(たくさん)な指環を
水の指にはめてやるのだが
流れる水はまた歸つて來ようか？

偕老同穴は有難迷惑……
風が帽子を吹きとばす？

巴里のきれいな橋の上
橋や河岸　雨傘日傘
きれいな巴里の橋の上
橋の上　河岸の上
狂ほしい心をいたはり給へ。

ノオトル・ダアムは感極(かんきはま)つて
夕(ゆふべ)の鐘を打ち鳴らす
然しそれよりなほ強く
わたしの心は鳴りひびく
両替橋は花ざかり。

巴里のきれいな橋の上
河岸や橋　五月の花　心變りのしやすい花
きれいな巴里の橋の上
河岸の上　橋の上
狂ほしいわたしの心よ咲き給へ。

空の色さへ陽氣です
時は樂しい五月です

ポオル・フォル

海は生垣の上に光ります
海は貝殻のやうに光ります
沖へ出て釣をたれたら樂しかろ
空の色さへ陽氣です
時は樂しい五月です。

生垣の上に光つて見える
海はやさしいやはらかい

まるで嬰兒の手のやうだ
撫でたら氣持がよいだらう
空の色さへ陽氣です
時は樂しい五月です。

微風が素早い手でもつて
海と垣根を縫ひつける
針を動かす光らせる
空の色さへ陽氣です
時は樂しい五月です。

生垣のみどりの上にあを海が
蝶蝶のやうにひるがへる
小舟のむれが動き出す。

空の色さへ陽氣です
時は樂しい五月です。

生垣は海の深みのやうに碧い
金色の天道蟲がゐるけれど
鯨の形はなほわるい
空の色さへ陽氣です
時は樂しい五月です。

頰邊を涙がやさしく流れるやうに
海は流れる涙です
垣根の上を港へと
然し今　誰あつて
泣かうなどとは思はない。

――「一人の子供が港へ落ちた！」
――「海へはまつて死んだとはさて美しい死に方だ。」
然し今誰あつて
泣かうなどとは思はない
空の色さへ陽氣です
時は樂しい五月です。

エプリンのわれ等が茅屋　ポオル・フォル

茅屋よ　マアガレットとばらの花が
お前の装飾だ。

白いマアガレットはお前の足もとに
桃色の薔薇の花はお前の上に咲く

茅屋よ
自然は何かの役に立つ

自然は花束のなかに
われ等二人の心臓をやどらせる。
茅屋よ　お前は
幸福のつづく限りはつづく。

哀歌（第一）　フランシス・ジヤム

サマンに送る哀歌

親しき友よ
僕はまたしても君にこの手紙を書く
死人に手紙を書くのは僕にもこれが初めてだ
明日の朝久遠の村の老僕がこの手紙を
極樂にゐる君に屆けるだらう
友よ　笑つてくれ　僕を泣かせぬ爲めに
友よ　云つてくれ
「僕は君が案じるほど病氣ではない」と
友よ　來て僕の家の戸口を開けてくれ
敷居をまたぎながら僕に尋ねるがよい

「なぜ君は喪服を着てゐるのか」と
また訪ねて來てくれ
君は今でもオルテスにゐるのだ
幸福はここにあるのだ
その椅子の上に帽子を置くがよい
のどが渇かぬか？
此處に井戸水と葡萄酒があるよ
僕の老母が二階から降りてきて
『サマン……』と云ふだらう
さうして僕の犬は君の手に頭をすりつける

僕は話す　君は眞面目な微笑をもらす
時間は存在せぬのだ
君は僕の語るにまかせる
夕暮が來る

薄明を秋のやうに見せる
黄色い光の中を僕等は散歩する
僕等は谿流に沿つて歩む
嗄聲の鳩が濃緑のポプラの木で啜り泣く
僕はしきりに喋べる
君はまた微笑する
幸福は沈黙する
夏の終りの暗い小徑から
僕は貧しい鋪石道に入る
青い煙りを吐く暗い戸口を飾る
夕顔の花のそばに影が跪づいてゐる

君の死は何にも變へなかつた
君が愛した陰
君が其處に生き　苦しみ　默つた陰は

僕等を去つたけれども
君を去りはしなかつた
君の光明は
美しい夏の夕べ
われ等の前を過ぎ
麥を育てなさる神さまを感じて
僕等が跪づくこの暗闇の中から生れたのだ
黑い晝顏の影で番人の犬が吠える

僕は君の死は惜しまぬ
人人は君の額の皺に相當な
月桂冠を置くだらう
君をよく知つてゐる僕には
その冠は君を傷つけるやうに思はれる
君の歌琴の上に泣きながら

君の柩車に從つて行く
青年たちにかくしてはならぬのだ
月桂冠を戴かずに死に行く人人の光榮を
僕は君の死は惜しまぬ
君の「生命（いのち）」は今でもそこにあるのだ
リラの花をゆする風の聲が死なぬやうに
さうして數年の後になつて
凋れたと信じてゐた同じリラの花の中へ
また歸つて來るやうに
親しきサマンよ　君の詩もやうやく
僕等の思想に熟しかけて來た
青年たちの心を搖りに歸つて來るだらう
貪物心のないかの群羊が小山の上で歎いてゐるのを見て泣く
古風な一人の牧人のやうに

僕は君の墓の上に立つて
空しくそこに供ふ可きものを尋ねるであらう
食鹽を供へたら小羊が來てなめてしまふであらう
酒を供へたら君の剽竊者が飲んでしまふであらう
僕は君を思ふ
田舍風な僕の家の客室に君を見た日のやうに
今日もまた暮れて行く
僕は君を思ふ
僕は故山を思ふ
僕は君が僕を連れて歩いてくれた
ヴエルサイユを思ふ
其處で僕等は歩きながら
心さびしく詩句を口ずさんだ
僕は君の友人を思ふ
僕は君の母を思ふ

僕は青い湖のふちで
首につるした鈴を鳴らせながら
死ぬ日を待ちながら
草を食べてゐた群羊を思ふ
僕は君を思ふ
僕は天國のひろさを思ふ
僕は果のない水を
火の明るさを思ふ
僕は葡萄棚に光る露を思ふ
僕は君を思ふ
僕は僕を思ふ
僕は神を思ふ。

私に彼等が言うた　フランシス・ジャム

わたしに彼等が云ふた
『極端に生活を歌へ』と
……彼等は風琴ひきのことを云ふのか？
それとも胡桃のことなのか？
また雷雨の中に耙鋤しながら立つ
白い牡牛のことか？
または木の葉の茂みで歌ふ
不如歸のさびしさのことか？

「あはれむ勿れ！　あはれむ勿れ！」と彼等は云ふ
……子供に傷つけられた一匹の蝴蝶を
わたしは古外套に包んで連れて來て
廣い庭に放してやつた
彼等の學說には更におかまひなしに

わたしは心のままにしてゐる
わたしが何故さうするかは考へたくない
わたしは流れに落ちた薄荷草の小枝のやうに
單にわたしのゆくにまかせる
或る友人にわたしは尋ねてみた
「ニイチェと云ふのは誰であるか？」と

友はわたしに答へて云つた
　それは超人の哲學である』と。
――それをきいてわたしは早速に考へたものだ
水の岸邊に咲き匂ふ楡の花を
楡の木の影は水の上で靜かに踊りただよふ。

わたしに彼等が云ふた
　君はこれ以上に客觀し得るか　と。
わたしは答へて云つた
　出來るかも知れぬ…　出來ぬかも知れぬ　と。
彼等はわたしの無智を見て考へるらしかつた
わたしは彼等の學問のあるのを見て吃驚してゐた。

驢馬と連れ立つて天國へ行く爲めの祈り

フランシス・ジヤム

おお神さま
わたしがあなたの處へ參ります日には
村村がお祭で　埃の立つ日にして下さい
晝間でも星の出てゐる天國へ參りますに
この世で何時もわたしがしたやうに
氣の向いた道から行くやうにしたいものです
わたしは杖を持つて廣い道から參りませう
そしてわたしの友の驢馬たちに云ひませう
「おれはフランシス・ジヤムだ
これから天國へ行く處だ

神の御國には地獄がない』と　また
『青天井の下のやさしい友だちよ
可哀いあはれな動物よ
耳を素早く動かして
蠅を追ひ　虻を追ひ　蜂を追つてゐる君たちよ
わたしと一緒に來るがよい』と

どうかわたしがこれ等の獸にとりまかれて
あなたの前に現れるやうにして下さい
わたしは驢馬を愛するのです　何故と云ふに
彼等は靜かに頭を下げ
人の慈愛にすがるやうにおとなしく
小さな兩足を組み合せるからです
數千の驢馬の耳を從へてわたしは參りませう
兩腹に花籠を積んだのや

または綿やバケツを乗せて車を引いたのや
旅藝人の荷車を挽いたのや
でこぼこの空罐を積だのや
革嚢のやうに腹がふくれて行き惱む孕驢馬や
青光のする傷の周圍にうるさく蝿がたかるので
それを防ぐ爲めに小さな猿股をはかせたのや
どうか天使たちが安全にわたしたちの一行を
少女のにこやかな肉體のやうな
なめらかな櫻桃がゆれてゐる
茂つた小川の岸へ導くやうにして下さい
そしてこの魂の安息所にうなだれて
あなたの神神しい水の上に
彼等の心まづしさと貧乏さを
無窮の愛に映した時の驢馬のやうに
わたしもなり得るやうにして下さい

兒の死なぬ爲めの祈り

フランシス・ジャム

神さま　親たちの爲めにこの子供をお助け下され
風の中の草をお助けなされるやうに
母親が泣いて居りますれば　神さま
後ほど　まぬかれ得ぬ事のやうに
何もこの子供をお殺しにならずともよろしいではございませんか
若もあなた様が　この子供を生かせてお置になれば
來年の春のお祭には　この子は花を撒きに參るでございませう

あなた様はあまりに御親切でございます　神さま
この子供の薔薇いろの頬の上に
蒼ざめた死を置くのはあなた様ではございません
それともあなた様は　窓のふちに　母親たちの側に
子供たちをお置になるよい場所をお持ちにならぬのでございますか
それなら此處にお置になつたらよいではございませぬか
ああ！　鐘が鳴り出す　神さま思ひ出しなされ
死んで行くこの子供の前で　あなた様はお母さまの側で
何時も生きておいでなされることを

その頃

フランシス・ジャム

その頃わたしは氣輕だつた
村のお寺は靜かに日に照されてゐた
葡萄棚の下に薔薇の花の咲いてる庭
家鴨と白鳥と立話をしてゐる田舍道
食鹽のやうに眞白な綺麗な白鳥だつた

聖女(サント)シュザンヌと云ふのがこの小さな村の名
お祖母(ばあ)さまの名のやうにやさしい名
居酒屋は酒杯(コップ)と煙で一ぱい
お神さん達(たち)もこの村ではあまり鐵棒(かなぼう)を曳かぬ

村には青葉のかぶさつた
日の照る時にも薄暗く
何處まで行つても果しのない一本の道がある
この道の上で　靜かな日曜日の午後には
村の人達は今でも接吻を交すことであらう
かたい接吻や　やはらかい接吻や　長い接吻や

わたしはこんな風に色色なことを思ひ出す
さうすると惚れた女と別れたことの悲さが胸に湧き上る
その頃のわたしには五月が今とは別なものに見えた
その善さ　わたしの心は休なく戀する爲めに出來てゐるんだもの

壁の裾に當る白いお日さまの光のやうに
生一本な戀をするためにわたしは生れて來たやうな氣がする

それなのにわたしは今この胸の中に
もぢやもぢやに亂れた髮のやうな情ない戀を持つてゐるのだ

綺麗なお日さまと優しい小さな村の名と
食鹽のやうに眞白な美しい白鳥と
昔のわたしの戀の思ひ出にからみつく
聖女(サント)シュザンヌのあの薄暗い長い道の兩側に竝んで……

雪のふる頃　フランシス・ジャム

近いうちにまた雪がふるであらう
わたしはまた去年のことを思ひ出す
わたしは煖爐の前であの愁さを思ひ出す
あのとき誰かがわたしに「どうしたのか」と訊ねたなら
わたしは答へたであらう
「ほつて置いてくれ　それは何でもないことだ」と

去年　戸外には重たい雪がふつてゐた時に
わたしは室の中へひつこんでよく考へた
何の事となしにわたしは考へてみた

今もその時のやうに
わたしは琥珀の吸口の附いた木のパイプをくはへてゐる

わたしの古びた樫の木の簞笥は相變らずいい匂ひがする
わたしは愚だつたのだ　何故かと云ふに
これ等のものは變へることの出來ぬものなのだから
それに自分で知つてゐることを
變へようとするのは生意氣なことなのだから

何故わたしたちは考へたり喋つたりするのだらう
をかしなことだ
わたしたちの涙や接吻は決して喋りはせぬのだ
然もわたしたちにはよくその心持が分る
さうして戀人の足音はやさしい言葉より餘計にうれしい

人は無鐵砲に星に名前をつけてしまつた
星には名前なぞはいらぬと氣がつかずに
さうして彗星(はうきぼし)は何時(いつ)の何日(いつか)に闇の中に
現はれると云ふ數字の爲めに
何も出かけて來るのではないのです

現在　去年のわたしのかなしみは何處へ行つたのか？
やうやうに私(わたし)には今　それを思ひ出し得る計りなのだ
誰かがわたしの部屋へ來て「どうしたのか」とたづねたら
わたしは云ふでせう
「ほつて置いておくれ　何でもないことだ」と

水上奏樂

アルベエル・サマン

樂の響に聞入れよ
遠き狹霧のうちより起る
有耶無耶の樂の音の消えも入りなん氣色ほど
やさしきものの世にありや

夜は憂ひに醉痴れて
われ等が心を味氣なき
世の努力よりのがれしめ
人をして思慕に堪へざらしむ

空と水との間をば
高き月下に棹ささん
浮世を餘所にわが心
汝が瞳のうちに忍びたり

樂の響に聞き惚れて
消えんとやする汝が眼をば
妙なる日かげの下に咲く
曼珠の花とわれは見る

樂の響に聞き入れよ
微けき樂の音のうちに
倚合ふ胥のわななき許り
うれしきものの世にありや……

相伴

アルベエル・サマン

銀いろのはこ柳　菩提樹や樺や……
月は水の面に木の葉の如く散りかかる……

夕風に吹かるる髪に似て
夏の夜のものの香は黒き湖を匂はしむ
香はしき湖は鏡の如く輝き出づ

櫂は浮きつ　沈みつ
夢幻の境をわが舟は滑り行くなり

わが櫂はみそらを滑る
形なき湖の上……

わがやる二本の櫂の
右なるは「もの憂さ」　左は「沈黙」

眼とぢ拍子とりつつ
おお　わが心よ　櫂をやれかし
穏かに　しめやかに　寛ろかに水を打ちつつ

彼方　月は小山の上に眠つきて
水の上ゆくわが舟の靜けさに聽入りつ……
清しく折りて来し大百合の花三つわが脱ぎすてし
上衣の上にて凋落れゆくなり

おお　色蒼ざめし樂欲(ぎようよく)の夜よ　汝が脣の方へ
忍び倚るは百合の精なるか　はたわが魂なるか？
銀(しろがね)の夜の黑髮は長き蘆の葉と垂れかかる……

水の面の月のごと
波間を滑る櫂のごと
わが心嗚咽となりて散りかかる

涙　アルベエル・サマン

花にもやどる露の涙
岩間のこけには
清水の涙

あまねく置くは秋の涙
なやみの森の奥にひびく
狩の角笛涙をながす

教法寺院の
鐘のなみだ……
祈りを上ぐる鐘樓の聲

夢みる如き庭の奥の
噴上(ふきあげ)にさく水の花の
白がねいろの歌の涙

星かげ多き夜の涙
ねむれる如き園の空に
しのびねに泣く笛の涙

まつげにやどる眞珠の涙
思ふ男の心をぬらす
戀の少女のあまき涙

夢のしづく　あまき涙
夜より落つれ！
花より落つれ！

目より流れよ！
甘きなみだ！
夢のしづく！　あまき涙！

夕暮（その二）

アルベエル・サマン

人なき岸に諸舟はいとも靜けく眠り行く
激しき今日の勞働も今し漸く果てにけり
黃金溶かして流したる夕燒うつる川面を
色靑ざめし薄明かよわき手もて消して行く

わめき轟りし工場も今悉く靜まりて
疲れ果てたる女工等は風に髮をば亂しつつ
黃金輝く店窓へいとにこやかに急ぎ行く
空なる願を大粒の金剛石に忘れんと

往き來の人波打ち寄せて暮れんとやする街の上
土耳古玉眞珠に似たるやさしさに
この秋の夕の空は絕入らん氣色なり

いま時は薄紗まとひし女の如く過ぎゆき
わが魂はもの影に佇みて
夢より新生の星へと通ふものの姿を冥想す

夕暮（その二）　アルベエル・サマン

夕暮の天使は花の間を過ぎ……
幻想の女神は御寺の風琴に合せて歌ふ
まばゆき夕映のみなぎれる空に
燦たる光彩の斷末魔はひろごる

夕暮の天使は胸の間を過ぎ……
少女等は露臺に微風の愛を吸ふ
花の上にも躊躇ふ少女の上にも
可憐なる夕もやは雪とふるかな

全園の薔薇もの憂げに首だれ
シュウマンの魂は木の間をさまようて
遣えがたき苦惱を訴ふるに似たり

何處にてか優しき少女の死すべき夕なり……

わが魂よ　祈の書に乘せよ
泣きてする汝が祈願を天使は聞入れ給はん

夕暮（その三）　アルベエル・サマン

空は青ざめし黄金色の湖に似て絶え入らんとし
遠く望めば廣野ももの思ふ風情なり
靜けさと空しさの漲れる空に
夜のさびしき魂はひろごる
彼方此方に燈火のほの見ゆる頃
繋がれたる二頭の牡牛は小徑より歸る
頭巾頂ける老翁は兩手に頤を支へつつ
茅屋の戸口に靜けき夕暮を息ふ

鐘の音の遠く聞ゆる孤村はもの寂しく
跳ね廻る白き小羊牽きて行く基督を描きし
古拙なる畫面にも似て素朴なり

星くづは晴き空に　降る雪に似て輝き初め
彼方小山の頂きに動かず立てる
牧人の古風なる影は夢みるに似たり

クレオパトラ

アルベエル・サマン

一

言葉なく望樓の欄干に肱つきて
綠髮に紫絹の小紐絡ひしわが女王
立ち昇る香爐の氤氳に醉ひ痴れて
無量なる戀情の海の如その胸に寄せ來るに心づく

堆き小蒲團の數の上　氣も遠く身動きもせで
菫色の眼瞼の影にかの女いま夢む
呼吸に連れてそが乳房の上に搖るる重き黃金の頸環は
かの女が暗愁と言ひ難き燃ゆる思ひを語らずや。

薔薇色の夕陽は立ち竝ぶ官房を照して
もの影に包まれし黄昏は幻に溢れたり
かかる時彼方遙に鰐魚の泣く聲聞ゆ

迫る思ひに啜り泣きつつ指の頭顫ひ戦くわが女王
吹く風のやはらかき手の
嬲りつつわが髪に觸るるを覺え身振す

二

夜は重く暗きナイルの岸邊を閉し……
輝ける星くづの下跪坐せるわがクレオパトラは
急に色蒼ざめて宮女等を遠ざけつ
さてすさまじき身振して衣をば引裂きぬ

望樓の頂に狂ほしく立ち上りたる
そが無垢の肉體は熟したる果實に似て戀情に脹れたり
碧空の下に屹立ちて裸體なるかの女いま戰きたり！
微溫きそよ風に蛇の如その身をば搖り動かして

自の褐色の眼の輝に照されて
かの女は今宵世をなべてわが肉の香に匂はしめんと希ふなり
ああ　夜の空氣のうちに散亂れるほの暗き女性の花よ！

唯だ見る萬古倦怠の砂の上に不動なるスフインクス
そが無言沈默の磐根も情火通ずと感ずらん
果しなき大沙漠そが下に身じろぎぬ

水邊悲歌

ルネ・ヂオルヂセン

われまたしても岸邊にかへり
うつむきて水の面に
君を搜ね求むるかな。

いと永くわれ水をうかがひ究め
水の生命の祕密をあばかんと希ひ
怖る怖る水に私語す

されど忽に
わが今爲してあることの
空しき迷なるに思ひ到る時

水の憂ひはわが瞳にのぼり來り
われは獨語ち言ふ
『われただ一人ここにゐて　君おはさねば
今この景色歌ふともはた何かせん
わが水を愛する心の
わが前額に輝き出づるを
君の見んことかなはざれば』と。
かくてわが歡びと希ひとは凡てくだかれ
われは感ず　川のわが心よりのがれ出でて
去つて遠き方へ流るるを。

わが心水の魂を捕へ得たりと感じ
またこの風景の意を現ずべき
言葉の連音と昔の調子と
しとやかなる曲節と幻影と

それらのものが内に生ずるをわが感ずる時の
見開きたるわが眼を
歓喜に色づき行くわが眼を見るべく
君今もしわが側におはしなば
君は忽にしてわが瞳の輝きによりて
わが水を愛する心の如何ばかり
深きかを知り給はん。
また君は水と土との魂の復の如く
君が方へ行くを感じ給はん。
さるを今君ここにおはさず
われは今空しくも
遠き君が心に語を寄するのみ
われにはや詩つくる力あらず。
われわが爲めに口すさむともわれ
君の聞き給はぬ詩を如何で得つくらん。

水に似て澄明に
また搖るるが如き曲節の中に
言葉滑り行くなる
感激多き詩を
眼ざしやさしくほのかなる
この小山の下に
工もなくうたひ出でたる水の詩を
なつかしき川の岸邊に立ちて
君に歌ひ聞かすことああ遂にかなはざるか。

わがそこに詩の思ひを錬りたると
同じき景物を幻に見て
君その詩を讀み給はんと
われはよく知れど
かくばかりわれより遠くへだたりて

しかもまた無力なる紙の上に
凍りつきたるを讀み給ひたるにては
詩は死にたるに等しきなり。
やさしくてまたはばかるなき聲の
親しみ多き響を詩は持つことかなはねば
爲めにそは力強き抑揚ある感じを有せざらん
そを作りしもののみが緘默の中に
緩急するを得るかの親しみ多く
また豊富なる調和の命を有せざらん。
君若し此處に來りて
わがそを口すさぶを聞き給はんには
わがこの心は君が爲めに
琅璫と鳴り出でて　またわが思ひは
わが聲をやさしく且つは莊重にし
いや果にうはごとの如くにかきみだされん。

かくて壯んなる興奮によりて
贏ち得たるわが詩は
一きはの彈力と勢ひとを有せんものを
さるを　ああ　水はこやみなく流れ
われは此處におはさぬ君を思ひて
わななくのみ。
さざ波多く流れ去りぬ
君と偕に眺め得ぬ間に……

圓き月　シャルル・ゲエラン

圓き月
樺の梢にのぼり
夢をもて水邊の
孤村をつつむ。

青白き月の光の中に
鳴り軋る釣瓶井戸の側に立ちて
誰なる人影の揺動かす
きらめく水桶時時に響く。

橡の木立の下にて
犁は夕闇の底にきらめき
そよ吹く風に連れて
われは物置の中なる柴草の匂ひをきく。

水飲場より歸る牡牛の群は
軛除かれしうれしさに
ほの暗き牛部屋の中に
やさしき唸の聲もて滿す。

人ありて閉す雨戸は
夜の促織蟲の如くに歌ひ
今や流るる水許りそが響の靜さを
銀いろに輝かす。

かかる時われは見る
少女一人　とある戸口に現はるるを。
かの女はそが瞳と月との間にて
手にせる針に絲をば通す。

心　シャルル・ゲエラン

憂ひがちなこの心　この秋の心
誰かこの心を愛する人はないか
美しい少女よ　お前の接吻の一つと代へて
お前にこの心を上げよう。

お前は今なすこともなく退屈してゐる
さあおあそび
昔お前が人形で遊んだやうに
この心をむしりこはしながら。

この心をひきさくのは
薔薇の花をひきさくよりも易い
その上でお前はまた他のものの方へ行けばよい
さうして私は涙の方へ行けばよい。

形と影

シャルル・ゲエラン

形に影は常に添ふ
聲に答ふるこだまあり。

夕ぐれ時の池水は
星の爲めなる水鏡。

貧しき人を助くるは
やさしき人のやさ心

清くさびしき笛の音は
壁にあたりてこだまする。

歌ふ小鳥は小鳥をば
夢にさそひて歌はしめ

蘆の一と葉は蘆の葉に
さそはれてこそ啜り泣け……

さはさりながら底知れぬ
われの心のかなしみの

さけびに答ふるひと心
何日の日われの行きあはん？

詩家の嘆き　シャルル・ゲエラン

ああ！　詩人としての私の不斷の努力も
矜もすべて空しいのだ！
自らの進行にばかり心をうばはれてゐる今の時代は
私の生れた事さへまだ知らずにゐる。

それにまた私の心も
鏡の中に微笑む少女の上にひかれるのだ
かの女の脣の花は光榮の月の桂の
黒ずんだ葉よりも美しい。

燕麦の若芽のしなやかさも
裸体のかの女には及ばない
さうして形のいい美しいかの女の首は
私の世に容れられないかなしみを慰める。

田舍

フイリツプ・シヤヴアネエ

居酒屋の黄色い鎧戸は
掘割のみどりの水の前
堤の上には涙のやうな露の玉
朝の空氣の中にひびくわれ等の聲。

早くも汽車は煙となつて
森の奥にはほととぎす
かぐはしい藤棚の下で
愛人よ、笑ひかつ飲め。

ああ　田舎でくらす今日の一日
私の脣はお前の裸の腕にふれる……
われ等と同行して來た幸福は
やがて行つてしまふだらう
來た時のやうにして。

小曲

フイリツプ・シヤヴアネエ

目を開くと
私には景色が見える
目を閉すと
私にはお前の顔が見える。

ロマノフ大佐

ルネ・シャリュ

夕ぐれが來る　執拗な北風が
樵の木を裸にする
ツアラスコイセロの冬宮に
噴上の聲が默して。

ものものしい夕日が
長くする自分の影を追ひながら
幻の宮殿をさまよふ
蒼ざめた一大佐。

私は苦しむ

ルヴェル・レニエ

私は苦しむ!　私は苦しむ!
ありとあらゆる大きな苦しみを私は苦しむ!
惱める大地の凡ての苦しみを私は苦しむ
地と人間の凡ての苦しみを私は苦しむ
しづめがたい苦しみを私は苦しむ
私は苦しむ!

私は凡ての苦しむ肉體の上にうつ向きたい
私は凡ての病人たちの前額に接吻したい
私は疲れたまぶたを閉してやりたい
長い接吻でそつと閉してやりたい

ああ愛撫でまぶたを閉してやりたい
さうして彼等瀕死の人たち
彼等断末魔を苦しむ人たちの心に
やさしさをそそいでやり度い
これ等哀れな人たちが永久に幸福に入ると感ずるやうに！

ありとあらゆる苦しみを私は苦しむ。

もろもろの母たち　子供たち　やもめたち　許婚女たち
私は彼等を抱きしめて私の心を告げたい
死にかけてゐる幼児をゆするやうに注意深く
私は彼等をゆすつてやりたい
やさしくゆすつてやりたい
さうして彼等の頭がねむり

さうして彼等の心がやすまるやうな
やさしい歌をうたつてやりたい

其處に無數の人が死んで行く病院の床よ
君等を私は幻に見る
其處に多勢の人が泣き悲しんでゐる喪の家よ
君等を私は幻に見る
大地の悲哀よ　人間の苦痛よ
君等は私の中に來る！

この夕　私は病院から歸つて來たやうな氣がする
繃帶のにほひ
傷口のにほひ
クロロホルムのにほひ　またあらゆる藥品の匂ひが
私につきまつはる！

この夕　私は病院から歸つて來たやうな氣がする
私の耳は苦痛のうめきで一ぱいだ
私の目は何處にその注視を置いてよいかを知らぬ
私の目　ああそれを閉ぢる　私の目
これらの瘢痕と　さうしてもはや誰も接吻せぬであらう
これらの顏を見ぬために！

地上にありとあらゆる苦痛を私は苦しむ
癒めがたい苦痛を私は苦しむ
大地と人間との苦痛を私は苦しむ
私は苦しむ！

私は凡ての苦しむ肉體の上にうつ向きたい
私は凡ての病人たちの前額に接吻したい
私は疲れたまぶたを閉してやりたい

長い接吻で静かに閉してやりたい
注意深く　私の脣がわづかに愛撫のやうに
ふれるやうにして閉してやりたい

すべての苦しむ男たちの爲めに
すべての苦しむ女たちの爲めに
笑ふ事を知らぬ子供たちの爲めに
また死んで行く老人たちの爲めに
これ等さびしい人人　病氣の人人　瀕死の人人が悉く
——何處とも知らぬ方から——
彼等をなぐさめる幸福が來ると信じるやうな
愛情と愛撫とを與へてやりたい
私は一人一人に
やさしい言葉をかけてやりたい
私は一人一人に

やさしい微笑を與へてやりたい
私は苦しむ人人の爲めに
人心の絶頂を感じさせてやりたい
私は皆の爲めに　さうして一人一人の爲めに
目つきの親切さ
手のやさしさを與へたい
私は彼等をやさしく抱きしめて
やさしくゆすぶつてやりたい
親切に注意ぶかく
さうして彼等の頭がねむるやうな
さうして彼等の心がやすまるやうな
さうして彼等の痛める魂が幸福になるやうな
やさしい歌をうたひながら！

旅人とその影

ピエル・ルヴェルヂイ

あまり暑かつたので彼は道道一枚づつ着物を脱いで進んだ。彼は路傍の草木にそれをひつかけて通つた。さうして彼が裸體になつた時　市が近づいた。すると果のない大きな羞恥心が彼の心を占領して彼は市へ入り兼ねた。彼は裸體だつたのだ　どうしたら人目を引かずにすむだらう？

彼は市の城壁の外側を廻つて　反對の側にある門から入つて行つた。彼は彼の影につづいて進んだ　彼の影が先に立つて彼をかくしてくれた。

碑銘

シャルル・アドルフ・カンタキユゼエン

来た時よりはよくなつて私は帰る
裸で生れて来たのだがいま着物きて死んで行く

人の一生

シャルル・アドルフ・カンタキュゼエン

日日や
ああつねに
短かかる
人の戀！

ばらいろに
はた灰いろに
あらはるる
ものみなや！

ためいきや！
そよ風や
かなしみや！

やかて
夜！
なべてのをはり！

熱の枕　ガブリエル・ムウレイ

熱の枕の冷たいところ　ジュウル・ラフォルグ

今しがた看護の人が枕かけを代べてくれた枕が
何と私の頬に前額(ひたひ)に
やさしくやはらかくさわやかにふれること！

私は思ひ出す　砂濱の濡れた砂に
私の顔を
おしつけてゐた日のことを……
するとその日のやうに

空氣に鹽と海草の味があり
さうして私には碧い海が見えて來る
海は彼處に泡沫のダンテルの花を咲かせながら
青空に愛撫されて微笑してゐる……
然し　またしてもやがて
薄い布の枕かけが熱して來る
すこしづつだんだんと。
別の思ひ出が私のうちにさまよひ
私のうちに食ひ入る。
私はその頃私の愛してゐた女のことを思ひ出す
私はかの女の肩の上に　腕の上に　胸の上に
ねむつた夜のことを思ひ出す……
さうして何とも云へぬ幸福を私は感ずる！

私にはこの時　苦痛も死も怖くはない
さうして私は平靜にしづしづと眠りに落ちる
私の熱のある脣に
かの女の脣の匂ひを感じながら
私の頰とまぶたの上にしなやかな褐いろの
かの女の美しいかみの毛の影を感じながら。

夜曲

アドルフ・レッテ

愛人よ　月は靜かにさえて
夜は川の女神の脊に擁はれとなつて
葦の間に眠つてゐる。
さうして今小鳥の羽音さへもきこえない

ごらん　岸に沿うて
夢みる水のわななくのを
さわやかな星の金いろか
きらめく下で
黒い樅の木立がためいきする
流れの水のささやきと

さざ波の密語とが
樫の木の下で
月に向つて歎く——

歌ふ水のやさしい聲をおきき
おいで　私は苺の谷のありかを知つてゐる
私はお前の爲めに
まよならの葉で小紐を編んでやらう
お前はふりかへり　お前はためらふ
たでの花の白いかたまりに
心ひかれると云ふのか？
私はお前の帯をとく
さうしてお前のわななきを掬ふ

好色な水が遠くて銀色に光る
夢みる水　歌ふ水
葦のかげ間にかくれる水。

病の日　ガブリエル・ムウレイ

昔あのやうに　悦びに滿ちてゐた哀れな私の目よ
萬物のやさしさと　萬物の美しさと
光と色との中で
今お前に殘つてゐるのは闇ばつかりだ

おお　哀れな私の耳よ　昔あのやうに
自然と人生の響をききとるに
凡ての響をききとるにあのやうに
鋭どくさとしかつたお前の爲めに
ああ　今凡ての響はきえて
お前は私の嘆きの聲より外の何物をもきかぬのだ

おお哀れな私の脣　昔あのやうに
狂ほしくあく事知らず
熟した肉體と接吻と果物とに
かみついた私の脣
ああ今　お前の爲めには
苦い氣味わるい血膿と腐敗物との匂ひがのこる許りだ
おお　哀れな私自身よ　かつて私があつた凡てのものに
も一度私がなる日があるであらうか？
おお　死　お前が若しも私を見のかすとしても
も一度昔のやうに立ち上り　力にみちた私の手で
人生を抱きしめる程の氣力が私にあるであらうか？

女性

ルキ・マンダン

誰が私のやうに病的な　さうして靜寂な
さうして落着いた　さうして純粹な
お前の美しさを敬ぶであらう？
調和の季節　さうして青ざめた空色と
暢明な淡紅色の季節よ！

傷いた顔と甘饒な果實と
衛術の收穫とやさしさと　離別と
また私たちの目を樂しませながら
かなしげに抱合つて去り行く複雜な季節よ！

靜かにして可憐なる戀愛の季節　喪の季節
若い人妻のやうな風情に死んで行く
美しいブロンドの秋よ　お前を愛し得ぬ人は
女性を解し得ぬであらう

抒情發生

ルキ・マンダン

風に誘はれた木の葉が落ちて來る
夕暮を歩む人や子供が木の葉を踏んで行く
靴底の釘が木の葉を踏み破る　彼等の足の下で
彼等自ら知らずにゐるのに

微風にさへも散り　事事に傷く
これ等の木の葉に若も感覺があつたとしたら
木の葉はさびしい莊嚴な酩酊を感じるであらう
何故と云ふに　人が自ら親木から離れ
さうして秋が墓の方へ撒きちらす

孤兒　弱い者　孤獨者であると感じ
自らが自らの爲めの死布であると知り
今日より後　自分は人間に對しても　獸類に對しても虚無であり
何物もこの憐みの世に自分を繋ぐものはなく
自分は今はじめて　自由な風に從つてとびまはる外
何物にも服從しない落葉であり
詩人であると感ずることは
悲痛の中の歡喜であるから
それは自由に顫動きながら飛び廻る風の美しい酩酊だ

音樂と舞踏

ルキ・マンダン

若しも私がお前の笑ひを
私の手のひらの窪にくんで
其處に金(きん)の鈴のやうな
響を出させる事が出來たなら
だまつてそれをききながら
明日(あす)の朝の夜明けまで

あの撫でてもみたいやうな
虚空の花の星どもは
清い大空で
流暢なヴアルスを踊り出し
私を抱きに來るだらう

さうしてだまつて醉ひ痴れながら
果しもないヴアルスの中に
私は道に迷ふことだらう

お前の笑ひを踊らせた爲めに

秋の夕暮の黎明　ルキ・マンダン

これら太陽の離別　これ等太陽の光輝
これらの光輝は聲であり　さうして消え行きながら私に告げる
生命（いのち）がお前の生命（いのち）の花を咲かせる爲めに
闇の中の黒い大きな薔薇（ばら）の花を起しに行くお前の歌
おお　憧憬がちな　さうして蒼ざめたお前の歌
それは正しく夕暮だ
然しそれはまた　熱情ある黎明だ
夕暮は親しげな輝を持つてお前の瞳の中にある
夕暮はお前の瞳の中にある　然し黎明はお前の心の中にある

風景

アンリ・ド・ボルニエ

かなたのほの暗き小山の上に夕暮くだり
松と柳と長き影を地に落す
のぼり行く月影にてらされて
遠方にねむれる村の屋根と鐘樓とほの見ゆる。
渡守靜靜とそが舟の纜ときて
ほど近き岸邊へと曳きて行く。
われ今夢見心地に誘はれて
かの高きみ空を仰げば
われ等が魂を天へと渡す形なき渡守
わが目に見ゆる心地する。

私は一人ぽつち　ジョセフ・リヴイエエル

眞夜中の雲が白く
凋れた夢の
夾竹桃の花に似て
市の空にひろがる

月は屋根の上で
下界のものの呼吸にきき入り
足音が一つ

雪の衣をきた家家の
靜まりかへつた行列の中を
しづかに遠ざかつて行く

星の親しげな目くばせの前に
私は一人ぼつちで私は小さい
くら闇の中で家具が乾われる……

蒼ざめた菊の花が
私のたましひを被ふ
私は一人ぼつちで私は小さい……

雪

フェルヂナン・エロル

雪がふる　雪がふる地の上に
影がふる　影がふる地の上に
落葉(おちば)は何處へ行つたのか？
落葉さへ死んでしまつたのだ
さうして今雪と影がふる

錆びた鐵鎚で惡戲な天使たちが
戸を叩いてゐるやうに思はれる
少しづつ私たちを殺す天使たち
さうして地平線の上にはひくく垂れたさびしい雲……

暗い墓のやうに人家は皆とざされてゐる
さうしてそこらぢゆうに雪と影がふる

雨の薄暮

エプレエム・ミカエル

夕暮が刻刻に深くする秋の霧のやうな
ものの憂へが私の上に下りて來る……
譯もなく私の中に擴がつた重い惱みが
暗いもの憂い夜で私をおびやかす

華やかな戀に傷いたと云ふのでもなく
また過ぎ去つた時を惜しむと云ふのでもなく
私は遠くほのかなものの姿
過去の庭園にさまよふ私の思ひ出を見る

さうして今雨の夕の惱みのうちに
徐徐と深まさりゆく暗やみのうちに
戀に傷いたと云ふでもない私の心が
行衞の知れぬ女の室のやうに憂鬱なのを感ずる

新月

レオン・ヂエルス

時は今　薔薇の花うなだれて
四圍にやさしき接吻を味ふ時刻
おお　暮方の戰慄よ　愛撫よ　幻惑よ！
われ等この黃昏のうちにありて何をか夢むべき？

もの皆はなよやかに煙の如く立ち迷ひ
もの皆はそことなきもの憂さに身を任す
微風の中に漂よふ匂はしき言葉よ！
如何に深き沈默のわれ等を抱きしむるよ？

彼方波の皺ほの白き入江に
海の聲　おお如何に輕げなる！
夕もやの中に泳ぐが如き椰子の木よ！
橘の木陰に立ちてわれ何をか夢む可き？

夜はわれ等を閉し　おお見よ人よ！
われ等が思ひ　かの空に咲き出づるを
おお夕闇にかくれて握られし手よ！
み空なる貴き寶　かの月の如何なる祕密を祕むる？

もの皆は溶けまじらんとあへぎ出で
わがうちに汝がやさしさと情慾とは流れ入る
おお浮世を餘所なる接吻よ！
今宵如何なる圓光のわれ等が前額の上にはかかる？

お月さま　ル・ラッスウル・ド・ロンゼエ

どこから歸つて來たの？
林檎のやうに
まるい顏
疲れたらしい目つきして？

世間で
大した評判の
お前の修身堅固も
あてにはならぬこと

おお　忍び歩きの眞夜中に
つかまへられた
いたづら女

赤いお前のその鼻は
どこの蠟燭で
やいたのか？

螢　ジャンス・カチウル・マンデス

をどれ　螢よ　をどれ
樹間に星を點ぜよ
花間に灯をともせ
石像の眼（まなこ）に瞳をば置け

理想（イデアル）の小さなランプよ
陽氣な樂長よ
やさしい結婚式の林の夜に
鬼女の一群の輪踊（わをどり）を現ぜよ

天國にすむ熱き蟲よ
われ等の前額の周圍にとべ
身輕に輝く君等の飛行で
われ等の身ぶりの周圍にとべ

どうかした拍子に君等か
われ等の頭髪を撫でてとぶ時は
それは宿命がわれ等に許す
新しく且つうれしいよろこびだ

君等が若しもわれ等の手の上に
君等の青白い炎を置いたとすれば
それは愛すべき幸福を
明日われ等が得ることの豫言だ

をどれ　螢よ　をどれ
地上の生命ある星よ
入り亂れた小枝の中で
孤獨な月の光の中で

近きあたりにまた遠き闇の中に
踊れ　光榮と戀愛の夢の現實の
可能性をわれ等に信じさせる
君たちよをどれ

晴渡つた空のやうに美しい
この恍惚にみちた國で踊れ
われ等の爲めに星を捧げる
この匂はしい樂園で踊れ

尼の如くに蒼ざめて

ロオラン・タイラッド

寂しみに心うち曇る
尼の如くに蒼ざめて
月はそがさびしさの
白き思ひをしたたらす

蒼ざめて夢みる月よ
搖るが如き夕の空に百合の如
色青き蛋白石の汝が輝きに
しとやかなる修道女のやさしさあり

おお黄金色の月よ　忘却を降らせかし！
またこの深き夜の中に
悩める心をなぐさめよ

唯一つみ空にかかる百合よ！　はな葵よ！
汝が花心より黄金色の
光の花粉を散らせかし

最後の戀人　ピエエル・ルキス

ピリチス

若人よ！　われと戀せで勿行きそ
夜のわれはなほ艶かし
汝は知るを得ん　わが秋に
他の女の春よりも
はげしき戀のひそめるを

處女等の戀を希はざれ
戀愛の術かたくして
少女等それをよくせねば

われの最後の戀人に
さづけん爲めにこのわれは
全生戀を學び來ぬ

われの最後の戀人の
汝なることをわれは知る
享けよかし　わが脣を
そのかみかつて人多く
やせ細るまであこがれし
わが脣ぞ　享けよかし
わがくろ髮を享けよかし
そのかみかつてサツフォオが
歌につくりて讃へたる
わが黒髮ぞ享けよかし

汝が爲めにわれはまた
過ぎ去りにける若き日の
なほも殘れるなべてをば
集めて汝に參らせん
忘れがたなき來し方の
思ひ出をさへ悉く
汝が爲めにわれ燒きすてん
かつなほわれは汝にやらん
ルカスが箭にうちそへて
ナシヂカがかの寶の帶を

朝の雨

ピエエル・ルキス

ビリチス

夜は明け行き
星とほざかり
あそび女たちは戀人と
連立ちてみな家路につきぬ
かかる時われ唯一人
朝の雨にうち濡れて
砂上にしるす歌あはれ

木の葉は輝く雫ふくみつ
小徑を過ぐる小川の水は
落葉と砂を流してぞ行く
わが地に書ける歌のあひだに
雨の雫は穴をばうがつ

おお！　この地われの愁しく孤獨なる！
若人われをかへり見ず
老いしわれを忘れたり
ああ　さもあらばあれよかし！
然も彼の子等わが歌を
思ひ出でなん時あらん
彼等の子等の子等までも！

今日の榮をうちほこる
ミグタアルもタイイスもグリゲラも
美しきその頰やせくぼまん日
わがごとかくは獨語つことあらじ
『わが亡きあとも戀するものは
わが歌をともに歌はん！』と

俳體小詩　ジユリアン・ボカンス

塹壕

死や穿ちけん
これ等巨大なる畝
さて其處に播かるる種子は人の子

速射砲

クラ　クラ　クラ　クラ　クラ………
速射砲　氣味惡き汝が響！
齒に當て指を數ふる骸骨

負傷

血に滲む前額は天幕の片布の下
戰友彼を荷負て運び行く
あはれ打ちのめされし肉塊よ　母や待つらん

飛行機

汝若し空に煙を認めなば
飛行機を探せ
反對の空に

明日の命

昨日は彈丸耳をかすめぬ
今日は軍帽貫ぬきぬ
さて明日はわが頭

俳諧詩　ルネ・レオプラン

小猫よ

小猫よ　お前はまだ小さすぎる
お前にはまだ分らない
然しそれに食ひつくことは止めたがよい
それはお前の尻尾と云ふものだ

馬鹿だね

馬鹿だね！
みやをみやを云つたとて
戸があくものではないよ！

蝶のまね

蝶のまねをして
羽をひろげても駄目だよ
お前はただのばつただよ

けたたましい

けたたましい叫び聲
見ると婆さんが
墓とさし向ひ

空からおりる

空からおりるもや
水から上るかすみ
その間に鐘つき堂

白い斑點

白い斑點のある黑いくさむら
まだ消えぬ雪か？
またはもう花か？

昨日紅かつた

昨日紅かつた木が
今朝は靑い葉を著てめさめた
脱いだ花びらは足の周りに。

黑い空

黑い空
赤い空
雪がふる

哀れな犬

哀れな白犬よ
雪の競争に敗けて
お前は黄色くなる

私は樂しい

私は樂しい夢を見た
それで今朝私の脣には
かの女の接吻の味がある

幻影　ノワイユ夫人

死んで行く哀れなフオオヌよ
お前の瞳に私をうつし
さうして私の思ひ出を
不死の影に踊らせておくれ。

行つてあの寂しげな死人たちにお告げ
（あの人たちも私の目を愛したかも知れぬのだ）
行つて告げておくれ
明るく小さい身體して墓地の絲杉の下を歩みながら
私も死んだ人たちをなつかしく思ふことを。

死んだ人たちにお告げ
私の前額の樣子を　さうして毛織の鉢卷のことを
私の小さな口と　さうして草の葉と水蠟樹の匂ひのしみた
圓やかに肥えてゐる私の指のことを。

お前はまた告げるであらう
數限り無い木の葉が搖り動かす
果樹園の中の影のやうに輕やかな
私の身ぶりのことを。

死んだ人たちにお告げ
私は度度もの憂げな疲れた瞼をしてゐることを
さうして夕暮れが來る時に私は踊り
風は私の長い衣の裾を亂すことを。

死んだ人たちにお告げ
私はあらはな兩腕を頭の下に折敷いて眠ることを
さうして私の肉體は菫色に浮ぶ血管の周圍に
黄金のやうに見える事を。
杏のやうに紫いろの私の頭髪が
どんなに見る目にやさしいかを
死んだ人たちにお告げ
さうして鏡のやうな私の足のことを
さうして月の色をした私の目のことを。
さうして死んだ人たちにお告げ
惱ましい日の夕べ
泉水のさわやかな側に伏して
私が死んだ人たちの愛を欲した事を
さうして空しい彼等の影を抱きしめた事を。

若さ

ノワイユ夫人

さはれ一日　汝われを去らん　あはれ若さよ　雙の手に戀を捧げて
汝われを去らん
われ悵み　われ泣かん　さはれ汝われを去らん
かくての果は　わがうちに　汝が影をさへ止めぬに至らん。

われ口は影に滿ち　眼さけびに溢れつつ
なほも汝が名を喚き呼ばはん
かくも泣き叫ぶわれをこの上に聞かざらんと
やがて死はその手の中にわが半死の心臟を收めん。

美しくも悲しき哀れなる戀よ
かくも心深く汝を愛でたるわれの
汝が足跡の影さへ止めざる險しき道を
なほ歩み得べしとはまことなるか？

……………………

あはれ若さよ　一日「悦び」と「戀」とに奪はれて
汝と汝が夢と涙と笑と薔薇と
はや此處にあらさらんとは……何事ぞ
ただにそれのみ希ひしわれにとりて……

介在の王國

ヂヨオルヂ・デユアメル

われ等が有なるこの沈默は
幸福に滿ちてふくれたり
汝が腕を前にのべよ
そは微温き水の如くに沈默を搖り動かし
またその中に濡れてひたらん。

心持ち汝が指をば開け
指の間をすきて沈默は流れん。

呼吸せよ　われ等が沈默は
汝が胸の中へ下らん。

見つめよ　汝はものの周圍に
沈默の顫動するを見ん。

この沈默の如何にわれ等が有なる！

この沈默の何處ぞ
わが身の肉體の終り！
何處まで汝はわが方へ
波動し來りまた消えて行くぞ？

幸にして　われ等そを知らであり
語る勿れ……　われ等そを知らであらん。

この沈默のわれ等自らにもまして
今しわれ等が幸福の有なり。

われ等が瞳は互に求めず
異る二つの思ひ
われ等が目と手とをつなぎ合す。

今かくてあるわれ等を見ん人は
われ等二人の間に燥けたる砂の
沙漠横たはるとのみ感ぜんか
はたわれ等が心の姿を察するを得んか？
そは何れにもせよ　默せかしわれ等默さん。

われ等しばしば斯くて
沈默の時の主たり

われ等が心は同じ思ひにふけり
四圍の景物ことごとく
同じき不動の餘韻に充ち
空氣はわれ等が間にありて
われ等と同じき戰きを含んで輝きにあふれ
われ等と同じきはりつめたる心もて
沈默はわれ等を窺ふなり。

さはれ　今われは思ひ出づ
一日かかる沈默の打ちつづきたる間に
われ等が時のけしはき絶壁にうち寄する
浪の響に充ちてありしを。

今宵また　ジャン・マルク・ベルナアル

（カイヤム）

今宵また汝空に昇る
おお月よ　親み多き光かな
歎びにあふれたるこの園に
汝今來る　わが夢を培はんと
されどやがてこの同じき園に
なほ幾夜汝來りて
あかつきいたるまで
わが影を求むるならん
おお月よ　遂に空しく……

われ身を比ぶ　ジャン・モレアス

われ身を比ぶ死人等に　涸れたる泉に　暗き地平に
散りたる花に　色褪せし芝生に　朽ちゆく木の葉に
柩つくらんと　青きものとてはなき林中に杣人の伐り倒す木に
冬の霧に　寂しくも哀れ深きあらゆる自然に
されどむしろわれわれかの渡津海と似たらずや　常に咲き匂ひつつも
過ぎ行く時を惜しまず　砂の上に咽び泣く泡沫殘し行くかの渡津海に。

また秋の來て　ジヤン・モレアス

また秋の來て　朽果てし
水車の古池を落葉もて被はん時
また風の來て　破れし戸のすきと
かつて挽臼の廻りゐたる空の小屋とを滿す時。

またしてもわれかの汀に行きて憩はん
年經て紅き木蔦を織れる壁に身を凭せつつ
冷たく寥しき水の面に
わが影と青ざめし日影の消えゆくを眺めん。

小唄　ジャン・モレアス

誰か路傍の花を踏みつけた
それにしても秋風が激しく花をゆすつてゐたのだ。

郵便馬車が路傍の古い十字架を倒した
それにしても十字架はひどくくさつてゐたのだ。

白癡が（お前の知つてゐるあの白癡が）路傍で死んだ
それにしても誰も彼の爲めに泣く人はないだらう。

ねがひ

ジャン・モレアス

公園の垣根にそうてわれ等歩むであらう
大熊星の傾く頃を
さうしてお前のかみのけの間にお前は
――それは私のねがひだ――
忘れ草と名のつく花をかざすであらう

お前の目は私の目をみつめるであらう――
大熊星の傾く頃を――
さうして私の目は忘れ草と名のつく花の
色を持つであらう

お前の目は私の目を見つめるであらう
さうして忘れ草と名のつく花にふれて
ゆれ出したと云ふ不思議な岩のやうに
私の全身はゆれるであらう。

森の中

ジャン・モレアス

小さなフエアリイよ　君等は歌つた　私の道の上で
君等の長いくろ髮のかげで　やさしい聲をして
小さなフエアリイよ　君等の長いくろ髮のかげで
夢と幻で一ぱいな森の中で。

夢と不可思議で一ぱいな森の中で
私が眠つてゐたひまに　やさしい侏儒よ
正直な侏儒よ　君等は私にくれた
黃金の笏を　私が眠つてゐるひまに。

その後私は大きくなつて　夢が何であり　幻が何であり
森の中の歌が何であり　黄金の笏が何であるかを知つた
それなのに私は今でもまだ愚な子供のやうに黄金の笏を抱いて泣き
そしてもう一度森の中でねむり度いと思つてゐるのです
それが夢であり幻であるとよし今では私が知つてゐるとしても
それは何でもないことです。

さびしき小唄　ジャン・ラオオル

お前の心の中には月の光がねむつてゐる
やさしい月の光が
惱み多きこの世からのがれる爲めに
私はお前の明さの中に溺れて死にたい。

愛人よ
お前のやさしい兩手の靜さの中に
私の心と思ひとをゆりうごかしておくれ
その時私は過去の苦惱を忘れるかも知れぬ。

時にまた愛人よ　お前は
私の病氣の頭を膝の上にのせて
私の爲めに歌つてきかせておくれ
私たちのことを歌つたのかと思はれるやうな歌を。

憂にみちたお前の瞳のうちに
お前の瞳のうちに私は
斯くまで澤山な接吻とやさしさを味ふので
ともすれば私の病氣は治るかも知れぬ。

月の中の漂泊人

ジャン・ラオオル

こはボヘミヤの昔がたりなり
眞夜中の月の中に
蒼ざめし漂泊人ありて
音を忍びヴイオロンひくと。

いともやさしきその樂の音は
かの森の靜さの中にて
ささやき交す戀人ばかり
此の日まで聞くを得たるなりと。

わが愛人よ　今し
月は黒きかの森に銀を着せたり
來れ　われ等行きて聞かん
今宵月の中にヴイオロンの歌ふや如何に。

夜曲

モオリス・ブウショオル

悩ましく暗き夜なりき
ただありて黒檀の空に光りき
金の針三五本。
夜の髪ながながとわれ等を包み、
地を包み　かの遠き海原包み
不可思議にあふれたる眠に埋め
翼あるものの香をうち揺りてありにけり。

その時よ　うら若きわれ等が戀の生れいで
ただ一日生くるのみなる百の薔薇ちり敷ける褥の上にめさめたる――
愚かしや　青ざめて　熱にわななき
われかの君に告げけるは
死なんなど　もろともに
肝に笑を湛へて　この戀の死なんその日に。

リラのさかり　モオリス・ブウショオ

リラのさかりも　薔薇のさかりも
今年の春には歸つて來まい
リラのさかりも　薔薇のさかりも
唐撫子のさかりも過ぎた。

風が變つた　空はさびしい
わたしたち二人はもう駈け出さぬ
さうしてリラも薔薇ももう摘まぬ
今年の春は愁しくて花をさかせぬ。

ああ　わたしたちをよい日に照してくれた
陽氣だつた去年の春。それなのに
私たちの戀の花はいま凋れてしまつた
お前の接吻もそれを目覺めさせることは出來ぬ！

お前はいま何をしてゐるのか？　花も吹かず
日もてらず　涼しい木陰とても無くて
リラのさかりも　薔薇のさかりも
私たちの戀と一緒に永久に死んでしまつた。

詩集のはじめに

モオリス・マアグル

私は似てゐる　あの男の子に
一人で家に殘されて
寂しいままに手紙を書いて
宛名はただ「巴里　お母さま」と
書いて出したあの男の子に

私を愛してくれるであらう人人から
私も遠くゐて一人ぼつちだ
あてどなしに私は手紙を出した
誰か拾つて讀んでくれるだらうか？

名さへ私の知らぬ人人の爲めに
やさしく愛す可き心の人人の爲めに
私はこれ等の小さな歌を書いた
せめて一人の女がわかつてくれるだらうか？
私はこの本の中に忠實に書いた
不實な移り氣な私の心を
「巴里お母さま」と男の子は書いた
それにしても手紙はとどくであらうか？

二元論　ポオル・ヂエラルデイ

愛人よ　何故にお前は云ふか？
「わたしのピアノ　あなたの犬」と……
時とすると又お前は云ふ
「わたしのお金で
あれを買ふつもりです」と。
何故にお前は
わたしたち二人を對立させる

これ等の言葉を使ふのか
「あなたのもの　わたしのもの
わたしのもの　あなたのもの」？
若しもお前が本當に私を愛するなら
お前は云ひさうなものだ
「わたしたちの本　わたしたちの犬」
さうして「わたしたちの薔薇の花」と

音樂　アンドレ・ミレ

翼あるサンフォニイ徐徐と息絶えて……

樂の音は默したれど竪琴はなほもわななく
蘆のしげみにささやきは流れ
葉末にひろがりやがて死に行く……

響よきヴヰオロンなほも音にのこり
遠くかすかなる秧鷄に似たり
微風のやうなるわななき四圍にありて
妙音を奪ひ去り消え行く風情……

實にこの世あまりに悪ろく　あまりに賤しければ
わが魂も　恍惚たるわが魂も立ち去りぬ……
音樂の翼に乗りて夢の世界へ！
そこに新しき地平あり
運命は己が自身久遠なるよろこびの中に全うせらる……
わが魂よ……　ああ汝が夢短かきに過ぎて
翼あるサンフオニイ徐徐と息絶えて……

衝立

ギイ・ロベエル・コスタル

云ふべくは……
昔の日の空(そら)
はすかひに
群鳥とべり。

雲の一(ひと)ひら
何時見てもただよふ
造花めく
彩色の花の上。

片隅に牧童一人ゐて
着かざりたる
調子はづれに
草笛ふきすさべるならん？

今はすたれし
そのかみの日の衝立(ついたて)
年ふりし客室(きやくしつ)の隅に
色ぞあせたる。

解脱

フェルナン・グレツヒ

泡沫の上の足跡の如くわが苦悩は凡て消えたり
おお神よ　汝は不思議にまた亦優しきものに人生を造り給ひぬ。

かつてわれ苦しみぬ　かつてわれ泣きぬ
さるを今われに残るは愛せしことの思ひ出のみ。

うら寒く孤獨なる室の内に
夜更けて唯一人あることの氣うとさよ　愁しさよ　やさしさよ！

影は妹の如くにさわやかなる手をわが前額の上に置き
時計は果なく時を刻む　おお默し得ぬ心。

かつてわれ愛でぬ　かつてわれ惱みぬ　かつてわれ泣きぬ
さるを今われに殘るは愛せしことの思ひ出のみ。

過ぎし日の情熱は日毎に木の葉の如くに散りゆき
わが心の内はいま悲しき青春に次げる秋なり。

多くも受けたる苦惱の爲めにわれ世を憎むと思ひきや
われは今寛容と愛とに他ならず。

泡沫の上の足跡の如くわが苦惱は凡て消えたり
われわが絶望の叫とわが愛でし名とを沈默に附す

われ今なほも生くゝ！　死ぬと思ひたりしを！　われ今なほも生く！
これやこれ永劫の奇蹟　果しなき神祕。

われいま心靜かに寂しき夜半に獨り祈る
憂世は遠くわれより隔たりて穩かに且は美し。

おお神よ　汝は不思議にもまた優しきものに人生を造り給ひぬ
泡沫の上の足跡の如くわが苦惱は凡て消えたり。

かつてわれ苦しみぬ　かつてわれ泣きぬ
さるを今われに殘るは愛せしことの思ひ出のみ。

午後の月　フェルナン・グレッヒ

徐徐とほの白く
木の間がくれに月のほる
一片の雲のごと輕ろらかに
なほ碧き大空によち昇り且つは漂ふ。

兵卒の歌

シャルル・ヴキルドラック

私はなりたい　或る日途ばたで見た
あの老人になりたい
日の當る地べたに坐つて
氣ままに足を投げ出して
彼は白石を碎いてゐた。

この暢氣な仕事のほかは
彼なら何もしなくてよい
正午が來て麥畑が燃え上る時刻
彼は日かげで麪包を食べる。

※

私は知つてゐる
木の葉に被はれた谷間の
人目に遠い石切場を
其處へは下りる小徑もない

そこは地球の古い瘢口で
そこはせせつこましく　曲つて深い
其處は青空も忘れてゐる。

日光が僅かに忍び入り
やさしい雨も音を忍んで降り
其處に小鳥がただ一羽ゐて
沈默によびかける。

そこで蒲と茨の下に
うづくまつて私は暮したい。

※

私はなりたい
寺の門前のあの盲人に
私はなりたい。
盲人は闇の中に生きて
寺の圓屋頂（ドオム）の下の聖唱歌のやうに清く歌ふ！
彼の内に流れる時のすべてを
彼はそのまま受け入れ得る。

今では盲人は
悲しみの川から引上げられた
幸福な漂流物なのだ

川はもうその泥と憎しみとの中に
彼をおし流す事は出來ぬ。

＊

私は　むしろ私はなりたい
戰爭の第一日に
第一に倒れた兵卒に。

酒を飲んでゐる二人の男

シャルル・ヴィルドラック

二人は酒を飲まうと云ふので卓子についてゐる
二人はゆつたりと肱を突いてゐる
二人は言葉を合せ　二人は視線を合せる
さうして卓子ごしに向ひ合つて
頰と　聲と　目を笑はせてゐる
互に面白い話を語り合ひながら。

二人は幸福だ　本當に今の瞬間に
二人は一緒にゐる事を幸福に感じてゐる
それにもかかはらず！………

それにもかかはらず
若し明日二人が一つの門の前に立つとしたら
その門は二人並んでは通れぬとしたら
一人が他の一人の後について通らねばならぬとしたら
この門の前で二人は立ちとまるだらう
前額に悪意の皺をきざんで
片目は意地悪く互のすきを狙ひながら
片目は斜に門をにらみながら。

一本の骨を間にした二匹の犬のやうに
大きな聲で吠えながら互に骨を奪ひ合ふ犬のやうに
この二人の男たちも　やがて今夜か明日にはさうなるだらう
酒を飲まうと云ふので愛し合つてゐるこの二人……

※

――これは眞實であり　これはかなしい事實だ
だが斯う云ふ風に云つたのではいけない
次のやうに云はねばならない。

今互に笑ひ合つてゐる二人の男
彼等は理由もなしになぐり合ふ事も出來るのだ
なぐり合ひをするに至るやうな理由を
彼等はつくり出すことが出來るのだ
おお！　それ等の理由は現に存在してゐる
それ等の理由は機會を待つてゐる！
二人の男はその中の一つを選ぶだけでよいのだ　とるだけでよいのだ！
いやいや斯う云つたのでもいけない。

彼等の古びた心の中に
昵懇と悦びの本能がかくれてゐるのだ
さうして今　せちがらい生活が古びた彼等の心に
與へてくれたこのゆつたりした僅な時間を過す爲めに
二人は互に目で笑ひ
二人は互の肩をたたき合ひ
二人は互に何の疑念もなく
二人は互にお酒をおごらうと思つてゐるのだ
互に面白い話を語り合ひながら。

眞夜中

シャルル・ヴキルドラック

皆が夜明け方に死んで行くのです
死が來て人たちの寢床の中で
眞夜中が過ぎる頃から
仕事を始めるのです
それなのに皆がそれに
氣がつかずにゐるのです。

男たちよ　女たちよ
今朝死んで行く君たちよ
私は今見るのです
不安げな君たちの手の群(むれ)を

そこから今　永久に
血の氣が消えて行かうとしてゐるのです。

今夜世界の到る處で
青ざめて斷末魔と戰ふ人たちよ
さうして夜明が泣きながら
沈默させるであらう人たちよ
私は今君たちの叫びを聞くのです
わななきながら。

何と死んで行く君たちの大勢ですこと！
どうして他の人たちは眠つてゐることが出來るのでせう？
君たちのうめき聲の砂濱の上で！。

この家の中に物音がしました
君たちのうめきの聲をききつけたのは
どうやら私一人ではなかつたらしい
どこかの室でたれかが歩いたやうです
君たちの看護(みとり)をするために
だれかが起きたやうです……。

いや　いや　さうではありませんでした
私の耳にはいま歌の聲が聞えて來ます
何處(どこ)かの室でたれかが歩いたのも
昨夜(ゆうべ)この家の中で生れた赤ん坊を
搖(ゆす)りに行くためであつたのです。

歸りがけに　シャルル・ヴキルドラック

歸りがけにかの女がつぶやいた

――私たちの話題がさうであつた譯ではないけれど
私たちはほのかの人たちが相手にせずに
ほうつて置いた二人の外國人のやうに
ただ語りあつただけだけれど。

別にあの方のわたしに對する態度がさうだと云ふ譯ではないけれど
あの方は他の人達に對すると同じにして
わたしに對しておいでになつたのだけれど
然しそれにしてもわたしは思ふのです　感じるのです

確に私たち二人のあひだに
何ごとかが始つたのだと！
確に今日がその日なのだと
（何故と云つて妾はあまりに　幸福なんですもの！）
永いことわたしが待つた
今日がその出發なのです！

かの女はまた云つた。

いいえ　さうではないのです……
わたしは氣でもちがつたのでせうか？
きつとわたしは感ちがひしてゐるのです
そんな譯がない筈ですもの……。

最後にかの女がまた云つた。

わたし知りたいわ！
どうか近いうちにもう一度お目にかかりたいものだ
この次にお目にかかつたなら
小さなもの音が　かくれたもの音が
聞えたやうな氣がした時に
人が長いこと呼吸を止めて
ちつと耳を傾けるやうにして
注意深くわたしは見てゐよう……。

＊

彼が一人ごとを云つた。

——かの女は他の男たちと話をすることも出來たのだ……
それなのにかの女は私の側にばつかりゐたのだつた。

この次に逢つたなら
かの女に話をしながら
目をぢつと見つめてやらう
さうして沈默の一瞬間を利用して
かの女に微笑して見よう。

※

やがて次に相見るその日が來た
然るに凡て(すべ)が彼等に不利だつた
かの女は他(ほか)の男に捕(つか)まつた
彼は多勢に取りまかれて重圍の中にあつた。

二つの百姓家(や)の間に森があるやうに
二人の間には多勢の人たちが立ちはだかつてゐた

さうして二人をさまたげた
目と目を見合はすことさへも……

歸りがけに二人は各自につぶやいた。

わたしはまたもとの悲しみと貧しさと一緒に
殘つてゐればよいのだ！
やつぱりわたしのまちがひだつたのだ
何ごとも私たちのあひだにはなかつたのだ
あつたとすればそれはただ
偶然と　そしてわたしの期待と
それ以外には何事もなかつたのだ。

かの女がつぶやいて云つた
ただの仁義のそのほかには

なんにもないのであつたのだ……

彼がつぶやいて云つた
私の自惚のそのほかは
なんにもないのであつたのだ……

若しも人たちが

シャルル・ヴキルドラック

若しも人たちが
昔の昔から
若しも人たちが
しなやかにいい匂ひのする
死んだ女たちの頭髪を
保存して置いたとしたら
あらゆるブロンドの頭髪を
あらゆる白い頭髪を

うば玉の夜のくろ髮を
サフラン色の明るい頭髮を
落葉の色の頭髮を
若しも人たちが
昔の昔の昔から
保存して置いて
一すぢ一すぢに繋ぎ合せて
海へ行く帆を織つたとしたら
海に澤山の頭髮が浮ぶだらう
赭い頭髮　明るい頭髮
星のない夜のやうな黑い頭髮
海に澤山のやはらかな帆が浮ぶだらう
日に輝いて　風にふくれて
海の上に飛ぶ灰いろの鳥が
海の上に飛ぶあの大きな鳥が

彼等の上にこれ等の頭髪の接吻が
かつて人たちがこれ等の頭髪の間に播いた接吻が
彼等の翼の上に來てとまり
さてその後で風のまにまに消えてゆくのを感じるであらう……。

※

若しも人たちが
昔の昔から
若しも人たちが
しなやかにいい匂ひのする
死んだ女たちの頭髪を
保存して置いたとしたら
あらゆるブロンドの頭髪を

あらゆる白い頭髪を
うば玉の夜のくろ髪を
サフラン色の明るい頭髪を
落葉の色の頭髪を
若しも人たちが
昔の昔の昔から
保存して置いて
一すぢに繼ぎ合せて
繩に綯つたとしたら
さうしてその繩で
罪人たちをつないだとしたら
さうして罪人たちに
繩に縛られたままで
散歩することを許したとしたら

女の頭髪(かみのけ)は長いので　長いので
牢屋の入口から繰り出して
罪人たちは各自(てんで)に
行くことか出来るでせう
各自に自分の家(うち)に。

新月の連禱

ジュウル・ラフオルグ

不眠症に
めぐまれた月よ

エンデミオンの
白い頸飾寶石(メダイヨン)よ

住む人もない
化石の星よ

サランボオの
ねたみの墓よ

果しれぬ神秘の
波戸場よ
聖母よ！　令嬢よ！
ヂアアヌ　アルテミスよ
われ等が夜遊びの
聖みはりよ！
骨牌あそびの
呪祭よ
露臺の上の
つかれた夫人よ

螢をそそのかす
媚藥(ほれぐすり)よ

最後の讃美歌よ
窓よ　圓屋頂(まるやね)よ

われ等が救ひの猫の
美しい眼よ

おお　われ等が信仰の
野戰病院になつておくれ！

聖大赦免の
羽蒲團になつておくれ！

最後の一つ手前の言葉　ジュウル・ラフォルグ

宇宙かね？
――おれの心は
そこで死んで行くのさ
あとものこさずに……

本當を云ふと　地球をとりまくあの天井は
豪氣に薄情に出來てるのさ。

女？
――おれはそこから生れて來てる

魂の中に
死を抱いて……。

本當を云へば　方角ちがひの二人が
一番よく愛し合ふ事が出來るのだ。

夢は？
——結構なものさ
終りさへ
見られたら……

本當を云へば　人生は短かく
夢は長い。

すると
各自に差配してゐる
この身體で
何をしたらよいのか?。

本當に　おお　年月よ
この豊な身體で何をしたらよいのか?

あれや
これや
ここや
かしこや……

本當を云へば　本當を云へばこれだけさ
その外のことはなるやうにするがよい。

ピエロの言葉

ジユウル・ラフオルグ

かくしの中へ兩手をつつこんで
道を歩きながら
私はきく
百千の寺の鐘が
「貴さまの知らぬ間に
時は近づいてるぞ」と歌ふのを！

何と！　神さまなんてに用はございません！
ここはわが安住でさあ！
どうやらなつかしい

あの天井
これがすべてでさあ
私はまつすぐに歩きます
私は曲つた事はいたしません。

うその
はきだめのやうな
歴史も自然も
私は悉皆承知です
ちよいと皆さんに申し上げて置きますが
私は眞面目で云つてゐるのです。

五分間寫生　ジユウル・ラフオルグ

オフエリヤ——わが君、それははかない事でございます。
ハムレツト——女子(をなご)の戀のやうにぢや。

おや　おや！　天氣が變るわい
雷さまも遠くない
人たちは大急ぎで
刈草をしまひこむ！
腫(はれ)ものがやぶれる！
夕立がふり出す！

これはしたり
洪水どもの大げんか！……。
おや！　やお！　これはまた
雨傘の行列だ！
おや！　おや！　破産しかけた
この自然！……。

私の窓の上に
非人らしい様子をした
フクシヤの花が一つ
よみがへる。

ネル

ルコント・ド・リイル

六月よ　明るき汝が太陽に照らされて
紅うばら酔ひたる如く輝くよ
六月よ　傾けよ　われの方へも　汝が金の酒杯を
わが心　汝がうばらとは似たらんに。

影つくる青葉の下の木がくれに
戀情のためいきありて立ちのぼる
あはれ心よ　かしこなるかの森の中
斑鳩なげき歌ふかな戀のなやみを。

火と燃ゆるかの空に汝が眞珠如何にやさしき
おお　なやましの夜の星や！
さりながら　また思ふ　ああ如何に増してやさしき
戀に醉ふおおのが心に照る光　照るこの光！

長き渚に波寄せて　よく歌ふかの海も
そが久遠のつぶやきの絶え果てん
おお　ネルよ　わが戀人よ　われの心に
汝が姿花の如さかざらんその日來るまでに。

エスパハンの薔薇　ルコント・ド・リイル

泡のうてなの中に咲く
エスパハンの薔薇も
モッスウルの園の茉莉も
柑子の花も　どれも
匂ひの甘さ　すがすがしさが
お前の香ばしい息には及ばぬ
おお　いとしのレイラ！

お前の脣は珊瑚です
お前の笑ひは唄ひます

泉の水よりいい聲で
泉の水より生き生きと
柑子の枝にたはむれる
陽氣な風よりさわやかに
菩の樹のそば近く
歌ふ鳥よりなよやかに。

おお　いとしのレイラ！
かるい身振のはばたきで
やさしいお前の脣から
接吻がとんで行つてのち
白い柑子に香も消えて
池のうてなに咲く薔薇も
氣高い匂ひを失つた。

ああ　ああ　私は希ふのだ
浮氣な蝶蝶のお前の戀が
も一度氣ままな羽ばたきで
私の心の上に來て
泡のうてなの中に咲く
エスパハンの薔薇までが
も一度匂ひがすることを。

秋の歌　ボオドレエル

一

われ等やがて肌寒き闇の中に沈み入らん
おおさらば　左様ならよ　短きに過ぐるわれ等が夏の生氣ある輝きよ！
われすでに聞くなり　庭の鋪石の上に
さびしき響して落つる枯枝を。

恨み　憎み　戰慄　怖れ　止むなくもつらき勞働の冬は
今し再びわが身のうちに歸へり來らんとし
極地に於ける太陽に似て　わが心は
凍りたる赤色の一塊に過ぎざらんとす。

われ戰慄きつつ一つ一つ落木の音に耳を傾く
斷頭臺建つるもの音も斯くは陰慘たることなけん
今わが精神は斷間なく打ちおろす重き鐵槌の下にくづれ行く塔にも似たり。

この單調なるもの音にうち搖られつつ
何處にか人ありて急ぎ棺に釘する如し
誰が爲めの棺ぞ？　きのふ夏なりき　さるを今し秋
この神祕なるもの音は何やらん出發の如くにひびく。

二

やさしくも美しき愛人よ　われは愛づ
汝が長く切れたる眼の薄みどりなる輝きを
されど今日もの皆はわれに苦く　汝が愛情も
汝が密室も　また汝が暖房も海に照る太陽の價あらず。

さはれわれを愛せよ　おおやさしき心よ！
忘恩の子にも　悪しきものにも　母の如かれ
戀人たるも　姉たるも　かにかくに光輝に滿てる
秋の如く或は夕陽の如く束の間はやさしさたれ。

短き人の生命や！　墓ぞ待つ　墓は飽くなし！
ああ！　汝が膝に額うづめつつわれをして
眞白くも燃ゆるが如き夏の日を惜しみ
黄色くもやさしき秋の光を味はしめよ！

幽靈　ボオドレエル

褐いろの眼せるかの天使等の如く
われ君が寢所へ歸へり來らん
さて小暗き夜のもの陰にかくれて
われ音も無く君が方へすべりよらん。

かくてわれ君に與へん　愛人よ
傾斜ある窩のまはりに
月の如つめたき接吻と
蛇の愛撫とを。

蒼ざめし朝きたる頃
空しきわが席を君は見出でん
されどそは夜きたるまで冷たかるべし。

君が生命と若さの上に
人等やさしさによりてなす如く
われ氣味わるさもて君臨せん。

旅へのいざなひ

ボオドレエル

わぎもこよ　わが戀人よ
思ひ見よ　その樂しさを
もろ共にわれ等ゆき
かの國に住み
心ゆく許り戀をし
戀をしてさて死ぬる
汝(なれ)に似しかの國に行き！
曇りがちなる空に照る
うるみがちなる日の光
それさへわれになつかしや

不可思議めきて
涙の影に輝ける
いつはり多き汝が目とも。

ああ　かしこ　かの國ゆかば　ものみなは
秩序と美　豪奢　靜謐はた快樂。

ふる年に光澤つきて
時代めく古き家具
寢の室にわれ等かこまん
珍らにも見知らぬ花の香に匂ひ
ほのかなる龍涎の香とまじらん
きらびたる五彩の壁は
そこひなき鏡の面は
東の國ぶりはでに

ものみなはそことなけれど
魂にもの語るらし
おのがじしおのが言葉に。

ああ　かしこ　かの國ゆかば　ものみなは
秩序と美　豪奢（おごり）　靜謐（しづけさ）はた快樂（けらく）。

見よや　かの船つきの岸近く
來てねむるかの大船の
無頼なるその姿
遠く世界のはてしより
大船のここに來（きた）るは
せめて汝（な）が小さき望み
叶（かな）へんとただに希（ねが）へば。
――沈む日は

野にも川にも　都にも
ひた塗りぬ金と紫
わが世いま眠り行くかな
狂ほしき光のうちに。

ああ　かしこ　かの園ゆかば　ものみなは
秩序と美　豪奢　靜謐はた快樂。

夕のしらべ　ボオドレエル

時は今　花柄(くわへい)の上にわななきて
花はみな香(かう)の煙(けむり)の如くにも立ち去り迷ふ
音と匂ひと夕ぐれの空氣にとけて
ああ　なやましの圓舞曲(ヴァルス)かな　ああ　もの憂かる眩惑(めくるめき)！

花はみな香(かう)の煙(けむり)の如くにも立り去り迷ふ
ヴイオロンはかなしめる心の如くわななきて
ああ　なやましの圓舞曲(ヴァルス)かな　ああ　もの憂(う)かる眩惑(めくるめき)！
かの空はさびし美し大いなる神殿(しんでん)と似て。

ヴイオロンはかなしめる心の如くわななきて
果しれぬ晴き虚無をば憎むなるやさしき心
かの空はさびし美し大いなる神殿と似て
日は溺る自が流したる凝固る血の海。

果しれぬ晴き虚無をば憎むなるやさしき心
光ある過ぎ来し方のありとある名殘をあつむ！
日は溺る　自が流したる凝固る血の海………
あはれ　夜が思ひ出の光れるよ　わがうちに聖體盒の如くにも！

前世

ボオドレエル

かつてわれ　いと永く　住みしことあり　いと廣き柱廊のうち
海に照る日に榮えて千の火のごと色染り
夕されば　そそり立つ圓柱不思議めき
玄武洞見る思ひしぬ。

荒浪は天の姿を浮べつつ
交ひにき莊嚴にはた不可思議に
豐かなるその樂の音の無上なる響をば
わが目の映す夕やけのまばゆき色に。

おのれ生きしは彼處なり　靜かなる愛慾のうち
青空と　浪と　光の中に住み
香ひ油を身に塗れる奴隷たちゐて

椰子の葉にわが額をうるほうし
われの歎きのみなもとのかなしき祕密さぐるより
他につとめとてはあらなくに。

秋の歌

ヴエルレエヌ

秋の
ヴイオロンの
節ながき啜泣
もの憂き哀みに
わが魂を
痛ましむ。

時の鐘
鳴りも出づれば
せつなくも胸せまり
思ひ出づる
わが来し方に
涙は涌く。

落葉ならね
身をば遣る
われも、
かなたこなた
吹きまくれ
逆風よ。

草の上　ヴエルレエヌ

アベは呂律がまはらない——そこな侯爵
鬘がちよいと横向きで。
——このシイプルの古酒の美味さ
でも何さカマルゴどの　そちの首とは及びもないが。

――もゆる思ひは………ド　ミ　ソル　ラ　シ

――アベ　そなたの悪計見やぶつたり

――奥さま方　あの星一つ外せぬやうだつたら
死んでお目にはかかります。

――小犬になりたや　なりたやな！

――次から次へと女子しゆうを
抱くとしようぜ――皆さん　それでは

――ド　ミ　ソル――ええ　お月さま今晩は。

傀儡

ヴエルレエヌ

スカラムウシとポリシネラ
わるだくみして月かげに
委くろぐろ身振する。

時に來かかるお醫者さま
ボロニヤ生れのろくさと
薬草(くすり)つみとは表むき。

さてその娘尻がるが
椥(にれ)の木かげに身をよせて
肌もあらはな色ぐるひ。

仇し男は西班牙生れ
海賊かせぎもたれゆゑに
やあさ　月が鳴いたかほととぎす。

マンドリン　ヴエルレエヌ

戀慕流しのみやび男と
耳かたむくるたをやめと
氣のない言葉の受け渡し
歌ふ葉かげの暗がりに。

あれがチルシス　こなたはアマント
さてそのとなりがクリタンドル
おつぎにゐるのは情(つれ)ない人に
やさしい歌を書き贈るやさしい心のあのダミス。

男たち短い絹の上着きて
女たち裳裾のながさ
ああ　あでやかな　にこやかな
青い影繪もやさしげに。

薄桃いろと灰いろの月の光のうつけきに
渦卷き狂ふ　をりもをり
そよ吹く風のわななけば
マンドリンまた一くさり口たたく。

かなしき對話　ヴエルレエヌ

うら枯れて人氣なき廢園のうち
かげ二つ現れてまた消え去りぬ

かげの人眼死に　脣ゆがみ
ささやくも　とぎれ　とぎれや

うら枯れて人氣なき廢園のうち
妖つ影二人來て昔をしのぶ

過し日の戀ごこち君はなほ思ひ給ふや？
——よし思ひ出づるとも今はせんなきことにあらずや？
——わが名きくのみにて君が心は今もなほときめくや？
今もなほ夢にわが魂見るや？　——否よ。
——はてしなき幸にゐて　われ等かたみに口吸ひし
そのかみの日美しかりし！　——さもありけるか。
——その日頃　空いかに青かりし　行く末の望ゆゆしく
——望とや？　今はむなしく暗き空へと消えてなし！
かくて影　燕麥しげれる中を分けて消え
その言葉ききたるは唯に夜のみ

白き月かげ

ヴエルレエヌ

白き月かげ
森に照り
枝に
聲あり
葉ずれして……

おお　愛人よ聞き給へ。

そこひなき鏡となりて
沼水は映すかな

その枝に風の泣く
黒き梢の
姿をば……

夢みんいざや二人して。

やさしくも深き心の
なごやかさ
月の光に照り榮ゆる
空より降ると
見ゆるかな……

ああ　この良夜を如何せん。

巷に雨の

ヴエルレエヌ

雨は静かに市(まち)にふる　ランボオ

巷(ちまた)に雨の降る如く
われの心に涙ふる
かくも心に滲(にじ)み入る
この悲しみは何ならん？

やるせなき心の爲めには
おお　雨の歌よ！
やさしき雨の響は
地上にも屋上にも！

消えも入りなん心のうちに
故もなく雨は涙す
何事ぞ！　裏切もなきにあらずや？
この喪その故を知らす。

故しれぬ悲しみぞ
實にこよなくも堪へがたし
戀もなく恨もなきに
わが心かくも悲し！

グリイン　ヴェルレエヌ

享け給へ　ここに木の實と花と葉と枝こそあれ
またここに　わが心あり　君故にあこがれて打つ
眞白き君が雙手もて引裂き給ふこと勿れ
願はくは麗はしの君が瞳に　これ等貧しき捧げもの美しとのみこそ映れ。

朝の風冷たくもわが前髮に玉なせと結びやしけん
野の露に總の身ぬれてわれは來ぬ
許せかし　わが疲れ君が褥の裾の端に憩ひつつ
やがて來ん安らけき甘き時をば夢見んを。

今し給ひし接吻の響になほもわななけるわれの頭を
うら若きふくらなる君が乳の上にいねさせ
かくてこそ歡びに總身の燃ゆるこの甘き暴風すぎなん
そのひまに君やすく憩ひ給へば　許されよしばしわがまどろむことも。

ヴエニスの舟唄　マルク・モニエ

わたしやリアルトのゴンドリエ
ヴエニスの海がわしの城
リドがわたしのお庭なら
月の光は窓かけよ

わたしやカナルのゴンドリエ
妻よ　そなたの黒い目が
夕（ゆふべ）となれば灯（とも）る窓
それよわたしの澪標（みをつくし）

好いた同志の二人連
乗せて行衛もしらなみや
このゴンドラの行くところ
風も見ぬふり知らぬふり

ヴエニスの海の浮島の
ヴエニスの海のゴンドラの
晝より多き夜と晝を
戀をなかめて身はくらす。

どの籠の中にも　アルフォンス・セエシエエ

どの籠の中にも二羽の鳥がゐる
お前にそれが聞えぬならお前は聾だ。
二羽の鳥がゐる　どの籠の中にも
お前にそれが見えぬならお前は盲目だ。

どの籠の中にも二羽の鳥がゐる
そして二人の男がゐる　どの男の中にも。

どの籠の中にも一羽の鳥がゐて
地上の樂園を歎いてゐる。

どの籠の中にも一羽の鳥がゐて
拒まれた無窮を歎いて啼いてゐる。

どの籠の中にも二羽の鳥がゐる
一羽は果樹園を歩み　他の一羽は天國を。

どの籠の中にも一羽の鳥がゐて
朝日を昇らせる爲めに口笛を吹いてゐる
一羽の鳥がどの籠の中にもゐて
月にヴェルを脫がせようと口笛を吹いてゐる。

どの籠の中にも二羽の鳥がゐて
一羽は生を語り他は死を語る。

どの籠の中にも一羽の鳥がゐて
仲間を慕つて溜息する
どの籠の中にも一羽の鳥がゐて
人に知られたことをかなしみ歎く。

どの籠の中にも二羽の鳥がゐて
二羽ともてんでに自分の孤獨を忘れようとする。

どの籠の中にも二羽の鳥がゐる
彼等は何時かは自由な身體(からだ)になるだらう
どの男の中にも二人の男がゐる
二人が一緒に苦しむことを止めるだらう。

土耳古の王妃より王への手紙

ジユウル・ドパゲ

おお　私の高貴なお亭主よ
あなたの奥さまが手に筆をおとりになる
御機嫌は如何にや？
御風邪氣は如何にや？
御胃の病は如何にや？
此の頃は
少しは悪い方ですか？
肥つた私の狆ころよ
私を信じ　お身體お大事に！。

自家では變りもありません
あの老ぼれの牝鷄が
芝生の上で
玉子を一つ生みました
鸚鵡は相變らず
噦噎が出るので苦しんでゐます
金魚と
豚とは一緒になつて
コルクの栓で遊んで居りまする。

私たちの住居が燒けました
納屋も馬屋も丸燒けです
この悲しみを慰める爲めに
今夜舞踏會があります
總理大臣が

寢床の中で死にました
目出度い事ではありませぬ！
彼の息子のアラン坊は
親なしになる事でせう。

あなたが御出征中なので
私は大きに退屈です
私は戀人を一人見つけました
然しまだまだ足りませぬ

やつぱり以前のやうに私には
大勢の戀人が入用です
御安心なさい
あなたも浮氣するよろしい。

革命が起きたので

（或は內亂かも知れませせぬ）
市中は中中な騷動です
然し何も御案じになるには及びませんー
何でもない事だと　私は信じます
品行方正で政府から感狀を貰つた男は
いよいよ見せしめの爲めに
昨日首ざらしの刑になりました。

息子たちは皆いづれも元氣よく
食つたり飲んだりしてゐます
それで朝から晚まで
下痢のしつづけです
この養生法は第一健康に適し
それに非常に名譽なことだと
侍醫の國手も認めます

なほまた國手の云ふところでは
薬は全然無駄だと云ふことです

ではこれで　左様なら
殿さまよ　あばよ
殿さまよ　しばよ
くれぐれもよろしく
あなたのヴヰルジニイより
追啓に一寸一言
お前もよく知つてゐる通りの
あの元氣のいい長男のトムが
流行感冒で死にましたよ
エァ　ァ　ドッコイショ！
ァ　ァ　ドッコイショ！
「皆がをどる　王様も踊る。」

傳說

マルセル・アッシャアル

「運命」が二人の少女を殺した
かの女等の心臟の中に何があるかを見る爲めに。

第一の少女の心は
おお！　わが姉妹（はらから）よ　戀で一ぱいだつた
さうして心臟の疵口から

小川がいつまでも流れ出た
それはかの女が若しもその夢を生きたとしたら
流したであらう涙の小川です……

第二の少女の心臓は
おお！　わが姉妹（はらから）よ　苦痛で一ぱいだつた

さうして心臓の裂口に
澤山の花が咲いた
みんな同じい色の……

雪だま　クレマン・マロ

たはむれに雪だまを
アンヌが私に投げました
その時まで
雪は冷たいものだと計り
私は思つてゐたのです
ところがそれは火でしたね
決してうそではないのです
事實が證明するのです

私は忽ち燃えました
何としようぞえ　雪にさへ
ほむらが隠れてゐてみれば
どこにどうしてゐたとても
私が燃えずにゐられませう！

アンヌどの
私をこがすこのほむら
生すも殺すもそなたの心
いえ　いえ　水も雪も
氷でさへも消しませぬ
せつないせつないこの胸に
燃ゆるほむらを消すためにや
そなたも一緒に燃えやることだ。

小瑟

クレマン・マロ

かみ黒き花の少女子(をとめご)
ふくよかに肉つきて
神のたぐひと似たらんが
歌ひつつ指(および)もて瑟(こと)ひき鳴らし
やさしくも妙(たへ)なる樂(がく)をかなづれば

永久(とこしへ)の榮(さかえ)を誇る聖者にもまさり
耳より目より歡びはわがうちに入る
いささかはその少女子の愛うくる身と
わが思ふとき
聖者にもましてわれ成る
榮あるほまれの人と。

羊飼ふ娘のなげき　十七世紀佛蘭西民謠

羊飼ひのナネットが
泣いてためいきをいたします
それも無理ではないのです
かの女の母が云ふのです
あの子をお嫁にやりませう
その子をお嫁にやりませう
あの子その子とばつかりで
かの女のことではないのです

ああ　ああ　わたしはさびしいな
かうして月日はたつばかり

牧場にゐても家にても
皆が何時も云ふことに
あの子をお嫁にやりませう
その子をお嫁にやりませう
あの子その子とばつかりで
わたしのことではないのです

日にち毎日羊を追うて
わたしは牧場へ參ります
家へかへればまたしても
皆が何時も云ふことに
あの子をお嫁にやりませう
その子をお嫁にやりませう
あの子その子とばつかりで
わたしのことではないのです

少女子よ　十八世紀佛蘭西民謠

少女子よ
時なすごしそ
菫を摘むは春にこそ
ら　ら　ら　りれつと
ら　り　ろん　らん　ら
ら　ら　ら　りれつと
ら　り　ろん　らん　ら

この花わけて散り易し
うき世の戀もさながらに
少女子よ
時なすごしそ

菫を摘むは春にこそ
ら　ら　ら　りれつと
ら　り　ろん　らん　ら
ら　ら　ら　りれつと
ら　り　ろん　らん　ら

若き間に戀人えらべ
移り氣に移り氣かへせ
少女子よ
時なすこしそ
菫を摘むは春にこそ
ら　ら　ら　りれつと
ら　り　ろん　らん　ら
ら　ら　ら　りれつと
ら　り　ろん　らん　ら

いいえわたしは信じません

十八世紀佛蘭西民謠

いいえ　わたしは信じません
コランがわたしに云つたこと
わたしの耳に口よせて
そつとコランが云つたこと
いいえ　わたしは信じません
戀をそんなによいものと。

戀がそんなによいならば
付てあんなに鬪くでせうか？
あのいい男のフイリレエスが
ひつきりなしにクリメエヌに
胸のつらさを歎げくのを？

いいえ　わたしは信じません
コランがわたしに云つたこと
わたしの耳に口よせて
そつとコランが云つたこと
いいえ　わたしは信じません
戀をそんなによいものと。

わたしにしても同じこと
コランはやさしい剽輕者
それでも逢ふたび氣苦勞な
胸の動悸も高鳴つて……。

いいえ　わたしは信じません
コランがわたしに云つたこと
わたしの耳に口よせて
そつとコランが云つたこと
いいえ　わたしは信じません
戀をそんなによいものと。

聖クルウの女舟子たちのはやり歌

十八世紀佛蘭西民謡

女舟子は陽氣でござる
戀があるではないけれど
時に笑談半分に
口説いて見るもそりや御勝手よ
だがな若い衆ようききなされ
變な身ぶりはゆめせまいこと
チスト　ゼスト　ゾン　ゾン　ゾン！
いやらしい奴手玉にとつて　すつてんころりん水の中

如何に人人わしらのやうに
上手な舟子（ふなこ）はほかにはござらぬ
粋な若い衆さあ乗りなされ
水をこはがることはない
うけたまはつたる櫂さばき
舟は身輕よ　氣輕な舟よ
ヂスト　ゼスト　ゾン　ゾン　ゾン！
沈沒したとて心配御無用！

內氣なおぼこな娘たち
戀は岸邊（きしべ）に住んでゐる
水の中でもやきこがす
用心あそばせ戀の火に

戀と名のつくこの曲者は
何時もお前を待つてゐる
森の木かげの暗かりに
チスト　セスト　ヅン　ヅン　ヅン！
王のお前にやさ疵かつく。

ヘブライ歌　読人不知

マイヤエルク　わが子よ
マイヤエルク　わが子よ
おお　マイヤエルク　わが子よ
そこにお前は誰の前にゐるのか？
そこにお前は誰の前にゐるのか？
彼(かれ)の前　王の王　唯一の王　わが父よ
彼の前　王の王　唯一の王　わが父よ
彼の前　王の王　唯一の王　わが父よ

マイヤエルク　わが子よ
マイヤエルク　わが子よ
おお　マイヤエルク　わが子よ
お前は彼に何を求めるか？
お前は彼に何を求めるか？
多くの子等を　長生を　さてパンを　わが父よ
多くの子等を　長生を　さてパンを　わが父よ
多くの子等を　長生を　さてパンを　わが父よ

マイヤエルク　わが子よ
マイヤエルク　わが子よ
おお　マイヤエルク　わが子よ
何故に子等を希ふか　云つておきかせ？
何故に子等を希ふか　云つておきかせ？

子等にはモオゼの戒を訓へます　わが父よ
子等にはモオゼの戒を訓へます　わが父よ

マイヤエルク　わが子よ
マイヤエルク　わが子よ
おお　マイヤエルク　わが子よ
何故に長生を希ふか　云つておきかせ？
何故に長生を希ふか　云つておきかせ？
生きものは天帝の御榮を讃へます　わが父よ
生きものは天帝の御榮を讃へます　わが父よ
生きものは天帝の御榮を讃へます　わが父よ

マイヤエルク　わが子よ
マイヤエルク　わが子よ
おお　マイヤエルク　わが子よ

お前はまだそのほかにパンを求める？
お前はまだそのほかにパンを求める？
わが父よ　このパンをとるがよい　あなたを養ふがよい
　このパンを祝福するがよい
わが父よ　このパンをとるがよい　あなたを養ふがよい
　このパンを祝福するがよい
わが父よ　このパンをとるがよい　あなたを養ふがよい
　このパンを祝福するがよい。

ユダヤの祈り　讀人不知

汝が御榮を讃へしめよ　おお　王者の王者よ
汝　死者を蘇生らせ　世界を新にする者よ
主よ　われ等イスライルの子の爲めに
汝が御代を掟せよ　果しなきとことはに
われ等皆アアメンと呼ぶ
光ある汝が御名よ

愛せられ　親しまれ　讃へられ　あがめられてあれ
われ等が祝福の上に　讃美歌の上に　賞揚の上に
空高く翔ける御名よ
祝福され　聖化され　熱愛されてあれ
かくて恵深き天のわれ等に與へんことを
安けき生命と平和と幸福とを
あ！　あ！　あ！　あ！　あ！　われ等皆アアメンと呼ぶ。

戀の歌　讀人不知

草や木の芽ともろともに
私の心の薔薇(ばら)も眠りから覺めるのです
朝の星と夜の星との歌につれて
私の心の薔薇(ばら)も香り出すのです

時鳥が啼いた時
私の心は涙にとけました
自然が私の身のまはりに寢入つた時に
私の夢はめさめました

空には千萬の星がありながら
私の闇を照らす星はただ一つです。

時の訓誨

トリスタン・レルミツト

輕き足どり休みなく過ぎ行く「時」の
なべて世の美しきものを奪ひ行くは
われ等に空く時を過す勿れと訓へ　また
花束は薔薇の季節に作る可きを告げんとなり。

戀人の遊歩場　トリスタン・レルミット

やさしい空氣のただよふ
このほの暗い岩屋の近く
小波は小石とたはむれ
光り影と鬪ふ

砂の上の嬉戯に疲れて
波は今この淵に來ていこふ
かつての日そこに
「水仙」が溺れて死んだ

「戀」にとらはれてより
日頃の赭顔
黄ばみやすると來てのぞく
かのフォオヌが水鏡の一つ

この紅い花の影と
枝垂さく葦の花の影と
水に寫つて
眠る水の夢かとも思はる

天地を若やぐる
やさしい神意の春が
この綠の毛氈に
色さまざまの花を咲かせる

この林にも　あたりの山にも
まだかつて狩人は足を踏み入れぬ
そこに角笛ひびき渡るも
そは「月の女神」とかの女の友たち

この年ふりし樫の木は
神木のしるしあらたかた
人に截られる時に
熱い血を流し歎きの聲を出すであらう

さびしい聲のこの黄鳥は
おのが不幸な思ひ出を
音樂にして語りながら
身のかなしさに醉はうとする

太陽の光が一刷毛流れこんで
金いろに染めたこの木陰に
類なき巧みさに
黄鳥は歌ひ出す

この榛皮の枝に　山鳩の女夫
かたみに身のつらさを語り合ひ
戀の口説の
やさしい慰みにふける

一日ヴエニユスとアンキイズと連れ立ちて
砦の中を行きさまよふ間
戀の天使二人ヴエニユスを待ちながら
一つの櫻桃を奪ひ合ふ

これ等神神しい小徑をめぐり
ニンフ等歌ひつつ踊り
草むらに棘のない
花を咲きに匂はせる

風も雷鳴もいまだかつて
この邊の平和をやぶつた事はない
さうして神の好意か
ここでは何時も地の上に笑つてゐる

愛するクリメェヌよ　わたしの希を聞入れておくれ
夕暮の來ぬひまに　お願ひだ
われ等かの泉の岸に行つて
腰かけよう

青ざめた巳(し)が顔色(かほいろ)と似もよらぬ
紅い薔薇の花を見て
戀と美しさに醉つた
夕風のささやきがお前には聞えぬか？

香料で一ぱいなかの女の口で
夕風はわれ等の徑を吹いた
お前の呼吸(いき)の龍涎香に
茉莉花の匂ひをひそませようと

黒水晶のやうに見える
この水鏡の上にお前の顔を寫せ
斯うして私はお前に見せたいのだ
世界中で一番美しいものを

お前は驚くことはない
お前の律令の下に生きる私が
お前の美しい瞳を私の王と呼び
私の星と呼び　私の運命と呼んだとて

お前の心が如何に冷たくあらうと
若しもお前が男の衣を着て
そこに寫つたお前の姿を見たとしたら
お前はお前自身に焦れて死ぬだらう

ごらん　千の戀の天使が
お前の髪に來てかかり
或はまたかくも美しい灰の下に
彼等の情火を來て埋める

この若若しく陽氣な戀の天使の一群も
お前がそれを怒らせようと欲するなら
忽ちにこれ等二つの白石膏の山の上から
谷そこへと落ちてしまふだらう

私の慾念と一緒に水にうかぶ
お前の顏を見ながら私はわななく
私の吐息(ためいき)がお前の影を吹いて
難破させはしないかとおそれるからだ

この冒險が案ぜられるなら
クリメエヌよ　かくも心易く
この不實な水に
あらゆる自然の寶(たから)をまかせぬがよい

お前は欲するか　お前の特別な親切で
私を他の人間の上に置くことを？
若しも水がお前の手の雪を解かさぬなら
お前の手の中で私に水をのませておくれ

ああ　私はもう支へ得ぬ　私は眩惑く
私の魂は消えようとする
お前が今私にのませてくれた水は
なかばは火炎の水だつた

お前の口の濡れた接吻の一つで
この大火は消すことが出來る
罪をつくる事が少しでも氣にかかるなら
この殺人はしとげないでおくれ

若やかな太陽に愛撫される
私の幸福は
眠りのうちに月の情を
受けた男のそれにもまさるだらう

クリメエヌよ　この接吻は私を酔はせる
次の接吻は私を凍らせる
若しも私がこの一つの接吻で死なぬなら
私は生きる資格のない男だ。

新篇月下の一群終

新編 月下の一群 目錄



昭和三年九月一日印刷
昭和三年十月一日發行

新編月下の一群

定價三圓五十錢

譯者　堀口大學

刊行者　長谷川巳之吉

東京市麹町區一番町五

刊行所　第一書房

振替東京六四二二三
電話九段三三四四

印刷所　單式印刷

製本者　橋本久吉

第一書房刊行書目

業務擴張の爲め高輪の居住を引拂つて第一書房理想の地たる麹町區一番町へ新築轉居いたしました。

日夏耿之介著	日夏耿之介詩集	全三冊帙入價五拾圓
萩原朔太郎著	萩原朔太郎詩集	新菊判五百頁定價六圓
堀口大學著	堀口大學詩集	新菊判三百八十頁挿繪十枚定價六圓
西條八十著	西條八十詩集	新菊判五百頁定價六圓
佐藤春夫著	佐藤春夫詩集	特製賣切 普及版定價壹圓 近く豪華版刊行
野口米次郎著	表象抒情詩	四六判二百四十頁定價一圓八十錢
野口米次郎著	人生詩集	近刊
上田敏遺著	上田敏詩集	四六判七百五十頁定價三圓八十錢
茅野蕭々譯	リルケ詩抄	新菊判四百頁定價三圓八十錢
三富朽葉遺著	三富朽葉詩集	四六判八百四十頁定價四圓五十錢
三木露風著	三木露風詩集	四六判七百五十頁定價三圓八十錢
三木露風著	露風詩話	四六判二百頁定價一圓五十錢
ウアインズ著	詩人野口米次郎	四六判二百四十頁定價一圓八十錢
矢野峰人著	詩學雜考	四六判二百頁定價一圓五十錢
矢野峰人著	近代英文學史	初版絶版近く改訂版出來
片上伸遺著	露西亞文學研究	菊判六百三十頁定價三圓八十錢

- 土田杏村著　文學論　菊判百二十頁　定價一圓
- 土田杏村著　國文學の哲學的研究　菊判三百七十頁　定價二圓五十錢
- 土田杏村著　（國文學の哲學的研究第二卷）文學の發生　近刊
- 土田杏村著　日本支那現代思想研究　菊判三百五十頁　定價二圓五十錢　普及版四六判　定價一圓
- 土田杏村著　現代哲學概論　菊判二百四十頁　定價一圓五十錢
- 土田杏村著　社會哲學原論　近刊
- 土田杏村著　戀愛の諸問題　四六判四百頁　定價二圓三十錢
- 松岡讓著　法城を護る人々　全三冊　各冊九十五錢
- 佐藤春夫著　殉情詩集　田園の憂鬱　近刊
- 松岡讓著　憂鬱な愛人　近刊
- 岸田國士著　落葉日記　新菊判二百八十頁　定價一圓八十錢
- 岸田國士著　屋上庭園　四六判二百八十頁　定價一圓五十錢
- 岸田國士著　チロルの秋　四六判二百八十頁　定價一圓五十錢
- 片岡鐵兵著　生ける人形　近刊
- 大田黒元雄著　ロシア舞踊　四六倍判　挿繪五十枚　定價十圓
- ロマン・ロラン著　大田黒元雄譯　過ぎし日の音樂家　菊判五百頁　挿繪十枚　定價五圓
- ロマン・ロラン著　大田黒元雄譯　近代音樂の黎明　菊判三百卅頁　挿繪十枚　三圓五十錢
- [illegible]著　大田黒元雄譯　[illegible]　[illegible]